

加號索引

- | | | | | |
|--------|---------|--------|--------|--------|
| 加山(蘆澤) | 香浦(後藤) | 霞岳(多田) | 香雨(戸塚) | 耕雲(細谷) |
| 香水(小橋) | 个个(竹處事) | 高洲(菊地) | 耕岳(七條) | (小田) |
| 孝先(岡井) | 香動(鎌田) | 行敬(小西) | (中山) | 高幹(富家) |
| 稼矩(宮本) | 諧(美馬) | 感通(井上) | 巖山(秋山) | 亥吉、勝次 |
| (山田) | 高美(京極) | | | |

ヨ之部

良峰 安世 (來寓人)

は桓武帝の皇子、大納言を兼ね、淳和帝の勅によりて經國集を撰む、天長七年七月薨す、年四十六、良峰は入道して富貞とも云ふ。

安世の當國に於ける事蹟は左の如し

長尾寺記に當寺は天平十一年行基の草創にして、天長二年此國の刺史良峰安世と云ふ者諸堂を修造し地名に因て、今の寺號に改むとあり。

承和年中安世卿の行基作藥師佛を小倉寺に與ふと全讚史に見ゆ

吉廣兵庫頭

香川郡安原村字下村にありし、吉廣城(東谷にあり)の城主なり、文治年間屋島の役源軍に屬し、功ありし人なり、(佐藤幣無太夫の項參照)

吉田彦右衛門其弟孫右衛門

鹽飽の海賊頭たり、天正十四年十一月秀吉の命を受け、島津征討軍に参加し、讃岐軍人輸送の任務を帯び、九州に出張せしが、讃岐軍豊後戸次川に於て敗績せしを以て、残兵を收容し歸國したり。

吉田三右衛門

彦右衛門の末孫、天正十五年八月生駒正規に祿二百石を以て召抱へられ、手船の事を掌る。

吉田玄蕃

香川郡中村の城主にして、香西氏の部下なり、年代は天正前ならん澁柿地蔵は吉田の墓なりと言傳ふ、

横岡八郎

香川郡大野村南城の城主にして、十河存保の子孫なりと、天正年中の人。

横井丹俊守光政

香川郡横井城の城主なり、光政は細川頼春の臣にして、諸所の戦に功あり、曆應年中に横井池内の兩村を賜ひ、築て居れり、光政の後秀政、光久、直久、榮久、知久、久家元正の數代を経て、天正中に亡びたり

用兼

用兼は永正頃讃岐に生る、俗姓は戸田氏、字は金岡と稱し、曹洞宗の高僧にして安藝國洞雲寺の開山として知らる、幼より俊敏十一にして剃髮す、偏く禪門を叩き。龍文寺大庵に參禪し、親炙多年、仲心に依りて、心要を發明す。永平寺に出世し爲宗の法嗣となる、後洞雲寺の開山となり、又周防に一寺を翺めし等功績多し、永正十年十一月五日後住章山に院事を囑し行脚し、其終る所を知らずと。

吉造

吉造は矢田孫兵衛の奴僕なり、延寶二年正月五日孫兵衛死亡す、老母及息子三人ありて身を寄する所なし、是に於て吉造その三子を香火院に托し、老母は引取りて自ら養ふ、自分等夫妻は粗食に甘んじ、老母には精膳を供す、之を敬すること昔日の如きを聞き英公大いに感じ吉造を召して、二口糧及支俸五石を賜ひ足輕とし老母に二口糧を

給し、三子はそれごとく各公子に仕はしめたりきとぞ。

吉田敏重

字子訥、號春坡、丸龜の人、詩書を能くす、弘化頃の人。

吉田盛重

名盛重、通稱孫左衛門、丸龜人、屋號笠嶋屋、天保十一年九月歿す、年六十八、芝山持豊卿の門に入り、歌を能す、○松浦、さ、波のよるべやいづこ朝朗に沈む志賀の浦波

吉田満勢

名満勢、丸龜南條町の人、屋號笠嶋屋、○芝山持豊卿の門に入り、歌を霞す、嘉永三年三月歿す、年七十、○蛙、せき入る、程も荒田の水口にいつよりなれて蛙なくらむ

吉田恒重

名は恒重、字は子徳、菊坡と號す、通稱正左衛門、吉田盛重の子、丸龜人、詩文書を能くす、○後高松に來り、中村尙孝に歌を學ぶ、明治十四年二月歿す、年七十○立春

きゝなる、小川の水の音するは岩間の氷とけやしぬらむ

團扇

月様圓圓裁得工

簸揚隨手發清風

一揮不獨驅炎熱

併破蚊軍奏異功

吉田蕃教

名蕃教、通稱初甚助、後八兵衛、又甚助に復す、高松人、吉田蕃實の子、○弘化二年元占格、安政八年三月歿す、○著書神樂催馬樂歌辨解、○檜屋集に奥書す、三冬門人なり。

吉田垺野

通稱要人、號清逸、又垺野、長躬の男、○馬術劔法に長す、又著色書を能す、五山と友たり、弘化三年十月歿す、年三十九。

吉田鶴仙

名亮、字其淵號真逸、又鶴仙、或は鶴真逸とも歟す、通稱駒助、丸龜藩士、○本姓秦

又後吉良と改む、○經を古賀精里に受け、書は米市を習ふ、敬止堂助教となる、詩書を能くし、一管の筆を携へ諸國を漫遊す、有名な河野鐵兜は初め鶴仙に學びしなり、○燕石の親友にして博を廢せん事を諫めし事あり、是に對する答案、燕石全集二八二に出づ、就て見られよ、○安政三年の交七十餘歳で没す、然し何處か他國で没したか其没するや燕石は左詩のを作り、大に悼んで居る。

悼鶴翁

柳東

豪氣如霓瞿鏢翁、訃音乍到感何究十圍大腹韓公態、三尺長髯蘇子風、文底文章非月露胸中籌策自英雄、時平利器無由試、老病應羞牖下終

吉田擴齋

名正達、字士充、通稱保次、號擴齋、堂號居山堂、實は和泉正次五男、吉田氏を嗣ぐ那珂郡金藏寺人、○始め香川克齋に學び後、豫州小松近藤篤山に經を學ぶ、曾て本縣教員となる、明治廿四年十一月九日歿す、年六十九、○著書擴齋遺稿、○廿五年十二月久保羅谷祭文あり、○金倉寺看櫻、櫻花雨後一番新。滿院風香二月春。暖日輕杉門外路。相逢半是賞花人。

吉田達世

名達世、高松吉澤屋小平の母、天保嘉永間の人、○歌を能す、讀岐名勝團會に出づ、○沖松島、もしほ焼く烟も添ひて打向ふ屋島の山に霞たなびく。

吉田藏六

通稱格右衛門、號藏六、天保頃の人、人物書を能くす、此人は高松藩士の定府にして明治十五年の頃高松市兵庫町にて、吉田梅仙堂と號して筆墨店を營み居りし人の先代と聞けり。

吉田實

字元侯、號暮溪、西讀の人詩牛の友人にして詩を能くす、文化頃の人、

吉田清音

清音師、號兎月、又鷲峯と云ひ、綾歌郡端岡村、徳清寺第十三世吉田靈音の第三子なり、幼より學を好み、年少の頃九州に遊び、漢詩文を廣瀬淡窓、恒遠醒窓の二翁に學

び、三十一才まで苦學し、同年歸郷し、生徒に授く、後本山の司教となり盡すところあり、明治三十九年五月二十日寂す、行年九十。

良野華陰

名云之、字伯耕、通稱平助、號華陰、那珂郡吉野人、元祿十二年生る、○少時俠氣あり、江戸に遊學し、擊劔を長沼不遠齋に受け、經學は林鳳岡に受く、其學朱子及漢唐宋明諸子析衷なり、明和七年四月三日京都に於て歿す、年七十二、東山法華寺に葬る私諡○文惠、○著書、華陰良論、詩評集解華陰文集、等あり、○京都にて字三良平と稱せらる、字三は字野三平の略、良平は良野平助の略、二人の篤學を稱せし語なり、良野は即吉野、同訓を取る、先哲叢談に良華陰とあり、姓を修せるなり、華陰の後姓を新名と改む、先哲叢談に秦氏とあるは誤り。

吉本復齋

名懋、字子德、通稱榮八、號復齋、高松藩士久長の子、幼より讀書を好み、詩文書畫を能くし、殊に筆力端麗也、少壯昌平黌に學び歸りて、考信閣講道館出仕となる、嘉永元年正月歿す、年三十五、弟子馨齋及び復堂あり、

著書に復齋遺稿あり序文は其師長かりけり

吉本馨齋

名琢字成卿、本姓窪田氏出でて、復齋の弟子となり、昌平黌に學んで、詩文を能くす明治元年閏四月選はれて公用人となり、京阪に出張し、國事に盡す處あり、維新後居を香西に徙し、子弟を教育せり、明治三十二年十一月三十日歿す、年七十四。

吉本氏斐

名氏斐、通稱初百之助、後彌之助、父は氏芳、高松藩士、○弘化三年勘定所、慶應三年作事奉行、餘暇歌を能す、同年八月歿す。

余悟半溪

名侗號半溪、高松藩士、天保安政頃の人、○恬齋集に、賀余悟半溪卜居排律あり、結句、先醒愛教育、端坐獨申とあり、漢學者なり。

吉成高好

名高好、通稱左志摩、香川郡鷺田人、世世鶴尾八幡社司、父は秀富、○安永七年襲職十五年正月歿す、享和中京都下加茂安藝祐熙に歌を學ぶ、又有職故實に通ず、遺稿、萬葉集爲已、歌集、及神路山たどり草あり、○固淨と歌を以て交る、固淨の催せる西行六百年忌追善集に、八十首載せらる、名秀林とあり、即高好の事、此人、揚分潮の壽命を豫言して中れる事あり、○十三夜、かねてより後の今宵と松風に隈なくすめる峯の月影。

吉成好謙

名好謙、通稱薩摩、後讓と改む、高好の子、文政元年社職を襲ぐ、○初父に學び、次に歌は藤井高尙、詩は三木半村に學ぶ、又三冬、惟恭、梅村、沖堂、松浦等と交遊し和漢學を修む、文久二年閏八月歿す、年六十四、墓銘梅村撰す、○半村集に好謙を成士讓といへり、之に據れば、字士讓といへり、○好謙其名の如く謙徳あり、松平頼覺之を賞し、梅村之を記せる事あり、○舍號五十榎舎、○著書、讀岐廿四社案内記その他ありしも盜難に罹るといふ、○辭世あな嬉し、死ぬる今はに數へ見れば憎しと思ふ人一人もなし。

吉成好信

名好信、通稱初進太郎、後長人、號弦山好謙の子、○嘉永六年襲職、上総介と稱す、漢學を梅村、國學を三冬に受く、明治二年皇學寮助教となる、後隱居教授す、同三十二年七月歿す、遺稿詩歌各一卷、○落葉山夕照、峯も尾も木葉残らす落葉山隈なく照す夕日影哉。

吉田東村

通稱一万太郎、號東村、丸龜人、本姓吉良、鶴仙の子、○儒學を能す、○維新前徴されて薩摩の儒臣となる、明治の初年没す。

横山關雪

通稱武兵衛、號關雪、丸龜人、○法橋關月、又東野に就き、人物畫に巧なり、後法橋の稱を受く、文化十二年三月没す、年四十九、○法橋本僧位名、當時畫師にも轉用す

横田忠祐

は三豊郡大見村の人、横田國造の男にして、嘉永二年八月の生れ、文久三年より四ヶ年間書を宮部丹崖に學び、後畿内中國を遊歴せり。

横田 輓甫

名行篤、通稱精一、號輓甫、丸龜藩士、○經史を渡邊中村二氏に學ぶ、明治四十三年歿す、年七十八。

横田 飯嶺

號飯嶺、天保頃の人、○詩を能す、○栗洞展觀錄にあり。

横山 穡

字有秋、號東臯、宇足郡岡田村の人、藤川三溪の門人にして、詩を能くす、安政頃の人。

横内 新藏

新藏は三豊郡和田村梶谷の人にして、父を彌平治といひ、幼より孝心厚く常に親の心

を心として孝養至らざるなし。或る時は寒夜屋外に佇立して、父母の動靜を窺ひ、又朝夕暇あれば膝下を訪れて、種々慰安し一刻も孝心を忘ることなし、且つ法度を守り夫婦和合し、兄弟相助合ふ等、人の模範とするに足りしかば、藩主より金穀を賜ひてその孝養を表彰せらる、享和元年七月十七日病没す、享年六十六なりしと。

米澤 雪庭

米澤雪庭は醫を業とす。始め宗仙、後雪庭と號す、頗る奇人にして、妻子なく又僕婢なし。草庵に獨居し、病を療する神の如し、貧民に施薬し多くの人を救ふを樂しみとす、享保中の人、宮脇村に祥福寺を建立し一切經を寄附す。

吉田 犁遊翁

は元高松藩の祐筆にして、筆札に工みなり、廢藩後は多くの子弟を薰育せり、後ち居を弦打村に移し、悠々老を養ひ居りしが、明治四十三年八月八日九十四才の高齡を以て逝けり。

吉田 嘉代次

は資性温厚徳望あり、丸龜市立城乾小學校長として、教育界に在る事、前後三十年餘文部省より教育功績者として表彰されたり、氏は又成蹟と號し、和歌俳句などの嗜もありしに、中風症を患て大正四年七月五日歿す、年五十八。

賴 富 實 毅

大川郡富田村大字南川、賴富傳六の二男に生れ、天性學を好み、十一才にして佛門に入り、阿彌陀寺實乘に從て剃髮し、十六才、白峯寺貫主剛成に從つて、傳法入壇す、進で旭雅、雲照、龍暢の三大和上に從つて、佛學を研鑽し又一面藤澤南岳の門に入り漢學を修む、學成り歸りて三豊郡本山寺の住職となり、寺門の興隆に盡瘁したるのみならず、兼て左の事業を遂行したり、
明治十五年高松高野山出張所惣係、讃岐宗門管理同四十四年權大僧正、大正二年山科大本山勸修寺新門跡となる、又宗家に盡せし事業は、讃岐中學林創立、高野山出張所創立、高野山大學林建築、私務にては津田に法道寺新寺開基、本山寺五重大塔建築等師又方位學に達し、遠近來り指示を請ふ者多かりしと、大正五年六月廿一日遷化行年七十一、同年七月九日本葬執行、會葬寺院百十八、會葬信徒五萬人以上ありしと云ふ同五年十一月三十日贈大僧正。

與 號 索 引

容 江(谷口)

容 民(松平)

四方吉(平賀)

夕之部

手置帆負命

は上古の神にして、土木建築の事を専ら掌られしなり、天照大神が、御弟素戔鳴尊の犯し玉ひし暴狀を怒らせられて、天岩戸に隠れられませし時、御殿を造營され、後讃岐忌部の祖となられ、其子孫よりは代々予竿を八百本造り、朝廷へ献納したりしなり古語拾遺に左の記事あり、命の墓は三豊郡笠田村大字竹田字産土神社にあり。又手置帆負命之孫、造予竿其裔今分在三讃岐國、毎年調庸之外、貢八百竿、是其事等證也。

武鼓王

は日本武尊の第五子（母は吉備武彦の女吉備穴戸武媛）にして御父日本武尊讃岐近海の大魚を平げ、海路の安寧を圖り給ひ、遂に封を阿野郡に受け、民を治め給ひ、綾公の始祖となり給ひ、國人讃留靈王と稱す、御墓は綾歌郡法動寺村にあり。景行紀に曰く、日本武尊妃吉備武彦の女穴戸媛、武鼓王を生む、十城別王と其兄たり

武鼓王是讃岐綾君の始祖なり、綾氏系圖に武鼓王、爾彌麻命、奈鬼爾麻命、竈王、多富利大別命、日向王、多郡君、依志君（一日意止之古君）奴乎古君石床、業長、藏拾、季世、百行、能臣（一作能呂）定時、貞清、行隆、貞宣、堅石、大山鷹、圓鷹等世、相繼で綾郡を領れり、日向王より以來綾の大領たりと云ふ、此王を讃留靈王と稱する事讃岐人の知る處なり、又大碓命とする説あれどそれは如何なり、御名字卯を鼓に作る鼓は殼の誤にて殼共に「カヒコ」と訓む。

武鼓王は日本書記亦武卯王にも作れり、古事記に建員兒王とあり、古事記傳に、本居宣長云ふ、殼の字今本に鼓と作るは誤なり、即ち武卯王とも書するにて、殼なること著し、舊事記に別に、武養靈命と云ふも擧げたるも、別にはあらず、此の御名の字の異なり。さて、殼の字は、字書に卯甲と註せる意を以て、加比古に用ひたるなり、文選潘岳が西征の賦に危素卵之累殻などもありと云ふ。

王は仲哀天皇の御宇に至りて、齡百二十三歳にて薨し給へりしを、井上里に葬り奉るを、後人讃岐に留り給へるを祝きて讃留靈王と稱し奉れり。

御墓は村の東、日吉と云ふ所の南北に亘れる、卑き岳山の上に在て、其兆域東西二十五間餘南北六十七間に餘れり。

高松 頼重

は山田郡喜岡城の城主にして、三郎と稱し勤王家なり、攝津頭頼光十代の後土岐隠岐守光貞の男にして、初隠岐孫三郎と言ふ、舟木氏の祖なり、北條家執權の時美濃國近江國に於て領地を給ひ、伊勢國の守護となる、後當國高松庄に住して、諸郡の事を管領す、後醍醐天皇東征の時頼重の男頼春以下勅宣に従ひ、官軍に參る北條家は母方の縁ありと言へども、高時の政務の不正なる故なりとて従はず、事顯はれて一族頼兼以下高時が爲めに殺さる。建武二年十一月廿六日細川定禪鷺田庄に於て兵を擧げ、屋島に政寄せ頼重が、老父並に一既十四人郎等三十四人其場に於て、討死畢はんぬ云々と太平記に見へたり、高松家は十二代にして、天正十三年に滅びたり。

高松左馬助頼邑

は頼重の裔なり、道勝と諡す、世々高松郷を領す、喜岡城に居り香西氏に屬し、秀吉に降らざりしを以て、天正十三年四月廿六日、浮田、黒田等七師二万三千人を以て攻められ、頼邑二百餘人を以て防戦すと雖も、衆寡敵せず終に名譽の戦死を遂げたり。

高松内匠頭

は左馬助の子なり、性勇猛にして、武術に達し、特槍術を能しす、慶長年大阪の時、秀頼に招かれ、冬の陣の時鴨野にて、一番槍をあはせ、功名し明る、夏陣には木村長門守が手に屬し、五月七日若江合戦に、井伊掃部守の手に伐かゝり、高名すと云へ共其時長門守は戦死し、大阪落城せしかば、紀州に遁れかくれ居しに、其後大阪落人赦免ありしかば、故郷なれば讃岐へ歸り、生駒家に仕へ天壽を全ふせりと、寛永頃の人

瀧宮 豊後

名は安資と云ひ、綾歌郡柵木城の城主なり、妻女は羽床伊豆守の長女なり、天正七年香西佳清妻女離縁の事より、香西氏と羽床氏と不和になり、豊後は香西氏に與したれば、其の爲伊豆守に攻められ、同年香西に逃れり、豊後幾内、四國の戦になれて弓矢功者なれば、天正十年八月五日土軍攻入の時、伊勢馬場の合戦に伊賀守が陣代として一千餘人を以て押出す、同日一本木のそばにて、敵彈に中りて死す。

瀧宮彌十郎某

綾歌郡瀧宮城の城主なり。天正七年香西氏之を伐て、彌十郎禦ぎ戦つて死す、其子某去つて、十河存保に依る、十河氏亡んで、十河郷西尾に住み庶民となれりと云ふ。

湛

慶 (高公輔)

讃州刺史高公輔、幼にして、慈覺大師の室に於て、薙髮し、法名を湛慶と云ふ、義學の名あり、然して戒檢に倦み、俗に反して、仕へて、侯牧に至る、俗に高大夫と號す當時京師に怪あり、勅を受けて奏し、東山なる安祥寺の歳久ううして、兩界の諸尊傾斜差舛せるを知らしむ、詔を受け白杖を以て指揮し、忽ち杖に隨て、各位置につくの奇妙を現はし、人々をして嘆稱せしむ。

橘右馬太夫公成

は永曆元年頃の讃岐目代たり、水主神社の記中に左の記事あり。

六條帝の仁安中、讃岐刺史、右馬太夫、橘公成及其子、右衛門公清最も水主神社を崇敬す、載て舊史にあり云々。西讃府史には東鑑にある、橘公業と同人ならんといへり

橘太夫盛資

橘太夫盛資は、詫間の城主にして、壽永三年正月平家に背ひて、源氏に應じ都に上つた

大 夫 黒

藤原秀衡の義經に贈りし名馬、初め漆黒と云ひしか、義經五位尉に叙せられし時、此馬に乗りしとて、太夫黒と改めしに、屋島の役(元暦二年)繼信忠死を遂げ、義經深く、之を哀傷し繼信を葬りて、此馬を志度寺に送り以て、繼信弔祭の料に換へしに、或時逸走して、繼信の墓前に斃れたりと、墓は繼信墓碑の傍に在り。

詫間遠江守及彈正

詫間氏は三豊郡詫間の城主なり、元は東國の人にて、何年頃に當國に來りしものか、讃岐の歴史に明記せるものなきも、元弘頃尊澄法親王當地に流され給ひし時、隨行せし一族ならんかと思はる。而して爾後勢力を得て、多度、三野、豊田の三郡を領て居たるもの、如し、建武三年細川定禪が、當國坂田にて兵を擧げし時、詫間氏も其れに應せしを見れば、其時は既に勢力家なりしと見ゆ、文明十一年京都にて戰死せし、香西家資の室は詫間氏より嫁せし女なれば、其頃は榮へ居りしものなりしも、其後明應の頃嗣絶へたるもの、如し。

或書に左の記事あり、錄して参考に資す、城は山の上に有、後詫間豊後守と云人住り天正の土佐亂に亡びたりと、云々。

詫間 三郎

は元弘頃詫間の城主にて、尊澄法親王をお預り申せし人、されば此時代の守護代ならん、西源院本太平記に詫間三郎に預けらるゝとあり、されば詫間三郎が預りて暫しの間詫間浦に置奉りて、松山におちつかせ玉ふを、かく書玉ひしにや詫間三郎と云ふは此時守護代などにて、彼浦に住せし人とおぼしきなり、云々と西讃府史にいへり。一本に妙法院、二品親王此地へ配し奉る、守護詫間治郎、是絶之を預り奉るとあり、然らば三郎と異名同人ならんか。

高橋 保遠

は時遠とも云ふ、承元年頃の瀬飽島の地頭にして、駿河權頭入道して、西忍と稱す、折柄其時、法然上人流され玉ひ、承元元年三月廿六日着岸あり、保遠が館（本島笠島城の處）に寄宿したまふ、西忍薬湯を設け美膳を整へ様々にもてなしまつる上人、念住往生の道細かに授け給ひ、上下歸敬し、保遠も大に上人を信じ、遂に入道して、西忍と稱せり。

高橋家は南北朝以後笠島に居城を構へ居たり、其西麓の市街を根城と云ふ。

鷹見 周吉

名周吉、高松穆公時代の人、彫刻の名手、公命により千鶴を刻す、阿野郡法勤寺村に野鶴のあるを見て、之を作るに甚妙、後妙技を斗米に賣るを恥ぢ、國を去ると云。

高篠 三郎 太夫

名清房、佐渡守と稱す、建保頃の劔鍛冶、那珂郡高篠に住す、○子孫府中志度香川に散す、縣史に、太を大と書けど、我國の慣例は太夫、漢籍の例は大夫なり。

俵 退藏

元播磨國赤穂藩士、木村藤太夫の長男にして、享和三年二月十五日生る、幼名を初太郎と去ひ、中頃發太郎と改む、後俵退藏と稱し、逍遙園と號す、少年の頃豊後國帆足萬里に従ひ、學を修め研鑽大いに積む、文政五年孟冬大阿闍志獨尊雄より、護身法を受け、天保二年小豆郡大部村に來り、次で、四海村に移り更に淵崎村に出でて、八代田家に寓す、後一家を建て、塾を開きて子弟を教ふ、淵崎村及土庄大鐸等にその訓陶を受けしもの多し、明治十四年八月二十九日歿す、年七十九。

多田和泉

大川郡志度城の城主にして、安富氏の部下なり、此所を和泉屋敷とも云ふ、年代は長祿年頃ならん。一説に此城は安富山城守盛長の出城なりとも云ふ、然らば多田和泉が此城をあづかり居りしならん。

田村左衛門時定

田村左衛門時定は、木田郡永上村中坪の城主なり、時代は天正前ならん。

田村親光

鶴足郡栗隈の城主なり、
(参照) 栗隈城湯船城口湯船山上にあり、長尾元高の四男田村上野守親之に居たり。
古城史には田村右衛門尉高純とあり。

田中道源

山田郡庵治村田中城に居りし人、道源父を長左衛門政久と云ふ、備前浮田家に仕へて

三千石を給はりしが、男長左衛門仕を辭して、剃髮なし、道源と改め、當國庵治村に寓居せり、其子勝左衛門は生駒家に仕へて、浦山代官となりしが、同家没落の時、浪人の身となれり。

高木隼人信好

細川勝元に仕へ、應仁中戦功あり、邑を綾歌郡坂本郷に食む、其子を左兵衛信武と云ひ、其子を但馬介好政と云ふ、大永年間邑を失ひ退て、宇多津に居れり、數世の後高木孫兵衛あり、生駒氏に仕ふ(祿四百石) 弟與左衛門亦生駒氏に仕て(祿三百石) 子二人あり、長子は即ち力持の宥通是なり。

大川長老

高松市法泉寺の開祖にして、豊臣秀吉の歸依僧なり、天正十五年生駒近規封を當國に受け、將に任に赴かんとす、秀吉近規を召して、曰く、我歸依僧大川長老、今讃岐にありと聞く、汝封地に赴かば宜しく面晤すべしと、是に於て近規遍く、之を搜索せしに、志度浦海藏庵に住せしを以て、一寺を宇多津に建て、之に住せしめ、菩提所とす即法泉寺是なり。應長三年生駒一正此れを高松に移し寺領を寄附したり。

高原左衛門其子左助

直島の海賊頭なり、天正十四年十一月秀吉の命を受け、島津征討軍に参加し、讃岐軍人輸送の任務を帯び、九州に出張せしが、讃岐軍豊後戸次川に於て、敗績せしを以て其殘兵を收容し歸國したり。

高原文左衛門

直島高原左介の庶子なり、天正十五年八月生駒正規に祿三百石を以て召抱へらる。

田宮小太郎

は田宮源八郎の子なり、源八郎紀伊より丸龜に來り住む、時に丸龜藩士堀源太左衛門は、源八郎が劍術に勝れたるを嫉み事に托して斬殺す、時に寛永二年三月なり、其後源八郎の遺腹の子生る、即小太郎にて坊太郎と呼べり、性質賢くて人に譽めらる、幼にして江戸に至り、柳生氏に仕へ劍術を習ひ、十七歳の時歸國して復讐を願出づ、父の撃れし處とて、國分八幡の境内に十八間四方の塚を結び、兼て母が金毘羅に心願せし靈驗ありて、遂に源太左衛門を撃果して後僧となり、再び江戸に往き、東叡山の北に

住み、正保二年三月三日年、二十二にて歿すと云ふ、此事田宮物語、金毘羅靈驗記、金毘羅利生記など云ふに名高し、されど時所人皆異同あり、事實未詳なれど、丸龜市南條町、京極家菩提所玄要寺に田宮小太郎墓と傳ふる者あり。(讃岐名所歌集)

但馬四州

號四州、又覺痴、文化頃東讃人、〇詩を能す。

但馬來山

諱は止順、號通隱、字來山、字を以て稱せらる、もと東濱村農家の子、幼より學を好み、詩文を城山に醫を千植弁峴に學び、後浪華に至り、春田横塘の塾に入り、詩文を學び、吉益南に就き醫を學び、歸りて開業して藩の表醫師となる、天保五年五月廿八日歿す、年四十六。

多賀壽昌院

は京橋忠高の女にして、才氣すぐれ、歌よみ文かくことを好み、長じて老臣多賀宮日常良の室となり、一男子を生みしが、程なく夫君歿せり、因つて其子を二なき忘れ

形見と思ひ朝夕にいつくしみ居りしが、六才になりし時、藩祖高和養子となし、江戸に連行かれる事になりて、母の手許をはなるゝやうになりたれば、壽昌院はそをほいなくかなしき事に思ひて、其感想をかゝれ、それを涙草と題してせめてもの心やりにされたり、今に其書丸龜邊に遣りおれり、江戸に下りて玉ふ時別れをしみて。

小車の、めぐりあふせも、たのまれず

我玉の緒の、限りしらぬは

諸共に、行へき身にもあらなくに

涙ばかりや、先にたつらむ

多賀源助

生駒高俊の重臣（祿千石）にして正義派なり、寛永十七年七月廿四日幕府へ對決に出でしが、事件落着後構ひなしとの言渡あり、子孫は丸龜にありと云ふ。

多之助

多之助は山田郡小村の政所某の子なり、父病めるを以て里正の事を執る、寛永二十年夏大に早せしを以て、村民地租を納め得ざるもの多し、其米額凡十八石、當時地租は

其年十一月二十八日を以て皆納の期とす、期に及んで藩吏召して之を責む、時に多之助の家田二百石を有すれば、之を窮民に責るも、遂に納むること能はざるを以て、私財を出して之を償はんと請ふ、藩吏之を許す、時に藩主の小性に大村兵藏と云者あり之を聞き藩主に告げて曰く、彼不遜なり名主の分際を以て、地租を代納せんなどは何等の奇怪ぞ、之を容して刑せずんば何を以て衆を懲さんと、依て之を刑に附す、藩主其實を聞き急使を馳せて刑場に至らしむるも、已に刑死せられし後と云ひ屍は、山田郡夷村（木田郡木太村）に埋む、遠近之を聞き悲泣せざるものなし、里人之を謠ふ其一つに「小村多之助、十九で世帯二十一期は木の空」にと以て其の人を感せしめしことを知るべし、高松藩制に毎年六月租税中の二分を分納せしむる慣例あり、是多之助の事に依て起れりと、當時世俗六月の納租を首切り勘定と云ふ、其父は追放せられ石見國に往き士籍に列せられ、小村平之丞と稱せしと。（香川縣史）

多田春江

號春江、文化頃、東讀の人、○書を能す。

多田溪雲

名瓊、字公藍、號溪雲、文化頃佛生山の人、○書を東溪に學ぶ。

多田碧梅

名政歴、通稱初義左衛門、後休市、號碧梅、高松の人、○山水を能す、天保十一年二月歿す。

多田青筠

名政征、通稱周助、號青筠、碧梅の子、佛生山人、書を能す、弘化三年五月歿す。

橘 尙賢

名用、通稱文山、又汝山、又長安、又長庵、又尙賢、高松藩侍醫、父は尙貞、○文學を能す、嘉永二年八月歿す。

多田棹好

通稱藏六、號雁廼舍棹好、高松人、安原枝澄の弟、○友安三冬に學び萬葉に通ず。通短歌狂歌を能す、○水、波の立つ山吹瀬の水はしも花こそさけれ實やは結べる。

○晚年藏六庵、菴翁と號す、明治三十八年五月歿す、年八十三。

多田甚作

通稱甚作、佛生山刀工、○初吉光人嘉太郎に、後大阪人黒田鷹謀に學び、秘術を得て名を鷹成といふ、寛政頃の人。

多田霞岳

通稱八左衛門、號幽谷、又霞岳、塞川郡田面人、○畫山水を能す、慶應元年五月歿す年六十一、○嘉永頃白牛牧者と號す、篁山に贈詩、何當萬壑霞深處、聞笛尋君牧白牛。

多田小筠

名政節、通稱百助、號小筠、又良馨、佛生山人、○醫にて書畫を能す、又其鑒識あり明治二年歿す、年六十九。

多田良年

通稱治平、號初龍年、後良年、那珂郡神野人、琴平住○書を能登人龍嶂に學ぶ、明治

九年三月歿す、年五十、

多田治平

小豆郡淵崎村赤穂屋の人、文化十年正月生る、幼名を安五郎と云ひ、俳號を清麥舎玉交と稱す、芭蕉翁門人、麥林舎乙由第五世の門人なり、常に座六子朔在水節水其の他の俳人に交りて、俳句を能くす、明治十七年八月八日死亡す、時年六十八。辭世 風成りにいつくへなりとちれ一葉。

多々羅文雅

小豆郡西村の人、元山口縣大島郡戸田村の人にて、長州萩溝願寺に於て得度し、天保九年西村阿彌陀寺十三世の住職となる。當時本寺の頗る頽廢し、本堂の如きは草葺にして風雨を防ぐ能はず、寺債亦多かりしを慨し、銳意復興に努むる所あり、弘化四年遂に本堂納屋土藏を建築し、尋て寺債を償ひ、尙土地を購ひて寺屬とせり。性勤儉にして仁慈に富み貧困者に對しては金錢物品を施與し、無償にて寺屬の田畑を耕作せしむる等の美舉數ふるに追なし、又公益の爲に身躬らを率ゐて衆を督勵し、土地の開墾公共營造物の建設等には献身以て計畫監督の任に當れり、御著橋の如きは其の私

財を捐て、架設せる所に係る、徳操高く檀徒の敬仰尊信甚だ厚かりしを以て村内に起る争論の如き一言にして解決成り、復た更に不平を唱ふるものなく、内海結衆中の長者として常に推戴せられたりと云ふ、明治廿八年四月廿八日享年七十六を以て入寂す當山十三世なり、同三十三年御室派管長より權僧正を贈補せらる。(小豆郡史)

棚次玉浦

三本松の人、篁山の友人にして、詩文を能くす、明治十年頃の人。

橘正

名正、高松人、文政天保頃、詩家○梅雨、五月黄梅雨、霏々亂似絲。冥烟山遠近。新竹翠參差。移局窓還暗。看畫漏較遲。幽栖幽興足。何必出門時。

橘母理美

名は母理美、號芳齋、又母理躬とも書けり、高松の人、和歌を能くす、筆蹟又美なり天保頃の人、志度の林氏左の幅を藏せり。さぬきがた、やへの潮路のかすむ日は、吉備のしまやま、とほざかるなり。

橘 良五郎

良五郎は天保三年九月鹽飽本島生の濱に生る、家世々建築を以て、其の家業となす、良五郎幼より、勤勉著實にして、技工に秀で、彫刻建築に於て、特種の技量を有せり善通寺五重塔、備中國分寺の五重塔、同國興福寺の本堂、山北八幡神社の社殿等、皆五良郎の設計建築せしものなりと云ふ、明治二十三年歿す、年五十九。

橘 如海

木田郡十河村光清寺住職たり、師は現代稀に見る篤信家にして、然かも、宗門行政の中堅人物たりしも、大正十四年九月十六日歿す、年五十八。

武内 兼善

名兼善、通稱達次郎、又興總、實は國方良直二男、武内和喜の養子、高松藩士、明治三十六年六月卅一日歿す、年八十二、歌を能す、○磐手山いほでもしるし君が代の千年をよばふ峰の松風。

武田 松陵

名享、字元仲、號松陵、高松人、父は茂啓、○年十二備中西山拙齋に遊學す、又綾川に學ぶ、文化十年六月歿す、年二十三、墓は綾川撰文、文化九年竹石展觀録の序を書けり。

武田 鼓溪

名吉貞、通稱汲齋、號鼓溪、香川郎淺野人、○詩は篁山に學ぶ、又歌も能す、明治四十二年九月歿す、年七十。

瀧 信彦

名初信秀、後信彦高松藩士、實は山下公忠三男、瀧信包の養子、○安永四年記録所を管す、○著書、古製大刀劔鞘卷の圖、書刀劔拔書、信彦雜書等。

溪 百年

名正尊、字士達、號百年、舍名を玉藻舎と云、讃岐の人なり、舊姓河田と云ひ、其先北越の人乃ち故河田豊前守某の後裔なり、初め郷に在る時、西讃白木蘭溪に學び、後東讃菊池菘溪に學び、明和七年の夏江戸に遊び、又京都に遊び又浪花に遊び、遂に此

地に居し文藻を振ひ、當時の名家と交り、天朝史略四書五經の經典餘師を著はし名を天下に馳す、博學多能にして經史百家曆數、兵學、和歌、俗謠、農圃、醫術等百藝に通曉す、書は草楷（瀧本流）体を兼ね能くす、寛政中鳥取藩に聘せられ、文武二道の教授たり、藩の砲術、荻野流は實に百年の始むる所なり、天保二年五月鳥取に於て歿す、著はす所經典餘師、四書十冊、同序一冊、小學四冊、詩經八冊孝經一冊、孫子二冊、二十五卷、校正七書正文、天朝史鑑、天朝史略、鬼神論等あり。

瀧 六左衛門

通稱六左衛門、香川郡百相人、○著色花鳥畫土佐家を學ぶ、用筆整然、明和五年四月歿す、年三十。

瀧 幻文

名婦美、又綾子、瀧六左衛門の女、西原氏六世吉兵衛の妻、○歌及畫を能す、文化七年三月歿す、年四十九、○畫譜に瀧幼文女高松人とあり、幼は幻の誤。

玉楮 象谷

通稱敬造諱は爲參字は子成象谷は其號なり、高松に生る、家世刀鞘を塗り且漆を賣るを業とす、敬造に至り頗る彫刻を能くす、其運刀の妙一見して、漢人と辨別すること能はず、特に宋代の堆朱堆黑及明人張成存星の籃骨漆法を究め、且本朝鎌倉風の木地彫を爲す、天保十年象牙方一寸の材を得て、荷葉五十五荷、花三十六、湖石二、龜三百四十三、蟹四百三十三、蛙四十、蝸牛二十七、蜻蜒二十四、蠅九、蜂十八、蜈蚣五雀十九、鷺七、翡翠十、鶺鴒一、鷺三を刻し之を藩主松平頼恕公に献す、是より名聲海内に遍し、其後藩主松平頼胤公の命を以て、堆朱の鼓箱を製す、最も精彩巧緻を窮む、乃ち擢て、士籍に列せらる、明治二年二月一日没す、年六十四、餘技歌を詠じ、蘭竹を畫く、寄鶴祝、君か代を千代に八千代に呼びかはす聲もあまたの和歌の浦鶴

玉楮 系譜



玉楮拳石

名琢、號拳石、又石仙、象谷の次男、○彫刻奇逸、醉中畫く所亦韻あり、明治十五年四月歿す、年四十九、○我先人屢拳石と歎む、拳石余が爲に猫を畫く、今其畫を失ふ、猫を見る度追懷す、○歌合の冊に、玉楮斯行とあり、拳石の事なり、歌詠せし事人多く知らず、○海上雁、故郷をうみ渡りてや白浪の仄に雁のなきて來つらむ、

玉楮藏黑

通稱敬藏、號槐庵、又藏黑、拳石の兄、○家業を能す、彫刻物に多く藏黑と歎す、父の號と通音字を取るなり、○歌は中村門人、歌名千畝といふ。

玉楮雪堂

名有禎、通稱爲造、號雪堂、又三生翁、象谷の三男、○亦家業を能す、畫に及ぶ、明治三十四年二月歿す、年六十三。

玉楮藤榭

通稱藤吉郎、號九江、又藤榭、象谷の四男、○亦家業を能す、畫歌に及ぶ、明治十四年八月歿す、年二十八、○我先人の印匣は藏黑兄弟四人の合刻なり。

玉井休叟

諱初信篤後行篤、字忠言、縫之助と稱し、老後休叟と號し、又知足と云ふ、舊藩世祿五百石を給さる、夙に學を好み、博聞強識、山鹿流の軍學に達し大番組に至る、安政三年致仕、爾後優遊詠嘯以て天壽を終る、明治七年七月八日なり、享年八十三。嗣子信敏あり、藩の參政たりしも、(明治元年)維新の際東海道岡崎にて、藩事に關し屠腹して死す。

玉井桃溪

名千代、號桃溪、信成の次女、○畫師狩野永笑に花卉蟲鳥を學ぶ。明治十三年二月歿す、年四十一。

玉井宗江 (月照の父)

幼名宗吉、多度郡吉原村農安右衛門の二男にして、幼時碑殿村牛額寺に入り、専卓和

尙の弟子となり、專海と改む後年高見島理正院に住せしが故ありて寺を出て鼎齋と改め備中諸寺に轉住せしも遂に還俗して、晩年大阪に移住し醫を業として玉井宗江と稱し平野町心齋橋筋西へ入るところに居たり、歿年不明（仲多度郡史）

玉尾退藏

名退藏、松尾人、○金光院主に事ふ、江戸にて佐藤一齋に學ぶ、嘉永二年院主齋舎を山下に起し、退藏を教師とす、○沖堂集に送序あり。

玉川竹溪

名秀信、號竹溪、○書山水を雪湖に學ぶ、明治二十六年十月歿す、年六十九。

田中維彝

名維彝、字士德、本姓高田、通稱彦右衛門、丸龜藩士、○近藤篤山に學ぶ、安政四年十一月二十八日歿す、年五十。

田中勝璋

名勝璋、通稱寛治、天保頃高松藩士、○歌を能す、明治前の人。

田中勝宥

名勝宥、通稱七郎、高松藩士、○歌を能す、明治前の人。

きのくゝのあかぬなけきに似たりけり
萩つき草のそてのわかれば

田中五峰

名正路、字子義、號五峰、又松堂、高松藩醫、○大雅風を學ぶ、山水花鳥、最も竹に妙なり、我讀唐畫の開基といふ、歿年未詳なれど、大約竹石前なるべし。

田村道啓

名道啓、通稱貞之丞、鵜足郡土器人、○歌を能す、寛政元年西行六百年追善集に歌八十首入る、

田岡梅莊

名雄良、通稱牧太、號梅莊、又精神舍、梅花村莊、阿野郡羽床上村の人、本姓松浦、自樂の男にして、田岡氏を嗣ぐ、○詩を沖堂、書を森南派に轉し東溟に學ぶ、後梅道人に倣ひ山水を畫く、明治二十三年十二月歿す、年八十三。

田岡梅溪

茂太郎は通稱、綾歌郡羽床上村の人、田岡留太（號木仙）の男にして、文久二年七月七日の生、書を田岡牧太（號梅莊）に學び能くす。

田岡凌雲

名賚、字夢弼、通稱小輔、號凌雲、丸龜藩士、忠真の子、○學を吉良鶴仙に受く、後江戸にて、安井息軒に學び、交を志士に結ぶ、尊攘論起るに及び歸藩幽囚、明治元年赦され明倫館助教となり、廢藩後郡書記となり、弟に栗軒あり、詩文に達せり、後私塾を開く、明治十八年六月二十二日歿す、年五十三。

田中杏園

丸龜の醫師、業暇詩を學んでよくす、文政頃の人、左の詩は浪華に至る時、舟中の作

なりと云ふ、圓龜相去纔三里、離席醉顏猶未醒、時飲煎茶空舉。

田中兼松

兼松は三豊郡和田村道溝に住す、父は商家として、阪神まで名を轟かせる房造の子、幼より農を好み、孝心至つて厚し、長するに及び、益孝養を盡くす、老母盲目となりては性來好める、芝居の見物のときは側にありて、詳細説明至らざるなく、又父の饅頭を嗜むや、數十年自ら作り置きて、之を供し一日として、缺きたることなく、近郷近在その孝養を稱せざるはなし、爲めに藩主及名東縣令より、賞彰されしこと再々なり、氏は三豊郡和田村道溝に住せしが、明治四十四年遂に死亡せり。

田中黃龍

俗稱は豊藏、三豊郡和田濱の人、田中多傳次の男にして、天保二年八月生る、書を名草逸峰に學び、東京及豊後國等を遊歴せることあり、明治年間の人。

田中陶後

藤三と稱す、高松市の人幼より學を好み、少壯大阪に遊び、藤澤氏の泊園書院に入り

勉學是れ努め、衆生の推す處となり、遂に其塾頭となれり、氏又初め兒島竹所に學び、後は元明の古書帖にならひ、南畫を能くし、氣韻頗る高く、好事家の珍賞する處となり、氏又理財術に長せり、大正十四年三月八日歿す、年八十一。

竹井松雨

名清卿、字元直、通稱衛盛、號約齋、又松雨、又痴仙、又靜所、高松人、曾て師受なく、古人の畫論遺墨を師とし、三府其の他を遊歴し研鑽して、詩書畫を能くす、中年以降琴平宮に、後白峰神社に仕へ、因つて居を林田に移し、明治二十五年七月歿す、年七十五、館號松濤館。

竹内雲崖

通稱又三郎雲崖と號す、綾歌郡羽床村の人、氏の家系は米田竹内氏より分家し、夙に素封家の閑えあり、文武兩道に達し、文學方面に造詣深く、詩歌書畫を能くす、又武道は航術に秀づ、嘗つて文政年間京都三十三間堂、江戸深川にて千矢を試み、名譽を得たり、松平讃岐守之れを聞き、藩廳に召し、廩米五十苞、中寄合格を以てするも固辭して受けず、去つて京都智恩院に入り、其の用人となり、後徳川幕府に召され、列

藩諸侯の弓術指南役となる、著す處弓術一卷あり、歿年不詳なれども、其筆蹟を見ると文化乙亥（十二年）に書きたるもの多きにより其時代の人ならん。雲崖の曾孫月海某維新以前まで徳川將軍慶喜公に仕へ居たりと云ふ。

竹内以德

名初政徳、後避けて以德モチノリとす、通稱初萬三郎、後與四郎、老後友鷗、高松藩士、○歌を能くす、安政五年致仕、○木村重成、五月雨に花うち散し橋の香しき名を世々に殘して。

竹内錢嶺

名は長政、通稱全吾、綾歌郡瀧宮村大字小野村の人、幼より學を嗜み、弱冠にして奈良松莊、藤川三溪、片山冲堂に就き、漢學詩文を學び、書は舟舩に學び、山水花卉を畫く、書は龍燈院住僧綾川に従つて習ふ、維新前は、祖父竹内安之進の後を承け、附近の子弟を自宅に集め教授す、明治初年以來は飯山中學校教諭となり、育英に従事し、後戸長となり、村政に盡すところありしも、明治三十四年八月廿一日歿す、年六十九。

竹内 湘雲

字長嘯、通稱甚造、三本松竹内某の妾腹の子、詩文を能くし、兼ねて南書に巧みなり、高松市に住し、書畫骨董商を營み、時に中國九州邊に遠征を試み居りしが、明治二十二年歿せり、年六十餘才。

竹内 寒水

幼名宗八、龍谷と稱す、號寒水、高松藩奉行、竹内茂家の實弟傳左衛門の長男なり、幼より僧籍に身を委ね、中年頃作州津山の某寺、後大川郡鴨庄西方寺の住職となりしが、其の後還俗して、豊後國杵築に住し、畫家となり、諸國を遊歴し、揮毫に従事しつゝありしが、明治四十二年十一月廿四日歿す、年四十八。

竹内 綠

は高松市八番丁の人、竹内流小具足の捕手を能くす、其先は作州津山の人、竹内中務大輔久盛の子捕手の流を創む、其子源大夫久次なる者高松に來り、源英公に召抱へられ、藩士を教養す、綠は其九代目にして、小具足を能くし、廢藩後邸内に道場を開き

子、弟を教養しつゝありしが、大正十一年二月二十日歿す、年七十三。

竹本 布太夫

小豆郡四海村伊喜末の人、通稱岡本榮兵衛、丁年の頃大阪に假住し、川船乗を業とす、傍ら義太夫を修業し、後ち之を本業として、藝大に進む、嘗て江戸に出て、將軍家の御上聞に達し、聲價顯はる老年歸郷、稽古場を開く、門人多し、文政十三年四月廿三日歿す、濱中墓地に義太夫本形の墓表あり。(小豆郡史)

谷川 梶之助 (初代)

は讃岐高松の力士なり、容貌端麗身の丈六尺三寸、体量四十一貫あり、強力無雙にして、之れと角して勝つものなし、泉州堺の力士八角楯右衛門、之れに勝んことを願ひ其の工夫を行司尺子一學に問ふ、一學教へて、曰く、尋常の手段工夫を以て、谷風に勝んこと尤も難し、但し彼が場に上るや、性急にして、氣力正に張る、卿是に於て、直に之と相撲たす、彼が挑みに應せず、「待た」を言ふこと數回、彼が氣惰るを伺ふて急に彼を襲はば庶幾くは勝つ事を得んと、八角此の教に遵ひ、京師及大阪の場に於ては各一回の勝を得たり、然れども八角の、「待た」を言ふこと後世鄙劣の模範を遺し、

人の指笑を買ふに至れり、谷風が天下に敵なきこと以て觀るべし。

谷 仲實

字は子篤、號を翠雲といひ、文化頃に於ける西讃の詩人なり。

谷 本 斑 龍

號斑龍、文化頃東讃人、○畫を能す。

谷 川 青 野

名世復、字春臣、通稱太喜三、號青野、舍號小雨村舍、山田郡前田人、○書畫を能す
書は竹石に學ぶ、牧詩牛の友人にして、又詩を能くす、文政三年六月歿す、年四十四。
○著書若干あり。一庭夜色月初圓、時有幽香繞枕邊、不趨羅浮山下夢、梅花帳裡
自由眠

谷 公 明

名公明、寛永頃高松藩士、○歌を能す、○霞、朝朗春の海原はのくと霞み渡れる沖

つ島山。

谷 隨 山

名正儀、字元立、通稱壽庵、號隨山、其先京師人黒田氏、阿野郡陶に來り、谷氏と稱
す、○隨山天明元年四月歿す、年七十六。綾川墓銘を撰す、其序に好學善書。兼修國
禮。

谷 口 容 江

號容江、文化頃東讃人、○畫を能す。

谷 本 芸 齋

名薰、通稱初周碩、後雲齋、又芸齋、高松儒醫、元鶴羽人忠平衛の子、表醫者谷本政
武の養子、○寛政四年奥醫師、文化十年兼儒、十四年八月歿す、○津田浦、雨染松林
翠靄晴。玉沙縹渺夕陽明。不識何人能寫出。吟筇十里畫中行。

谷 本 璋

名璋、通稱芸齋、齋子、○天保七年假出考信閣、文久三年奧醫師、明治元年二月歿す。

谷久治郎吉

小豆郡池田村の人、文政九年本村中山谷奥に生る、資性質朴嘗て武道を好み、肥土山權左衛門に就きて、棒術の秘法を學び、十五ヶ年間其の鍛鍊を怠らず、遂に奥儀を究め、免許卷を讓られ其の後地方青年の希望に依りて之を教授し、門弟數十名あり、棒術の外擊劍、柔道、鎖鎌(寶山流)等に上達せり、明治十八年歿す。(小豆郡史)

高島茂松

名清矣、通稱清兵衛、號茂松、高松藩士、致仕後登守トモリと稱す、詩歌書等の文學方面のみならず、山鹿流の軍學にも達せり。明の心越禪師遺愛古琴を藏し、彈琴に巧なり、茂松琴士と號す、萬延元年歿す、年六十二、○初姓一井イチノヰ○越清矣と歎す、越は越智の略蓋本姓ならむ、○書齋を讀我書齋といふ。

母上の六十の賀に

清矣

芦田鶴の霜の毛衣かさねつゝ千代八千代まで經ませ此君

高島逸太郎

通稱逸太郎、又清平、茂松の長子、○詩歌を能す、○明治十一年四月歿す、年六十二

高島敬所

號敬所、文化頃西諷の人、○書を能す。

高口基

字子元、號旭水、丸龜藩士にして、詩書を能くす、弘化頃の人。

偶作

凭欄吟坐意尤閑

與寄歸雲飛鳥間

寒樹經霜看正好

半竿殘日四圍山

高畠和吉 (生花師匠)

和吉は花號を松月庵と云ひ、其の名を綠叢と稱せり、天保十四年十二月二十二日都家村字辻に生る、幼少より、生花に興味を有し、壯年に至り、灌園房清溢に就き、池坊流の花道を學ぶこと熱心なりしかば、遂に其の蘊奥を極め、家元より「大日本總花鑑

役」の職を授けらる、又茶道を好み、屢々諸國を遊歴して、其の道を樂しみ居たりしが、大正二年の秋郷里に歸り、後進に教授するところありしに、翌三年九月二十四日歿す、享年七十二才。

高橋南程

名巖、字少弼、通稱周助、號南程、又侗齋、香川郡上笠居人、○菅茶山に入門して、其塾頭となる、詩畫を能す、安政四年五月歿す、年六十八。

高橋琴堂

通稱猪尾八、號琴堂、觀音寺人、○木下橋巢後藤碩田、續木君樵に畫を學ぶ、明治二十一年三月歿す、年四十七。

高橋隄山

號隄山、文化頃東讃人、○畫を能す。

高橋原

名原、字大野、文化頃西讃人、○書を能す、大阪寓、○畫譜に出づ。

高橋朴端

通稱字兵衛、又新平、號朴端、香川郡上笠居人、○俳名甚高し、嘉永三年十一月二十四日歿す、年八十一、蟲鳴くや探つて直すぬれ草履、辭世、閑古鳥なきての後の日もくれす。切俗や風にまかせて行次第、凌霄や人の油斷を松の月

高木瑄

字は伯玉と云ひ、喜山と號す、宇足郡坂本村の人、藤川三溪に學んで、詩文を能す、安政頃の人、

高木建基

通稱禎吾、字篤氏、號飯顆、又竹人と云ひ、綾歌郡下法勤寺村の醫師なり、初め詩文を尾池松灣に學び、後藤川三溪、日柳燕石に學び、能くす、氏は勤王家にして、神武天皇靈迹に碑を建つるに熱心運動したり、男子二人あり、長は高松、柏原病院長、柏原長英にして、異母弟は新四郎と云ひ、今は備中金浦村にて、醫を業とせり、燕石全集

二一四に「謝高木篤民惠紙製陣笠」の詩あり。

遺詠

賀柏原醫學士開業

橘井洗心水、杏林養氣花、仙家乞藥客、相聚似雲霞

神武天皇靈迹にて

見ぬ人もおとにきくらぬ高しまのなみくならぬみかりやの跡

建基

神武天皇靈迹高島に碑をたてはへらむとて

あつさ弓、いてやものせむ、萬代に大御功をつたふ、石ふみ

高橋龍藏

諱は篤、字子敬、俗稱龍藏、中谷と號し、小豆郡安田村の人なり、人となり、敦撲にして學を好み、少時高松に遊び、菊池高洲に従ひて業を受け、日夜屹々、手に卷を釋かず幾ばくもなく、業大に進み、數年にして歸郷す、それより又、三都に遊學し、諸名儒を歴問して、教を受け、詩書を能し、歴史に通して、又郷に歸り、優遊自ら得て世に閑達を求めざりきと云ふ、文政十年五月二十九日歿す。歳五十七、著書白鶴樓詩集あり。

高橋三輔

名は元鉸字三輔、相谷はその號なり、高橋東臯の子、小豆島安田村の人、性質直にして、常に倦まず、幼にして、經書を父に學び、後高松儒山川孫水氏について、數年勉學す、傍ら方技を學び、父の業を繼がんとし、浪華に遊びしも病のため、幾もなくして歸郷し、天保十年四月二十五日二十四歳を以て、夭折す。

高橋彌右衛門

小豆郡安田村の人なり、西城と號す、明和三年に生る、幼名を理吉と云ふ、家號を橋本屋と稱し、同村の豪家たり、丁年にして、家を繼ぎしが、晩年家事を長子棟吉に（四代目彌右衛門）に譲り、末子益藏等と一家を共に造り、之に閑居して、雪月を友とし、傍ら子弟に學を授く、中桐星城は實にその高弟なり、又書を善くせしを以て、僧廣育（佛朔道人）等と交はり、善し、同時に遺墨少からず、安政三年十二月二十三日行年八十六歳を以て逝く、

高尾椿溪

名氏規、或氏矩、字子塵、通稱初善三郎、後十右衛門、號椿溪、高松藩儒、○其先阿波高尾人、因て氏とす、徳行の名あり、安永四年記録所出仕、天明五年儒員、文化十三年八月公子道之助君、廉之助君の師となる、文政三年九月十五日歿す、年七十四、私諡靖徳、又號訥堂、子二人あり、長子養次は弼あり。

高尾氏將

名氏將、通稱初善太夫、後善助、同姓氏尹の子、○文化元年江戸邸中學問所指南、弘化三年閏五月歿す。

高尾竹溪

名氏養、字子皓、又子賢、通稱初善三郎、後七太郎、氏矩の子、○文政天保間儒員、文政二年十一月、道之助、廉之助君文學師となる、嘉永元年十月歿す、香泉遺稿の著あり。

筵間賦即事

高尾養

借來小院一啓行厨、己食清羞倒酒壺、多謝高僧深待遇、偏耽雅興日方晡

高尾氏芳

名氏芳、通稱初彦太郎、後良平、氏將の子、○文化末より出仕、元治慶應頃漢學寮教授たり。

高尾弼

氏矩の次子なり、香泉と號す、幼より穎悟、詩文を能くす、惜哉十九歳にして没す、香泉遺稿の著あり、没後、兄竹溪校正して出版せり。

高畑權兵衛

諱は正勝、又の名、又八郎と云ふ、阿波那〇郎與北村の人なり、父を正次と云ひ、郡の大里正にして、其二子なり、幼より文學を好み、武術を鍛錬し、殊に馬術に達せり、夙に父の職を継ぎ、大里正となり、祿二十石を給せらる、爾後、荒蕪開墾に、又灌漑水引用に力を致し農事の開發に資せしこと多大なり、元文二年八月十二日没す、年七十三。

高 幢 龍 暢

本縣出身嵯峨大覺寺派管長たりし、同師は兼て病氣の處去る七月廿日先帝御不例の報に接するや、天機奉伺の爲め眞言宗各派を代表し、東上し廿四日歸山せしも、八月廿七日頃より容體惡敷、大正元年九月二日光明眞言を唱へつゝ唯「安心な所へ往く」との一語を遺し、八十六歳を一期として示寂せり、其小歴を左に示さん。

▲出生

文政十年十二月十八日香川縣木田郡平井村に生る、奈良佐四郎氏の三男なり、幼にして三寶を恭敬し頗る神童の風あり。

▲職歴

天保十年四月十五日同郡前田村八幡宮別當職押光寺龍靜阿闍梨に所望され、得度して徒弟となり、長するに及び同郡湯元村屋島寺の住職となる、然るに同寺は四國八十四番の靈場にして、如も國主松平家の祈願所たりしかど、維新の後ちを承け内容甚た衰替振はざるより、師自資を出し資堂料とし耕地若干を寺屬地と爲す。明治十三年四月其隣寺八栗寺へ轉ず。同十八年眞言宗長者より權少僧正を授けらる。同十九年十一月高雄山神護寺へ榮轉す。此寺も亦祖師立教開宗の遺跡なりしも、維新の

後ちを承け衰退極りなかりしを荆棘を拂ひ、書院玄關を改造し鐘樓及び五大堂を修繕し面目を一新す。同卅一年六月大覺寺門跡となり同時に權大僧正となる。同卅三年八月大覺寺派管長となり同時に大僧正となる。同卅七年九月眞言宗各派聯合長者に推舉せらる。

▲學業と受傳

高松市山川孫水氏に就き漢學を修す、高野山釋迦文院靈雄師に就き宗乘を修業す。備中都窪郡性徳院寂如師に就き聲明を修業す。師範龍靜阿闍梨に就き事相に於て立寶院流を受く。大覺寺神海僧正に就き御流并に保壽院流を受く。

▲雄飛と努力

文久年間讃岐、備前、備中、京都の各地に於て理趣經及び十卷章等の通講を爲せり讃岐國に於て聲明及び三寶院流の傳授を爲せり。其他住職地寺院の頽敗を起し維持を計り、特に大覺寺の興隆には全力を注ぎ積年の負債を償却し、堂宇の修繕を爲し數万の基本財産を造る、而して師の特所は人を見るの明にして各其能に任す。

高 橋 文 右 衛 門

小豆郡安田村の人、性温厚篤實にして常に殖産に意を注ぎ公益を廣むるの志あり、夙

に醬油醸造業の世に缺く可からざることを看取し、今を去ること壹百餘年前文化六巳年斯業を創始せり、當時其の造石僅かに三十八石なりしが百折不撓萬難を排して、益之に勉勵し精良品を出すと共に大阪、堺、高松、廣島等の各地方へ販路を開く、之れ小豆郡醬油業の濫觴にして、爾來年と共に醸造家輩出し、遂に今日の盛況を呈するに至れり、死後四十一年を経て明治二十六年三月本縣知事より其の功を追賞して金若干を賜はる、安政二年五月二十七日没す、年八十一。
(小豆郡史)

高橋 東條

小豆郡安田村の人にして、池田村保壽寺住職石窓等と共に野呂介石に従ひて繪畫を研究し、山水畫に長ず又和歌を好み柔術を學ぶ。梅儼は其の長子なり。明治元年正月廿三日没す。
(小豆郡史)

高橋 梅儼

小豆郡安田村の人、幼名萬吉、家を繼ぐに及んで儀右衛門と改む。家世々本村の名家たり。年十八にして紀州高野山に登り學を修むること三年、更に繪畫に志し京都に遊びて山本梅逸、小田海仙に就きて學ぶ、時に年二十三なり。刻苦勉勵止まること四年

にして家に歸り筆を揮つて自ら楽しむ。後ち大に發明する所あり、殊に花鳥人物を畫くの技に長す、世人之を珍重すといふ。慶應二年四月十六日没す、年四十有五。
(小豆郡史)

高橋 益藏

小豆郡安田村の人、本村の豪家橋本屋彌右衛門(西城)の四男なり。後ち父と共に閑居して風流を友とし悠々自ら娛めり。生花茶の湯其の他の諸禮一として通せざるものなし、地方の有志従ひて教を受くる者頗る多し。又揮毫に長す。池田村千龍山の碑陰に其の墨跡を遺せり。明治十三年一月十三日没す、年六十有九。
(小豆郡史)

高橋 茂一郎

名は茂一郎、幼にして九一郎と稱す、號は松隣、小豆郡安田村の人、人と爲り木強敦厚年十四、父を失ひ、木材の商を營み以て家を立つ、嘉永五年米穀商を起し、文久三年醬油業を開く、明治維新の後大いに米商を擴張し、身を兵阪に寄せ、九州の産米を糶し以て巨額の富を致し、大いに世に米商の名を博せらる、亦常に書畫を好みしも年六十有六偶々病を以て、明治二十六年十二月二日没せり。

高橋 乘 亶

名乘亶、通稱初勇藏又堅藏、後德兵衛、本佐野忠純次男、高橋盛實の養子、高松の人歌は友部方升門人、明治二十七年一月没す、年八十。○木村重成、今はとて越えけむしでの山よりも君が功の名こそ高けれ。

高崎 仁左衛門

小豆郡苗羽村中堀虹平の男なり、若ふして力量衆に超へ幼より相撲を好み、壯年に及んで大阪に出て相撲道の門に入り鬼ヶ崎仁助と稱し、一躍して幕の内に入る、性温和にして大に信用を博せり、後ち頭取となり高崎仁左衛門と改む、名聲頗る高し、明治二十六年一月十五日年六十七歳を以て歿す、本村常光寺門前に碑あり、大阪頭取高崎仁左衛門と記し、諡して溫室教和禪定門と曰ふ。
(小豆郡史)

高村 太平

小隱と號す、本名橋正容、三豊郡和田濱の勤王家なり、文化十年六月十三日同村に生る、少壯彫刻を業とし頗る其技に達し、或時一彫刻物を藩主京極侯に献せしかば、其

妙技を嘉賞し、號を小隱と賜ひ苗字を許され、傍ら文墨を弄し汎く知名の士と交遊す安政元年尊攘論の勃興するや燕石、君田の諸士と氣脈を通じ國事に盡す所あり、文久三年十月澤宜嘉卿の逃れて來るや庇護して、伊豫に至らしめ、慶應元年以來屢々長州に至り毛利侯に謁し献策する處あり、慶應三年同志を糾合し澤宜嘉に従行し、奥州に出征し國事に盡瘁する事多し、維新後居村の戸長を勤めしが後辭して専ら彫刻を業とし傍ら文墨を以て老後を楽しみ、悠々自適せしが明治十年二月十七日齡六十三を以て逝けり。三女重女、常に父に隨行して勤王に盡くせり。

高橋 元 忠

通稱省吾、字は春城、屠龍子又彈琴山人と號す、三豊郡柞田村大字山田尻に生る、醫業の傍ら漢詩文を能くす、壯時丸龜富屋町に卜居し醫を業とし、潜かに勤王志士と交り國事に盡くす所あり、維新前丸龜大阪屋騷動連座の疑により獄に投せられ後免さる明治十二年京都の烈女若江薫子の丸龜にさすらる來るや幹旋尤も努め、其疾めるに當り看護の勞をとり、又其没するや元忠等首唱となりて玄要寺内に其碑を建てたり、養嗣子忠徳明治二十年頃帝大醫科を卒へ醫學士となり、靜岡縣島田町に於て醫科を開業するに當り同地に移居し、悠々老を養ひ居りしが明治二十八年七月四日同所に於て没

せり、年七十三。

高橋彌三治

小豆郡安田村の人、性温厚篤實事を處する頗る綿密なり。天保五年三月大川郡志度町に生る、平賀源内は其の高祖父たり、弱冠にして本村高橋四代目彌右衛門の嗣子となる、家醬油醸造業を營むを以て専心之れが發展を圖り、年と共に盛大を致す又夙に醬油組合の代表者となり大に盡瘁する所あり、是を以て明治四十三年十一月本縣知事より賞を受け、越えて四十四年五月農商務大臣縣下巡視の際特に引見の榮を得たり、尙ほ又農事試作所を設けて農事の改良發達を謀り、且つ餘暇あれば志藻を吟詩に寄す。晩年家政を長子筆四郎に譲り、風月を友とし優遊自ら適す、大正二年八月十五日病没す、年八十、遊甫は其の俳號なり。

(小豆郡史)

高橋伊門

名は敏、字は有功、梅峯と號す、小豆郡四海村長濱の人、六代目高橋伊右衛門の長男にして、夙に備前閑谷齋に學び、螢雪の苦を積んで漢學を修むること十年、故大烏圭介男は當時の學友なりしと云ふ、歸郷後は身を育英事業に委ねしが、明治五年教育制

度未だ完備せざりし際に當り、或ひは郷校を經營し、或ひは自ら教鞭を執り人材養成に勤めし等貢献頗る大なるものあり、公人としては明治十一年選ばれて愛媛縣會議員となりしを初め小豆郡書記に、十八年には伊喜夫外二ヶ村の戸長に、二十三年には四海村長として、十年の勤續一日の如く、識徳兩ながら高かりしも、病を以て村長辭職後は専ら風月を友として、詩文に興し和歌に親み、茶湯插花を教へ、時に知人の乞ふに任せて謠曲を授くる等悠々餘生を樂みしが、明治三十三年七月三十一日七十二才を以て老没す。

高橋勝次

は香川郡上笠居の村長として、恪勤精勵を以て聞えし人、殊に全國模範十七ヶ村の一入として表彰されるや感奮報効益々村治のため努力せるも、明治四十二年二月齡僅かに三十四を以て多くの事業を残して逝去せり、惜むべし氏は人となり中和にして、事を處する最も明快、事理を斷するに恒に謬ることなかりしと云ふ。

高橋琴堂

猪尾八は通稱、三豊郡觀音寺町の人、高橋東四郎の男にして、天保十三年六月十八日

の出生、明治九年より書を木下橋巢及後藤碩田等に學び、又續木君樵に書論を質し元明以來南宗名家の法に習ひ、書を能くす、明治年間の人。

高橋 彝 太郎

小豆郡四海村長濱の人、高橋伊門の長男なり、性磊落不羈少時既に小學校教員を奉し明治十九年以來任に小豆郡書記にあり、次て高松區裁判所書記に任せられ、後ち官を辭し、同卅二年縣會議員となり名譽職參事會員に推され、同卅六年再選副議長となる同年陸軍大演習に際し、姫路城内に於て聖上の御宴に陪席するを得たるは一代の光榮たり、卅九年滿洲利源調査委員となり、日露戦後の滿洲を視察し同年縣會議員を辭す其の間村會農會、青年會、漁業組合、村立學校建築等大小の村治に關係し、一方醬油食鹽、畜産の諸事業を經營し、畫策未だ半ならず同四十四年五月廿三日知命に達せざる壯齒を以て病沒す。
(小豆郡史)

高 橋 松 齋

謙堂と號す、三豊郡柞田村の醫師にして、政治運動に關係し、明治十五六年の頃より改進黨に入り始終一貫時に議政壇上に時弊を痛罵し、縣議に郡議に地方の治に參し豫

讃の連楔たる鐵道の開通の如きは、期成同盟會長として盡す處多かりしが、突然病を得て大正六年八月二十三日暮鐘と共に六十四才を一期として逝去せり、同二十六日葬儀を行ひしが、郡内の名望家は勿論、縣郡會議員其地會葬者千五百餘名に達するの盛儀を呈したりと、實に生前の功勞の多大なりしを憶はしむるに足るべし。

辰 藏

綾歌郡羽床村の人、羽床仇討事件の被害者なり、文政頃及劍磨研師となり、膳所(近江國)に滯留中同藩士平井市郎次なる者を殺し、後歸國して郷里に在りしを、文政十年六月二十七日市郎次弟九市及外記並に雲龍等のために殺さる。(羽床仇討の部参照)

岱 年

姓は早川と云ふ、丸龜藩老佐々九郎兵衛の臣、俳諧を好み京都に出て名家となる、後駿州見付にて宗匠を爲せりと云ふ、似たものは皆忘るゝに富士の山

探 水

宮脇氏、丸龜渡場の人、俳句を能くし且書に工みなり、安政頃の人。

對 青

姓は尾山、諱は秀明、通稱宗太郎、大川郡津田町の人、初め和歌を高松市宇都宮某に従ひ研究す、竹溪又は久樹と號す、後對青と改めり、清々園とも云ふ、後京都花の本芹舎の門に入り俳句及俳諧を専修し、俳名高く門人多し、後門人等相謀り、大正九年五月琴林公園に句碑を建つ、其の句に曰く、「鳴戸見え須摩見え涼し松の園」生前貴族院議員森山茂(俳名鳳羽)と親交あり、大正九年八月一日没す、享年七十四才。琴林公園集の著あり。

諦 住

字龍川、名諦住、號芝山、讃州西念寺畫僧、○文化頃の人、畫譜にあり。

僧 大成

字寸意、號徽石、西讃某寺住持牛の友人、文化頃の人。

丹 卮

安永頃、香川郡川部の俳人、麥浪の門人。演萩の露や硯にかけて見る

多 田 網 浦

號網浦、通稱宗次郎、當市丸龜町十河氏の番頭、本字多津の産、庵號松濤庵、○俳を能す、明治卅七年七月没す、年七十三。わく音の心にしむや世の清水

淡 水

松韻舎と號す、丸龜の俳人。

手草庵 桃 仙

字多津の人、本名佐竹彦六、俳句を能くす、大正十一年八月廿六日没す、年六十四。辭世 落窪に立つや枯野の遠けむり

相撲瀧の音

本名を菊井兼吉と云ふ、小豆郡北浦村小海の産、幼より體格衆に勝れ相撲を好みて常に同輩に擢つ、長するに及びて體軀益偉大身幹六尺體量三十貫に達し、遂に素人相撲

となる、其の相撲の強くして而も容貌風采の整美なる衆人の信愛甚た深きものあり。後ち岡山の相撲釘抜の部屋頭となり、江戸相撲の三港より讃岐一圓の頭取を命せらるゝに至り、瀧の音の名聲近國に鳴る、年三十二にして没す、實に明治三十二年五月三十日なり、小海埋葬地に墓表あり瀧之音墓と題す。
(小豆郡史)

多 號 索 引

- | | | |
|----------|---------|---------|
| 陶濱 (赤松) | 陶陶 (市原) | 丹崖 (宮武) |
| 大作 (土居) | 大猷 (巖村) | 道寧 (小橋) |
| 琢 (玉楮) | 達 (片山) | 爲參 (玉楮) |
| 爲造 (玉楮) | 達齋 (松崎) | 大倫 (久保) |
| 陶水郎 (京極) | 橙齋 (渡邊) | 岱年 (早川) |

〇ノ之部

靈 瑞

字秀端と稱し、樗堂と號す、那珂郡原田西福寺主の弟子、藤川三溪に學んで詩文を能くす、安政頃の人なり。

連 梅

生田氏、芹舎門、讃岐人、明治年間の俳人。

連 峰 (栗山連峯)

レ 號 索 引

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 蓼江 (原) | 靈鷲 (鶴洲) | 靈通 (蕙崖) |
| 麗澤 (藤村) | | |

ソ之部

尊澄法親王 (流寓人)

二品妙法院尊澄法親王は後醍醐天皇第八の皇子也、(後中務卿宗良親王と申す)正慶元年三月八日讃岐へ謫せられ給ひ、同十一日一宮尊良親王と共に兵庫に着かせ給ひ、一宮は御船に召して、土佐の畑へ御下りあり妙法院宮は陸路備前國を経て、兒島の吹上より船に召して詫間に着かせ給ひ、(一説しはし此地に居給ひ後松山に遷せられしと)三年の年月を閑し給ひ、建武元年六月當國の兵を率ゐて、京に歸り給ひしと云ふ。

御詠

思ひやる心つくしもかなひなきに

人まつ山とよしやきかまし

うき程はさのみなみだのあらはこそ

吾袖ぬらせよその村雨

(参照)

宗良親王

後醍醐天皇の第八子剃髪して、尊澄と號す、妙法院に住し、天臺座主となる、元弘の役兄護良と謀畫に預る足利尊氏の反するに及び、各地に轉戦し、苦酸具に嘗む。新葉和歌集を撰し、弘和元年重訂して上に奉る、時に年七十後終る所を知らず。詫間村に玉屋舗と云ふ處あり、街道より二丁許を距てたる處にあり、碑に「妙法院尊澄親王御舊跡」と記しあり。

一本に左の記事あり。

三野郡詫間村は古へ後醍醐天皇御子妙法院二品親王此地へ配し奉る守護、詫間村三是範之を預り奉る、御送者上方より長井某と云ふ大名附き來れり、親王住さるる事二年にして上京、凡人ならぬ故世の交もならず時々同所氏神八幡宮別當滅罪せざる故に御伽に出られける、其縁により檢校の官を被下今に檢校と云ひ滅罪をせざる也詫間に親王屋舗とて今に跡あり、四方へせんさいを植へ田二反許も有し也、城は山の上に有、後詫間豊後守と云人住り、天正の土佐亂に亡びたり云々。

園の小尼

志度町の女智法と云ひ信仰家なり、志度寺縁起に曰く推古天皇の三十三年に志度の高

島に漂着せし漂木を以て十一面觀音の像を作り、是を本尊とし一間四面の堂を建て之を安置し寺を觀音堂の側に立て、之を志度寺清淨光院と云ふ、志度江の口に地藏寺と云ふ眞言宗の寺あり、此寺が園子尼が止住せし屋敷跡なりと云ふ。

十河氏

は神櫛王の裔にて植田の支族なり、世々山田郡を領せり、貞和年間植田三郎景保と云ふ者あり、植田、菅澤、朝倉等の諸邑を領て戸田山の城に居れり、四子あり太郎某、次郎景辰、八郎景之、十郎吉保と云ひ十河郷西尾の城に居れり、因て十河と稱す、貞治元年細川清氏官軍に降り、三木郡白山の麓に來り、邦内の味方を招きし時三子皆降り、官軍の爲めに盡す所あり、清氏滅びし後は細川頼之に従へり、吉保の子三郎刑保刑保の子孫六郎儀稠、儀稠の子刑部安堆、安堆の子兵席康仲、康仲の子民部泰宗、泰宗の子民部寧定、寧定の子民部易正、易正の子右京進景滋、景滋子なきを以て三好筑前入道の四子又四郎之虎を養ふて嗣子となす。

十河一存と義誥

一存は阿波の城主三好筑前入道(長慶)の第四子にして又四郎之虎と云ひ、右京進景滋

の養嗣となり、十河左衛門守一存と改む、容貌魁偉勇氣逞しく衆之を目して鬼十河と云ふ、耳の後迄髪を抜き几字の如くす、世に之を十河額と云ふ、寒川氏と屢々相戦ふ天文元年の長尾の役左腕を傷く、瘡て後其痕を視せしめず、天文十八年長慶に勸めて晴之を三重城に攻めしめ、自ら騎三百を率いて門戸を毀たずして次の門に乗んとす、時に城兵僅に百餘防戦死傷して城方に陥んとす、一存曰く晴元の死を見るに忍びず姑らく之を緩うせよと、乃ち淀川を涉り轉じて宗三を江口に攻めて之を殺す、其他各地に轉戦して武功あり、かくて壽を以て永祿四年(三七〇前)三月十八日十河郷に終る。謚して光清院春月宗圓禪定と云ふ、一子義誥あり、三好長慶の養子となる、因て甥存保(實休次男孫六郎)を養ひて嗣となす、野史には永祿八年有馬の温泉に浴し歸りて没すとあり、蓋し破傷風か何かにかゝりて死せしものならんか。

義誥は天文六年中に長慶の養子となり、三好左京太夫義誥と稱し、河内國飯盛山の城に居り、松永彈正の執事として天下の政事を掌り居りしが、後彈正と俱に信長に殺されたり。

十河存保

は孫六郎と稱し、三好實休の二子(長治の弟)なり、一存の實子義誥三好長慶の養子と

なり、十河家嗣なきを以て一存の嗣子となり、十河民部太輔と稱す、爲人勇猛にして軍略に富む、此の時は天文年中にして泉州堺の所司代を勤め居たり。

存保阿波へ歸る

天正五年三月廿八日兄長治自殺せしかば三好越後守、河村左馬允等と相謀り、十河存保を迎へて勝瑞城の主とせんす、時に存保堺の浦の所司代たり、久保佐渡守を遣して是を迎ふ、同六年正月三日阿波の撫養に歸り遂に勝瑞に入る、三好氏の舊臣來り集て拜賀し萬歳と呼ぶ、存保使を諸方に通し統内の諸將を従はしむ、同十年九月元親一萬餘人を率ひて勝瑞を圍む、存保戦ひ敗れて、九月廿一日夜大内郡に入り虎丸城に入る。

存保讃岐へ歸る

天正十年十二月十軍及土佐方に屬せし、讃岐勢の爲めに十河城を包圍されしも頑強に抵抗し、同十一年五月迄持續けしが元親に交渉し、在城中の兵を無事身命を全ふして出城せしむるの條件の許に皆兵を遁れしめ、城を元親に委し自らは三好隼人等と庵治に出て小舟に搭じ播州に渡り、豊公に謁し元親の無狀を訴へし結果、同十三年四月廿

六日豊公浮田秀家等七師に命し、兵三萬七千人を附し南國を征討せしむ、存保此れが謀主となり、先づ屋島の喜岡城を攻め降す、爾餘の城相次で降り元親も降り、四國平定せしかば存保も其功により、山田郡二萬石の地に封せられ故の西尾城に入れり。

九州に出張遂に戦死す

天正十四年十月廿八日秀吉の命により、大友義統を援んが爲め仙石秀久、長曾我部元親と其同勢六千餘人を以て豊後國へ差遣され、同年十二月七日に利光が居城へ取かけ敵兵引退く、此時秀久は大友義統と牒合して戸次川を渡りて其敗兵を追はんとす、存保諫て曰く敵は眼に餘る、大軍なれば此少兵を以て後詰し、平陸の戦をなすべきは無謀の舉なり、今しばし此處に壘を堅うし、秀吉公の出馬を待つに如かずと申言せしも秀久の無謀なる、遂に其言を聞かざるを以て今は是れ迄なりとあきらめ、我陣所に歸り郎從數人を呼て曰汝等は國に歸り嗣子千松丸を連れて上京し、我かく申置たる由を秀吉公の御目に懸げよ、是專一の忠節なりと言捨て手勢を下知し、馬に鞭て川を涉て大軍中に突入し、名譽の戦死を遂げたり、時は天正十四年十二月十二日の事なり、干時存保年三十三、諡して眞光院殿義賢實存居士と云ふ。

浄土寺

十河の郭外に淨土寺あり、存保千松丸の位牌を立て村民これを奠る、其位牌今に存せりと云ふ。
(南海通記)

存保天正中東光寺「高松市三番丁にあり」を建立し其菩提所と爲したり。

十河千松丸

千松丸は存保の長子にして幼より才器あり、成長の後は百晴一國に將たるべき素質あり、或時上京して秀吉公に謁見し、能を所望ありて見せしに其時の景況が治亂記に左の通り記してある、今左に抄録す、同人は存保死後天正十五六年頃毒殺されしなりと云ふ。

鼻紙代也と仰ありて御意に合はせざるやうに見ゆ、其時に正規のおい大塚采女十四歳、十河千松丸十三歳兩人の能を御覽あり、采女が事は何の仰も無して千松の事を親にも劣まじきと御意あつて、幼少の間御預け被成よく生育せよとて、御憐愍を加へ玉ふ、然るに家人其後の災になるべき事も知らずして、二萬石の地は早や明日にも還付し玉ふべき様沙汰せしかば、此れが千松丸の身の讐となり毒殺にあいしと也秀吉公が大塚采女が事を仰せられず、千松丸をほめ玉ふ故に采女方の所行なりと聞ゆ、何れかは知れざれど秀才の男子を失ひし也。

存保の兵士に言ひ遣せる詞は、今我戰場に死を致すは汝を世に立んが爲也、必ずや猛にして成人し、秀吉公に仕へて武門を立べき也、是我一言也と傳べしと言捨て戰場に馳入玉ふ、山田郡は神櫛王より以降十河譜代の民なれば、百姓ども其悲に不勝して俗謠に作りて涙を流す、其歌に曰く、
命捨るも兒ゆへに捨る　けなげなれども千松よ

十河與兵衛

存保の家臣大剛の者なり、天正十五年八月生駒近規に祿三百石を以て召抱へらる、朝鮮陣南原の城攻に生駒一正の手の一乗なり。

十河孫五郎孝經

香川郡池西城の城主にして、十河十郎吉保の三子なり、采地を此に食む、應暦年間細川頼春に従ひ、豫州金谷の城を攻めて功あり、其五世の孫主殿助孝晴、天正十一年十河城を援けて屢々土佐の兵を退けたりと云ふ。

造田佐渡及民部

鵜足郡造田の城主にして天正前の人ならん。

増 吽 僧 正

僧正は大内郡西村(今の譽水村)の人、諱龍徳と云ふ、安藝盛嗣の子なり、其娠めるや母靈夢あり、十二ヶ月にして生る、正平二十一年三月五日なり、幼にして佛天の像を畫くを好み、堂塔伽藍を作るを娛しみとす、與田寺増慧に従ひて薙髮し、三密を受け内外の典籍を究めざるなし。尙後小松天皇、稱光天皇等の信任厚し、力を佛門の興隆に盡し、廢寺を興し、堂塔を建立する等其功績多し、吽修法の餘力佛畫彫刻等を能くす、人其功妙に驚かざるなし、應永十九年勅して權僧正位に任し、虚空藏院の號を賜ふ、吽因りて又大修造を加へたり、享保三年四月與田寺に示寂す、享年八十九。

増 圭

は仁和年間讃岐に於ける善知識なり、而も今の高松市片原町にある天神社は初眞言宗愛行院與樂山長命寺と云ふ、仁和年菅公赴任の際、舟を笠原庄東濱に繋ぎ上陸されしも其當時の事とて適當な宿舎なきを以て、不圖同寺に宿泊されしが其時の院主増圭が内外佛典に通し學識ありて公を款待せしかば、大に満足され、爾後屢々來遊され公歸

京の後自畫の肖像を贈られしを以て、後増圭一社を建て之を崇信す、即ち今の社是れなりと云ふ。

宗 全

名宗全、鵜足郡宇多津僧、○紹巴に學んで連歌を能す、天正三年三月上旬京にて紹巴に逢ふ、紹巴曰く、見る人を見るや都の花盛、宗全答、柳にまじる袖の色々、○沙彌宗全と書けるも此人也。

因に紹巴は里村氏、奈良人、連歌を以て法橋に叙せられ、慶長十九年四月七十九歳を以て没せり。

宗 鍵

名宗鍵、鵜足郡宇多津人、連歌を牡丹花肖柏に學ぶ、永正頃の人、其詠、初雁の聲や塵ひち秋の月。

因に肖柏は弄花軒と號し、宗祇に學び和歌を能くす、晩年泉南に住す、大永七年四月歿す、年八十五。

法印増海

小豆郡淵崎村の人、元肥土山太田氏より出て瀧湖寺主空智の弟子となる、頭腦明晰にして能く諸經典に通曉せり、殊に仁王經は之を暗誦せりと云ふ、嘗て枯木を咒したるに枯木忽ち花を生せりと傳ふ、正保年間寶生院主法印増宥の後を嗣ぎ、慶安四年辛卯正月舊堂を毀ち新たに之れを建立し、功成りて修法三萬八千座仁王經を讀誦するこゝと三千部且つ庭儀灌頂を行ひ以て永劫に不朽を祈る、尙之より先き大鐘を鑄造したり明暦三年自ら京都御室御所に詣り其直接末寺となる、寛永五年己十月廿六日寂す。

十河順安

名保定、諱正方、通稱順安、號魯軒、檀原十河の後なり、高松藩儒員、○惠公講堂を設く、召されて經傳を講す、○牟禮の太夫黒馬名墓は其撰文。從子を安定(奈良屋)權三郎と云ふ、是又讀書家なりしと、正徳十八年四月三日歿す。

十河存安

存安、字は不言、默翁と號し、五郎と稱す、延享二年讀岐に生る、温厚、文事を好み

口臧否を言はず、初め財豊かなりしを以て、困窮せるものを屢々救護し、後遂に産を破る、然れど村民その高德に服す、六十歳の賀筵に當り國老以下賀壽の詩歌を贈る。天保九年病沒す、年九十四。

十河節堂

通稱恭平、又鈍平、號節堂、又鑽心心史、又今時狂生、又不求主人、又四竹堂主、又蘇山人、○篆刻鑄文を業とし、詩書墨竹を能す、大阪江戸に寓し、後高松に歸住す、明治元年二月沒す、年七十、妻は藤澤東咳の妹なり、○印に征夷府璽章家東叡山下處士十河鈍作とあり、慶喜將軍の印を刻せし由にて江戸寓時の印也。

十河醒石

名忠貞、幼名熊之助、後權三郎、號醒石、高松人、○愛山に學び蘭竹芝石を畫く、家書畫に富む、明治三十三年十月歿す、年五十一。

十河襲平

名襲平、十河存安の子なり、○篆刻を以て四方に遊ぶ、父の六十賀に壽詞千餘首を得

たり、天保頃の人なり。

十河寧溪

號寧溪、天保頃東讃の人、○詩を能す、栗洞展觀錄にあり。

藏

海 (月照の叔父)

多度郡吉原村農安右衛門の三男にして、幼にして牛額寺に入り、專卓和尚の弟子となり、藏海と改む、長じて牛額寺住職となり、天保六年四月二十一日寂す、行年五十五。

藻

南

木田郡下田井西樂寺住職、漢詩及和歌を能くす、文久二年頃の人。

相田與兵衛

與兵衛は京極氏の世臣にして粗剛才あり、京極高豊(備中守)女を松平信視に嫁し、相田を遣し之を護せしむ、相田悦ばず備中面諭して曰く「吾藩偏小にして汝に代るべき人なし、汝の欲せざる所誰か又之れを受けん」吾が爲めに行きて父子の情を慰めよ」

と相田堅くとりて従はず、既に請ふて祿を辭して去らんとす。備州曰く「吾れ一女の故に汝を外に勞す、これ吾れの過りなり、然りと雖も去留の許否は我にあり、豈妄に自効すべけんや」と置いて問はず、幾もなく大目付に擢んで、世子高或立つに及び特に命じて之が傳たらしむ (擊壤錄)

曾根梧莊

(來寓人)

名は立、字卓爾、仙臺の畫家、山水四君子等を能くす、明治の初年頃高松へ來り片原町天神社裏大工某の裏座敷をかり、其處を凝紅亭と稱し假住し、揮毫し三四年も縣下各地を巡遊し後京阪に至り、畫道に親しみ居りしが明治七年十月廿一日京都にて没し寺町綾小路勝圓寺に葬りしと云、享年四十二。

宗

海

高松の俳人、初め素鶴と云ひ後宗海と改む、安政頃の人。

安益川

瀬をこせはひと群になる小年魚かな

曾根 菜園

昌益は名なり、木田郡川島町の醫師、曾根良哲(號耕雪)の男にして、嘉永四年十一月の生なり、業暇を利用し明治十三年より書を中川愛山に學び能くせり、明治三十年頃没す。

象 北

那珂郡三條村の人、宮武六郎の雅號、嘉永頃の俳人。

素 牛

高松湊町の人、嘉永頃の俳人。

宗 德

仁尾の俳人、葛東館と號す、俗稱鹽田又右衛門。

楚 得

祥雲軒と號す、安永頃高松の俳人、麥浪の門人。

麥浪先師七とせの忌に

來る筈の其日ゆかしく居待月
かんこ鳥また仕合せは夏の暮

ソ 號 索引

- | | | |
|-----------|--------------|----------|
| 蘇山(本莊) | 孫水(山川) | 宗貞(七條) |
| 賢浦(神崎) | 宗全、宗右衛門(長谷川) | 宗昌(山崎) |
| 宗平(安原) | 巽(河田) | 遜卿(柏原) |
| 蘇山人(十河鐵心) | 増畔遜齋(上枝) | 巢雲主人(中川) |
| 瘦仙(細川) | 宗淳(佐々) | 則孚(渡邊) |
| 存安(十河) | 宗存(山崎) | 宗矩(山崎) |
| 僧敏(密成) | 素川(脇) | 棗亭(村岡) |
| 宗弼(奥村) | | |

〇ツ之部

都築 清左衛門

は香川郡下飯田の城主にして香西氏の部將なり、其戰蹟左の如し。
天正十年八月五日香西伊勢馬場合戦に先鋒として参加す、天正十三年五月香西佳清が香西を引揚げ長尾へ移りし時の謀議に與り善後策を爲せし人、先代を三郎左衛門と云ふ、飯田八幡宮を始めて祠りし人、天正十五年八月生駒正規に祿二百石を以て召抱へらる。

常兼三郎左衛門

鶉足郡常兼(常包)の城主にして長尾大隅の支族なり、天正年間長曾我部元親に降りし人なり。

大阿闍梨通法

諱智程、入江郷處士佐野安兵衛子、初鹽飽神宮寺主となり、後寺を辭して江都に遊び湯島靈運寺開山大和尚に從ひ律を學ぶ、後老母奉養人なきを以て歸りて孝養し、傍ら里中の小兒輩に書を授く、菊池黄山も門人の一人なり、元文の末年即寛保元年正月十四日寂す、行年七十。

通 立

通立は多度津の人、出家して高野山に學び事教二相に通ず、後河内蓮光寺に住し著作を事とす、享保十六年六月二十五日寂す、著作に梵網古迹資講鈔五卷、梵網戒經資講鈔五卷、梵網戒經本疏引據、即身藤圓鏡鈔、辨惑通衡、教戒律義簡釋、三教指歸簡註行者靈驗記各二卷、法華會義引據四卷、教戒律儀指鈔、梵字八轉聲、戒本宗要資講鈔八齋戒得道鈔、光明眞言觀發記、梵網本疏引據增補各一卷あり。

佃 好謙

字は士益と云ひ、松州と號す、香川郡圓座村の人、藤川三溪に學んで詩文を能くす、安政頃の人。

壺井六五郎

六五郎、諱は忠弘、鳶山と號す、山田郡西十川村の人、性仁慈に富み敬神の念厚く、村民その風を欽慕す。初め里正となり、大政所に進み後土木の事を兼務す、その事業中民に諭し、松樹を鳶ヶ尾山に植えて之を伐賣して、鯉宇八幡宮に祭田を寄附し、又貞婦初女の墓碑を建て、若干の田畝と山林を遺子多次郎に與へ、追福の料となさしめその他山林荒廢し、木炭を製する者賦料に苦しむを見ては、前後八回に亘りて自ら代納し。村内の灌漑水不足を見ては舊池を改修又は新池を造り、橋梁を架し、饑饉に際しては土工を起して、老若男女の別なく使役して、その糧を得せしむる等功績大なり藩之を嘉し、士籍に列し、俸祿を給す、文政十年閏十月病没す、享年七十九。

壺井織右衛門

小豆郡坂手村の人、始の七左衛門義璉、後に織右衛門と稱す、其の先は河内源氏の後裔壺井彦五郎より出つ、彦五郎南朝に屬し河内に住せしが其の子孫本村に居を移し家號を水原と云ふ、蓋し源姓に因みてならん、其の後世々本村の里正となる織右衛門人と爲り豪膽にして才略に長す、軀幹壯大頗る風采あり、父に繼きて里正となり治績大

に舉り村民の尊敬と同僚の推重とを受く、夙に皇漢の學に通し好みて源氏物語及狹衣を愛讀せしと云ふ、且つ俳諧を嗜みて梅路と號す、明治二年五月二十六日没す、享年六十。
(小豆郡史)

壺井雨香

通稱恒五郎、號雨香、山田郡十河人、○書を能し、書畫の鑑識あり、明治九年七月没す、年六十九。

壺井泉谷

通稱初又藏、後又兵衛、號泉谷、雨香の甥、○書畫を能す、明治十一年七月没す、年四十九。

對馬留雲

名世鼎、通稱新太郎、號留雲、詩を五山に學び又書畫を能す、安政五年八月没す、年六十三、留雲集百絶の著あり。

津山 茂

字は子叔と云ひ、蘇水と號す、阿野北坂出の人、藤川三溪に學んで詩文を能くす、安政頃の人。

送下藤川三溪先生從公駕之江都上

東方千騎遠相隨 驥足展來今此時

明歲榮歸吾刮目 待看畫錦映春曦

讀三溪先生癸丑浦賀記事

有感因賦寄先生于江都

車礮雷轟浦賀濤 秋深海上鰐雲高

請看清世恩波大 關都官兵百萬刀

津阪 木長

名は行簡、字居敬、通稱五郎太夫又勝藏、號木長、清風舍、俳禪堂とも云、丸龜藩士大目付普請奉行(居所通町)役務の餘暇俳句及畫を能くす、慶應二年二月二十五日没す、年五十八。○玉藻日記に有明濱の圖かけり。

辭 世

元日や悟つて見れば吾れも旅

津本 偷安

名教豫、號偷安、其先伊勢人、英公時代に來讚し、大内郡三本松に住み、財を積み名望家となれり、○栗山の姻戚にて學才あり、詩書を能す、栗山の阿波に召さるゝや、偷安與りて力あり、○余津本氏の印影を見るに、一は偷安齋とあり、一は津正勝印とあり、正勝は偷安の名か、又一は津正邑ともあり、○三本松陰一草堂、流膏春釀紫霞觴云云、是栗山の詩にて、右奉祝表兄偷安先生八十初度、眷弟柴邦彦拜具と歎す、天明文化頃の人。

都崎 秀太郎

名は熙、字は義典、梧庵、天民、楞櫟子、頓着泉と號す、嘉永五年五月八日讚岐國阿野郡福江村に生る、少ふして片山冲堂先生に學ぶ、明治十五年愛媛縣會議員に當選、廿二年香川縣會常置員に當選、廿三年議長に當選、廿五年衆議院議員に當選、改進黨所屬、十四年内國砂糖大會社企劃成らず後糖業會社社長に當選、續いて廿九年高松銀

行頭取に當選、四十一年辭す、再び大正四年頭取に當選、十三年百十四銀行と合併時に及ぶ、卅一年讃岐貯蓄銀行を起し頭取に當選、大正四年高松銀行と合併時に及ぶ、卅五年讃岐紡績株式會社専務に當選、大正七年倉敷紡績株式會社と合併時に及ぶ、卅三年金山鹽田株式會社社長に當選歿期に及ぶ、大正十三年金山新塩田株式會社を企畫し工半途にして歿す、于時大正十五年十一月四日齡七十五。

津谷弄山 (現代人)

氏は綾歌郡宇多津町の人、文久三年七月十七日同町に生る、幼名を千太郎と稱す、後正昂と改め、字を宗雅、弄山と號し又別號碌々野人と云ふ、幼より文藝を好み、詩文は藤澤南岳に、繪畫は近藤獨賢に就き學び、後自己の獨修を積み雋逸なる畫風を案出し、南畫界に獨歩するに至れり、氏の揮毫せし畫は中年以來數千點に上ぼるが就中特記すべきものを掲ぐれば、大正五年十一月大隈首相の紹介により立太子記念畫帳揮毫の光榮を受けたり。大正七年鳥取市全國博覽會、同八年名古屋全國繪畫展覽會に出品し夫々受賞す。昭和元年佐世保海軍水交社攝政宮御宿泊所備置、四季山水屏風を揮毫す、大正元年九月海軍軍艦某號司令官室に掲ぐべき山水幅を揮毫す、因に氏の畫は海軍部内に懸望者多く大抵の軍艦には備へ附けられありと。

趣味

氏の趣味は古人の書畫を觀賞するに在つて、現今迄に蒐集せしもの無慮五六百點に達せり、又平素暇あれば作詩に没頭せり、近作を左に示す。

述懷

何求富貴朱門榮、只有春秋花月清、常讀經書親聖哲、敢辭塵事且虛名

築地九井

名尙明、字文長、號九井又槐山、堂號虛心堂、其先長州人、父尙教讚岐に來住す、○醫を以て高松侯に仕ふ、詩を能す、每朝論語孝經を誦す、享和二年三月七日歿す、年八十六、墓は綾川撰文。

築地言章

名言章、字子望、九井の子、○亦詩を能す、壯時長崎に遊び終に彼地に於て病歿せり

築地仲貫

名は尙、篤三郎と稱す、高松藩侍醫築地立庵の次子なり、岡内綾川に學び頗る文辭を

能くす、惜哉天保七年八月四日年僅に二十一にして歿す。龍山の友人なり。

永訣詩

舉國豈無秦越人
十年學業空灰盡

難何二豎弄吾身
唯有山邊片石新

次韻

風流文彩屢驚人
掩淚長吟竹窓下

才子從來多喪身
遺篇空見墨痕新

木内龍山

辻言恭

名言恭、字子禮、三野郡仁尾人、父は源助、○安永三年京に上り、栗山に入門し經史を學び、旁福井大車に醫を學ぶ、苦學病を成し、四年九月歿す、年二十四、○柴野氏の雜字類編は此人の校せしなり。

辻玄通

辻玄通、諱は信古、幼名幾治郎、珠涯、珠浦又は彭卿と號す、組橋道順の二男にして延享三丙寅年讃岐國那珂郡那家村に生る、組橋氏は甲斐源氏(武田氏)の後裔にして世

々醫を業とす、玄通幼にして父を喪ひ、志を立て、丸龜藩儒三田義勝に就きて垂加神道の教を受け、十六歳高松に遊びて經學を菊池黄山、深井雞林に問ひ、二十歳京師に上りて醫術を上田茅門、清水祥助に學びて山脇東洋の醫流を祖述す。又産科を賀川子玄に、鍼道を垣本鍼源に學び、以て本邦古醫方を集成す。廿四歳の時國に歸りて丸龜侯の侍醫となる、幾もなく香川郡檀紙村辻氏に聘せられて其の養子と爲るに及び侍醫を罷めたり。

辻氏、本姓は橘、元龜天正年間辻民部正勝と稱する者あり、生駒雅樂頭近規公に仕へて屢武功を立て、天正十五丁亥年公の讃岐に封せらるゝや、隨ひ來りて祿千石を食む寛永六己巳年正勝卒するに及び、生駒壹岐守高俊その祿を四子に分與せらる、三郎右衛門正實は其の季子たるを以て阿野郡上羽床村にて二百石を食み、子三郎右衛門正重に傳ふ。寛永十七庚辰年七月生駒侯國除せられ出羽に遷さるゝや、正重亦浪士となり羽床に屏居す。後五代を経て元仙に至る。元仙諱は正人、始めて檀紙に移り、醫を以て業と爲し、産科に巧みなり。安永四乙未年三月元仙没して嗣なし。親族相讓し玄通を聘して家を承けしめ、配するに元仙の次女を以てす。玄通勵精醫業に従ひ、資性淡泊にして人に接するに和氣春風の如し。此に於てか家運益々盛なり。玄通、方技の暇、性博洽を好み、嘗に醫事を研究するのみならず、經史よつ文學に至

るまで學修せざるはなし、その文學には珠浦文集等あり。

歳旦

斗律方回節序更。東風吹遍鳳皇城。千林黃鳥報春急。萬叟彩霞籠雪輕。短褐却非
茫叔志。敗裘何厭長卿情。如今幸有能文客。來往含盃樂此生。

歲暮

孤客繙書對窓前。寒燈挑盡夜蕭然。千秋功業何時就。百載文名幾日傳。夙樂程朱
濂洛學。空思王氏剡谿船。浮雲塵世一宵夢。當識鐘聲報改年。

須磨覽古

宮車一去海門秋。十萬英魂此地休。野虎併吞天下後。青松依舊對浮鷗。

玄通常に活眼を以て古書を看破す。嘗て南海治亂記を閲し、其の文辭冗長にして後學
者の不便なるを感じ、其の要を摘みて一冊子と爲し、四國舊記と名づく。其の自叙の
序文に曰く、

夫史也記事以贈之後世一矣。我邦史記者何限。不佞信古刀圭之暇取而讀之。略知
古今得失否泰之正變一矣。頃見南海治亂記者一則記我四州之事也。始細川律師之
起兵於讃州一而終羽柴氏之平治四州一焉。然其書文辭不佳卷圖頗多矣。以非早卒
之用也。故信古取其要者而錄之加以所聞約爲一小冊一。名謂四國舊記一也。取

之掌中以爲温舊之一助云。

○ 安永二歳在癸巳閏三月下旬

讃州

組橋信古彭卿 序

これ玄通二十八歳の時にして、其の辻家相續に先だつこと正に二年なりしを知るべし
玄通家産を治め、子弟を教ふるに方あり、享和元辛酉年七月廿八日付遺誡一卷あり。
曰「後人え書殘す條々掟之事」と題す。其の内容を略記せば、

- 一、醫は家業なれば随出分精し、怠ることあるべからず。
- 一、博奕諸勝負事かけ事堅く禁制。
- 一、飲酒を慎しむべき事。
- 一、喧嘩口論すべからず、只何事も堪忍の二字を守るべきこと肝要なり。
- 一、色好みなすべからず。
- 一、佛法に歸依し、神佛を尊み奉りていよく信心になすべし。兎にも角にも殺生
を禁じ、小虫と雖もみだりに害すべからず。萬事あわれみ慈悲の心を第一に心得
べし。
- 一、郷方の居住を厭ひ城下へ引越すこと必ず無用に候 此儀は城下へ出候へば物入

等多く有之、身上破滅の基也。謹で居を移すの意あるべからず。
一、創業の辛苦を懐ひて勤儉産を治め、猶祖先の厚恩を深く有りがたく思ひ、朝夕も忘るべからず。
等これなり。かくて翌享和二年戊辰七月四月没す、年五十七。

逵 鳳山

號鳳山、或云、天保頃西讃の人、○畫を能す、○逵は普通辻姓なるべし。

逵 紫嶂

名祐吉、通稱左平、號紫嶂、三野郡仁尾人、○雪溪に學び、花鳥著色畫をよくす、明治廿一年九月没す、年六十六。

辻 玉浦

名は忠正、通稱政次郎、玉浦と號す、大川郡志度町の人、商業の餘暇、畫を學んで能くす、大正八年五月四日没す、年八十二。

鶴羽宗助

小豆郡福田村吉田の入船乗を業とす、文祿年間豊太閤朝鮮征伐の際徴せられて船長に任し、黽勉能く勤め大に功勞あり、依て吉田村開拓の許可を得て成功せしと云ふ。同地に於ては鶴羽家を吉田の開祖なりと傳ふ。

同家に豊公の重臣小西行長の文書あり左の如し。
小豆島吉田浦田品ひらき可申事油斷有間敷候山海は金崎より西泊之はな迄其の方へ申付候間彌々可 急事肝要候恐々謹言

十二月二十一日

小西彌九郎

鶴羽宗介殿

行長(花印)
(小豆郡史)

ツ 號索引

通明(木村) 通賢(久米) 通玄圖書(松平)
通恒(有岡) 通寛(細谷) 通方(細谷)

○ネ之部

念々佛

(かめ女を見られよ)

根本彌右衛門

通稱彌右衛門、○惠公の時(正徳享保間)十河順安と共に高松講道館に經を講ず、當時高松にて讀書人は大抵其門人なり。

根本石童

名惟柔、通稱八兵衛、號石童、○詩を能す、梅花年後多、(題)春還南陌算年春。積索凝寒竹外家。無限暗香風不度。何知白雪是梅花。

木號索引

寧景(漆原) 寧卿(勝田) 寧溪(十河)

中引宮家

○ネ之部

○ナ之部

中臣宮處連

是天兒屋根命より出づ、其十世の孫大小橋臣命の時に至り、應神天皇詔して汝の遠祖天兒屋根命の譽受地讃岐國山田縣之宮處を遠世長世の爲めの家居たらしめんとて此地を賜ふ、大小橋臣其子靜臣を罷り下す、是れ山田郡中臣宮處氏の起源たり、爾來左の系により十五世間繼續せり。

- 一世 靜子臣 (大小橋臣命の子)
- 二世 靜依臣 (靜子臣の子)
- 三世 靜富臣 (靜依臣の弟)
- 四世 靜別 (靜富臣の子)
- 五世 靜根 (靜別の子)
- 六世 靜比古 (靜根の甥)
- 七世 靜老 (靜比古の子)

八世 靜建 (靜老の子)
 九世 靜養 (靜建の弟)
 十世 靜主 (靜養の子)
 十一世 靜 (靜主の子)
 十二世 靜名 (靜の弟)
 大化改新に際し縣主廢され、大化二年二月七日山田郡大領に任せらる。同十三年十一月特に朝臣の姓を賜ふ。

十三世 靜足
 二年山田郡大領に任せられ、和銅三年戶籍編造の際家屋里名を以て氏に加へて中臣宮處朝臣と稱し、靈龜二年外從五位下に叙せられ、養老六年五月卒す。
 十四世 靜臣
 善錢(二十五貫)により正七位上に叙せらる。
 十五世 靜磨
 養老三年山田郡大領に任せらる。

宮處氏居址

は本縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第三號に據れば左の如し。
木田郡前田村大字西前田字岡崎五百番地の第一、二、三、四番地、畑四段七畝十二歩
此地は天長年中弘法大師が山田縣主中臣宮處氏遺蹟の湮滅せん事を憂ひ、その館舎
の跡をトし一大伽藍を建立して寶壽寺と號す、爾來宮所八幡宮の別當たりしが天正
年間の兵火に罹りて烏有に歸せりと、後世其の廢墟を指して堂床(堂所)と稱するは
蓋しこれに因るならん、而してかの寶壽寺は堂床より約十餘町許り北西方に當れる
岡崎即ち神櫛王の宮殿跡と思はる、地を相して之を再興し、名を改めて押光寺とな
し明治二年神佛分離の際廢寺となりぬ云々。
現在所有者は前田宥國氏なりと。

中院源少將

此人は京都の公卿中院家の次男か養子ならん、或書には本名定忠ともあり、大川郡史
には中將定平の一族とあり、長町系圖には定平とあり。一本藤房卿の弟ともあり、延元
年間に南朝より任命され、讃岐守として細川清氏とともに讃岐に來られ、鶴足郡西長
尾城に入り南朝の旗を翻へし居られし勤王家なり。伊豫の歴史を見ると延元三年(北
朝の暦應元年)彈正少忠得能通村が滿良親王(後醍醐天皇第九王子)を奉して長尾城に
入るとありて讃岐勤王黨の本據なりしも、正平十七年(南朝貞治元年)七月清氏高屋に
亡ふ迄前後二十餘年に亘つて南朝に盡せしも同九月頼之西長尾を攻む、大軍拒み難く
源少將自殺す、津田長町家系圖によると中院少將は定平と稱し、村上天皇の皇子具平
親王の遠孫にして、貞治年中南朝より鶴足郡へ下り長尾村に居城せしが少將戰死の後
其遺族が大川郡石田村に移り、最後に津田村に移りしものなりと云ふ。
(參考)

長町家系圖

村上天皇の皇子具平親王の遠孫中院少將定平朝臣貞治年中の頃、南朝より鶴足郡へ
下り長尾村に居城す、後子孫寒川郡石田村に移て居城す、天正の末年に至り九條忠
榮卿の三男京都より下向し來り、長町出雲守と名乗り石田村に居住せしが中院家の
養子となり、後長曾我部氏の爲めに滅ぼされたるを以て、右出雲守は小西攝津守の
朋友たりしかば肥後に下り居住せりと云ふ、又津田の長町家は同氏の末孫なりと云
ふ、天正の末長町佐兵衛忠平が子與左衛門長久の代に至りて津田村に轉居し、寛永
五年頃には忠久あり、元祿五年頃には與左衛門賀路あり、大庄屋を勤めしと。現今
の戸主は與彦と云ふ。

長尾元村と元高

はもと橋少將と云ひ橋公成の裔にして、世々三野郡宮の御崎に居て海崎豊後守元村と稱す、元村の子元高大隅守と稱す、貞治元年高屋の役に功あり、山田、羽床、栗熊、長尾等の諸村を賜はる、因て應安元年正月廿七日西長尾の城に移り、氏を長尾と改め世々大隅守と稱す、元高に八男八女あり、嫡男は次郎左衛門と云ひ父の跡を繼ぐ、次男は炭所に築き居り伊勢守と云ふ、三男は左衛門尉と云ひ岡田に築き居る、四男は高純と稱し栗熊に築き田村左衛門尉上野守と云ひ、以上は長尾三家と稱し威勢あり、五男は五郎左衛門と稱し岡田の跡を受く、六男は上野介と稱し栗隈の後を受く、七男は左衛門尉と稱し長尾の後を受け筑後守と稱す、八男は惣右衛門と稱し炭所の後を受く、長女は安富筑後妻、次女は齊藤下總守妻、三女は三原左近妻、四女は熊岡丹後妻、五女は新明次郎妻、六女は伊賀掃部妻、七女は子松石河兵庫妻に夫々嫁し子孫繁榮せりと云ふ。

長尾高晴

六世の孫高晴備中守に至り三野、豊田、多度、那珂、鶴足、阿野等の諸郡にて六万五

千石餘の地を領せり、天正七年四月廿七日長曾我部元親來り攻む、因て同廿九日迄數度戦ひしが勝利なきを覺り香川氏の扱により元親と和平す、是歲七月廿七日元親に誘はれ阿波に至り重清の城を攻めしに、元親も兵を出して攻めるまねして、却て豊後守と共に大隅守を圍み、八月朔日大隅守之が爲めに謀られ遁るべきようもなく手勢残らず討死す、元親其城を取つて陣代とし其老國吉三郎兵衛に兵一千人を附して守らしめたり、因て國吉城とも稱へたり。

其七世の孫に高勝あり、其後に至り岡田氏又は片岡氏を稱する者ありと云ふ。

日柳氏系圖に左の記事あり参考として掲ぐ。

長尾落城臣下離散

于時天正の始頃土佐長曾我部元親、主人長尾大隅守と數度の軍に鎬を削り、千變萬化と合戦すれども勝負つかず依て和睦す、其後天正七年正月より又候不和になつて正月より八月迄合戦止むことなし、終に長尾家武運拙なく天正七年八月朔日落城す夫より長尾氏家中三千四百餘人の中忠臣三十七人召連れ、炭所の山奥に引籠り寛永十八年迄炭所に住す、同年六十七人の忠臣所々に分散す。云々

(參照)

西長尾城跡

村の中央金山の麓、町田井と云ふ所にあり、北方にあたり城山とて城跡あるは當時の牙城なるべし、此の城は中院源少將の居城なり。

長尾因幡守及備中守

縣史に左の記事あり、長尾の一族ならんか。
天文、元龜の間子孫因幡守及備中守なるものあり、元親に降る、秀吉南征に及んで其城邑を失ふ。

奈良氏ご其子孫

奈良氏は鶴足津聖通寺山の城主なり、其略歴左の如し。
奈良氏は舊東國の人にて應仁の頃太郎左衛門元安なるものあり、細川氏に屬して香川、香西、安富等の諸氏と同く四天王と稱せられ鶴足、那珂の二郡を領す、因て元安城を宇多津に築て居れり、元安の子備前守元信（常に京師に在て管領家の事を執行し）元信の子太郎兵衛元政（或は勝政）と云ふ、元信之れをして宇多津に居らしめ

老臣後藤左衛門佐、物集大藏太夫、進士隼人佐等をして後見とす、此時頗る所領を失ひ、津郷の二村川津等の數村を保つに過ぎず、天正十年土佐元親讚の諸城を降し其族親政をして來り攻めしむ、元政固より兵少くして拒き戦ふ事を得ず城を棄て、香西伊賀守に力を合さんと軍勢二百五十人を率ひて、香西郡小山なる龜塚に陣を取り居たりしに偶ま八月二日大水出でて香西軍に合するを得ず、因て路を轉じて阿州に至り三好存保に屬して勝瑞の城に居たりしに、又元親の軍兵二万餘人に攻められ同年八月廿八日中富川に於て戦死す。太郎兵衛は聖通寺を中興せりと云ふ。
太郎兵衛が子女は、主人歿後聖通寺山城中の資財糧餉を大船數艘に積て上方へ退却す、奈良備前守も上方にて歿せり。
太郎左衛門は太郎兵衛が子なり、四國平定の後其從類老少を引連れ鶴足津に歸り、同郡津郷邊に居住し生涯を送れりと云ふ。

長尾孫七郎

孫七郎は綾歌郡長炭村の種子城主、左近左衛門盛國（或は元國）の子なり、幼にして父を失ひ、その舅家なる備中守に養はる、天正七年長曾我部元親阿波の重清城を攻め、長尾備中守を阿波に誘ひて殺す、時に孫七郎、井上長太夫と共に衆中に紛れ敵槍七枝

を伐折して脱る、敵兵感嘆せざるはなし、天正年中采を失て僧となり、玄正入道と稱し尊光寺に居る。
(全讃史)

長尾權守

三木郡朝倉村大畑の城主なり、土人云、長尾氏は生國信州なりしを以て、當城より東北の方に戸隠權現を勸請して鎮守と爲せし由。

中井民部正

香川郡圓座村上本村にありし中井城の城主なり、中井民部もと川邊に居りしが圓座に移り中井と稱す、平相國中井民部に食邑を賜ふ、縣令中井左馬允采を圓座郷に食み中井城と云ふ、松王小兒の父なり、左馬允繼豊と云ふ、此人が河邊諏訪神社を再營せりと、郷正中井藤左衛門は其裔にして今に至る四十代を経ると云ふ。

中村氏宗

は其先美濃國人士岐氏の庶流なり、加賀守と稱し天文頃此國に移り、山田郡田井城に居りしが弘治三年四月廿三日原采女助とたゝかひ敗死せり、而して天正八年此城も火

災にかゝりたり。

中村宗ト

は氏宗の子にして初め諱恒頼、新左衛門と稱す後靈夢に感じ宗トと改む、天正八年田井城火せしを以て城を五劔山(今の八栗寺の門前)に築き、天正十一年四月新城に移る武略人に過ぐ、天正八年長曾我部元親來り攻むるを聞き、額田一鶴齋の伏降説を排して八幡宮に一夜籠り神託と稱し、弟左近村瀬彦次郎等を始め恩願者二百三十六人を率いて八栗寺に一夜の中に移り急に旗を上ぐ、元親其部將珠數懸孫兵衛久重を將として一千人を以て之を討たしむ、宗ト之を誘いて近づかして鳥銃一發久重を斃し、大いに土軍の寄手を悩ます、元親怒ると雖も小城を急に攻て兵を損するより糧道を絶つて降伏せしめんとす、宗ト其衆寡敵し難きを知り一夜庵治浦に走り、備前の兒島へ逃れんとし舟を泛べて下津井に着し、途中安治野を過ぐる時杜鵑を聞き左の詠あり。

鳴渡る末は何くとほとぎす

駒を早めてしたい行哉

而して兒島郡林邑中納言某の處に至り留ること四年、四國平定して天正十四年豊後の役仙石秀久の徵に應じ兒島より豊後に出征す、同氏國除の後尾藤氏まで仕へしも同氏

國除に及び劔山下に家居す、生駒君就封の時既に年老ひ薙髮して宗卜居士と號すと、慶長年頃没せしならん。

中内藤左衛門

土州元親の部將にして、天正七年元親五千餘人を卒して財田に出で中内藤左衛門に財田域を守らしめ、其子源兵衛をして出陣の供奉せしむ。

中内源兵衛

土佐元親の部將にして藤左衛門の子なり、財田の城を守りしが、天正十年八月五日土佐軍香西へ進入の時、旗頭として兵三千人を率て來りし人、天正十年元親豊公に降りしかば兵を率て土佐に歸る。

仲行司貞房

仲多度郡中村の城主なり、其位置は宮東の下方字行路と云ふ所に在り、全讃史に「仲行司貞房居之」云々とあり、屋島の戦に源氏に屬せし者を征夷府に録上せし書中にも多度郡仲村城主として其の名見ゆれば、或は國司時代の郡司たりしより行司の稱ある

にあらずや又同史に「後世有行司清左衛門猶居之」云々とあり、治亂記に三好實休が香川之景を攻めむとして金倉寺に陣せしとき綾、鶴足、仲郡の諸將三好軍に投せし中に「仲行事」とあるなどは此の城主にて清左衛門などにあらざるか云々。

(仲多度郡史)仲行事貞房は壽永三年源氏に應せし人名中に見ゆ。

中津爲景爲忠

其事蹟左の如し、金倉顯忠と異名同人ならんか。

其墟下金倉村川東にあり鬼屋舖と云り、延寶年間開て田畝となせり、相傳ふ六尊王經基の五男下野守滿快、二十一世の孫三郎左衛門爲景此地に居て金倉、柞原等を領せり、其子爲忠將監と稱す、武力人に絶へたり、自其勇を頼み驕奢限りなし、人呼んで鬼中津といへり、香川信景と善からず天正三年信景香西伊賀守、福家七郎、瀧宮豊後守、羽床伊豆守と相謀り討て之を滅せり。

(西讃府志による)

中村市正光重(光金)

香川郡川岡村中間城の城主にして香西氏の部將なりしも、香西氏亡びて後其子孫生駒氏に仕へ、文祿征韓の役に戦死すと云ふ。

中飯田備中守

香西氏の麾下にして飯田に住す、天正十年八月五日香西伊勢の馬場合戦に先鋒として参加し奮戦同日流弾に中りて戦死す。

成相右衛門信安

香西氏の部下にして香川郡成相村信安の城主なり、天正前の人ならん

夏目包高

名包高、加賀守と稱す、元大阪の刀工、松平節公召して高松に住せしむ、延寶天和頃なり、○陸奥守包重も同時に高松に召さる、高松住吉政、又高松住下坂と銘するあり。

業宗

通稱三郎太夫と云ひ那賀郡高篠村の人、相州政宗の弟子にして劔工の上手たり、建治頃三木郡井戸村に生る、其子を光宗といふ、其家五代にして絶へたりと、其系左の如し。

光宗は業宗の子(正應頃)

光宗二代目阿野郡に住す(正和頃)

友利 業宗の子

越前 友利の子

國利 越前の子(元徳頃)

業宗 國利の子(康永頃)

行利 國利の子(康永頃)

因に三木郡井戸村大字高木に鍛冶池と云ふあり、此鍛冶に關せしものならんかと友部方升はいへり。

明和五年出版の類字銘盡に左の記事あり。

業宗 高市三郎太夫 大治(六百四十二)

光宗 安生太夫と云 寛喜(五百三十九)

友利 業宗子 文暦(五百三十四)

友利 建長(五百十九)

國利 高市住藤五郎と云文暦(五百三十四)

景宗 文暦(五百三十四)

長尾次郎左衛門

は仁治年間に於ける讃岐の守護代たり、同三年其臣橋藤高をして木田郡早瀬岡にある正大寺を現在の地(下林村)に移し崇信すとあり、又道範の南海流浪記に曰く、仁治四年二月十三日國府を立ち、讃岐守護長尾二郎左衛門の許に至る、路間二里云々、十四日守護所の許より鶴足津の橋藤左衛門高能と云御家人の許へ預けらる、云々とあり。

中山城山

名鷹、字伯鷹、通稱壘、號城山、香川郡横井(池西村)の人、其小歴を左に記す。

其先は從一位中山准大臣孝親公より出づ、公の第二子左門教親、天正の時に方り故ありて讃岐に家居す、初め田中郷に住し後由佐高洲に移り而して逝く、其四世を文四郎と云ふ、即ち城山の高祖父なり、感ずる所あり士服を脱す、其子を四郎右衛門と云ふ、已に長じて家産衰ふ郷里の豪族多く之を輕んず、是を以て業を醫に改め立庵と云ふ、術を和州の久保隆穆に受け歸りて郷里に施す、漸く里人の重んずる所となり家産稍や興る、長子を立柳と云ふ、城山の父なり、善く父祖の業を修む、中年にして故居を去り横井に入る、子數人ありしも多く天し存するもの城山及弟元義ある

のみ城山、幼にして藤川東園に就き古文辭を學び、業成りて故園に閑居せしが寛政十一年大久保元老の招聘ありて高松城中に移り後進を教導す、學和漢を兼ね又佛典に通す、門人多し就中東咳尤も著はる著書七十餘部あれども出版されしものは全讃史のみ、他は稿本の儘遺族の許に藏せらる、天保八年四月二十三日没す、年七十五里南古川上に葬る、後又門人渡邊韶等相謀り碑を綾北高屋の遍照院内に建つ、東咳の撰文にして松浦の書する處なり。

著書、辨道辨名考一冊、論語徵考二冊、孟子辨解三冊、南海遺珠二冊、四家雋考三冊、徂徠集考五冊、左氏傳撥亂五冊、毛詠考二冊、尙書考二冊、周易考二冊、俗文廢疾一冊、俗調膏盲一冊、詩字發蒙一冊、文章準繩一冊、御龍子一冊、勁草編一冊、瓊浦記行一冊、辨譯文要訣一冊、練將編邦言解七冊、弄月集一冊、膽氣篇邦言解七冊、東伍篇邦語解五冊、城山前集十一冊、城山後集八冊、校正讃國舊乘一冊、城山國歌集五冊、城山臨土雪花蛙五百首一冊、玉緒縫之糸口紀歌註四冊、城山寢語二冊、傷寒論探頤八冊、金匱要略考註二冊、城山日庸方三冊、神聖内景正說一冊、老松諄言一冊、御龍子緒言一冊、黃庭經解一冊、城山見聞錄十二冊、全讃史十二冊、總數四十七部、百二十五冊あり。

送 別

大君の遠の御門の吾妻なる

大城のもとへいます君かも

平石

仁尾海邊風景環。就中平石絶人寰。此地如令子陵在。終年垂釣不知還。

明月濱

燧洋風浪送沙平。此地由來勝景名。是日更腰象鼻望。白沙處々如月羽。

中山 鼈山

名驩、字士驩、號鼈山、城山の二男なり、城山の高松に移る時、鼈山年僅かに十二歳なりしも詩を朗すること精敏にして、禮を問ふこと勤勉なり、年已に十五歳にして城山の代講をなす、時人號して鼈山先生と云ふ、後廿四歳の時京師に上り泉涌寺で論語を、醍醐山で莊子を講じ、京中に帷を下し名聲を博したりしが、惜哉文化十二年七月廿七日年僅かに二十七歳にて逝けり、岩佐氏を娶り未だ幾年ならずして歿す、故に子なし、是より先妾に一子を生ず、甫て三歳城山之を育す遺篇あり、東咳之を編輯す、鼈山遺稿四冊是なり。
鼈山の墓は横井村に在り、而して遺髪を埋めたるものは宮脇祥福寺にあり。

中屋 於梅

大川郡田面峠坂口に於梅茶屋あり、寛政の頃其店に中屋於梅とて強力の女あり、浪華なる奴小万が餘風ありて、小賊共近傍へ近寄らざりしと、或夏の夕亭主外にて盪蕩に入浴中夕立雨降り來りければ、急ぎ盪其儘内へ入れしより、強婦於梅とて國中に評判せりと。
(讃岐名勝圖會)

中塚 庄吉

幼名辰藏後庄吉と云ふ、松隣翁と號し、俳名を霞山と稱せり、享和二年十二月五日小豆郡池田村入部に生る、常に俳句を嗜み又書を能くす、名吟秀句尠からず、太麻山西の瀧なる芭蕉塚は其の建設に係るところなり、若くして先代の家産を受け海運業を營み、巨船を以て遠く長崎に航し、外人と貿易を爲し大いにその家産を増殖せり、曾つて獻金の廉により、藩主松平三河守より苗字帶刀を許さる、老年に至るや白鬚を長く蓄へ、毎に神佛を崇敬し、其神社佛閣に詣するや、衆兒に金錢を授與するを例とす、故に群童慕ひて常に圍繞せり、其性行の濃厚仁慈なること知るべきなり、郷社龜山神社に奉納せし支那人林雲達筆の額面は曾つて、長崎に航行の際囑せしものなり。明治

八年九月三日歿す、享年七十四。

中山雪子

名雪子、行敬の長女なり、○歌及書を能す、明治元年四月歿す、年七十。

中山久子

名久子、松平頼儀の母、本京人、後即就院と稱す、文政頃の人○歌を能す。

辭世 作りこし罪も報も御佛の御名きえ行く春の沫雪

中山行篤

名行篤、通稱千馬之助、文久元治の間高松藩執政となる、初紫田半三郎と稱す、中山行敬の四男、○歌を能す、○別れにし人はいづちの白雲のはてに君や思ひたどらむ。

中山行敬

名行敬、通稱千馬之助、本京都○紳家の臣なり、即就院に従ひ來高す、○歌名道彦、文政元年十二月廿三日襄公の家老となる、天保三年九月三日歿す、年五十一。

中川龜峰

名俊彦、字美伯、號龜峰、高松石清尾祠官、文政天保頃の人、○詩書を能す、欸乃一聲集に、巢雲山人又巢雲亭とあり、龜峰の印に巢雲主人とあれば是なり、○子正記、歌をよめり、

中川正記

五百城と稱す、俊彦の男、岩瀬尾神社の神官、萬延頃の人。

中川百人

名百人、中川半之丞の子、○高松靖公に近侍し、文章係たり、文久三年春歿す、年三十餘。

中川馬嶺

名勝次、字永年、馬嶺(青崖)と號す、本小豆島の馬越の産なりしも、幼より畫を好みしを以て高松中川家の養子となれり、○竹石に學び後一家をなす、筆勢勇健、山水花

鳥皆佳なり、萬延元年八月歿す、年七十八。

中川 愛山

名勝、字陳年、號愛山、馬嶺の子、高松福田町の人、○幼より畫を父に學び後明清人畫風に倣ひ、山水尤も妙なり、明治廿六年九月歿す、年七十二。

中川 馬石

號馬石、馬嶺の子、○畫を能す、早く歿す。

中川 愛竹

通稱勝太郎、號愛竹、愛山の長子、○家風を承け畫を能くす、明治廿三年三月歿す、年三十四。

中川 愛梅

は延太郎と稱す、愛山の二男にして安政四年正月八日高松市福田町に生る、父に學び畫を能くす、山水尤も妙なり、大正十五年四月廿四日歿す、年七十。

中尾 金雄

綾歌郡端岡村大字新居の神職豊島大隅の二男、天保五年四月十四日生れ、弘化三年八月山内村中尾長門の養子となる、資性温良、慈愛に富む、幼時より學を好み螢雪の辛酸を嘗め和漢の學に通じ、書を好くし和歌に妙を得たり、神官の傍ら教育に盡瘁し又人の難儀を見ては之を救済すること夥し、德澤遠近に及ぶ、明治三十年頃歿す。

中村 文輔

通稱彦三郎、諱は文輔、字は文輔、君山又慶洞と號す、元牟禮の人、中村宗卜の裔なり、幼にして業を宮村某に受く、群兒中に在て既に頭角を見はす、弱冠笈を江戸に負ひ林正献の門に遊び、銳意勤學諸侯交辟すも意を進仕に絶つ、一日親の病を以て歸省す、藩主松平頼桓公時に高松に在り召して經筵に侍講せしむ、幾もなくして江戸に抵る公亦東勤し終に擢て、儒學に補す、彦三郎亦親の老ゆるを以て命を奉し祿仕す、其仕ふるや忠誠果毅曾て藩主の宴に侍す、藩主酒杯を彦三郎に抛ち與ふ、彦三郎色を正ふして曰く君臣を使ふに禮を以てす、臣君に事うるに忠を以すと其杯を執て之を藩主の前に擲つ、藩主乃ち其杯を執り君臣を使ふに禮を以てするの杯を賜ふと云ひければ

彦三郎頓首し臣君に事うるの御杯を拜戴すと、其強直率ね此の如し、常に藩主の駕に従ひ東西に往來する殆んど寧歳なし、曾て命を受け京師に遊び速水房常に従ひ古禮を講究し、歳餘にして其奥を究む、本藩記録所を置くに及んで總裁の事を管し、藩士の世系譜數十卷を輯す、傍ら本朝の禮樂刑政官位職員等歷朝の沿革を台考し、數十卷を著し名けて通志と云ふ、又神武天皇より後小松天皇に至る通史を編纂せしが未だ其稿を脱せずして病て没す、享年六十三、實に寶曆十三年七月なり、西方寺内に葬る、私諡景毅先生と云ふ、墓銘は芝山撰す。

白峰 懷古

中 文 輔

六龍昔日狩南州、豈謂翠華留一丘、青海夜懸雙闕月、白峰雲隔九重秋、猶看飛將餘金鏃、長有闕宮藏冕旒、應是宸襟安此土、于今俎豆歲時修。

中 村 弘 道

字は厚載、通稱彦三郎、文輔子なきを以て深井清左衛門の長子を養て嗣となし、妻はすに姪素貞(貞順)を以てす、父に繼て儒官たり、安永三年九月廿四日没す、年四十九。

中 村 五 松

名春野、又高麗麻呂、字無言又玄默、通稱衛助、號五松、高松人、中村宗卜の末裔なり、幸健の三子、○文化十三年藤井高尚に國學和歌を學ぶ、歸て慈公に仕へ、天保四年士籍に別し、天保六年考信閣總裁に進む、天保八年七月二十七日没す、年六十五、○家素より茶事を嗜み、古器書畫に富む、一朝火災に罹り、五松の遺稿も焼亡す。

明治四十一年春野の七十年を修するに當り、四方の文士より詩歌を集め附するに其遺稿を以てし、此れを松陰と題して頒布したり、○伊勢物語新釋跋文に源春野とあり、此人なり、又四國史詔詞解を著す、○樵路時雨 かきくらし木葉まじりにふりすさぶ時雨をおひて返る山人。

中 村 春 塘

名珏、通稱孫左衛門、號春塘又曉堂、高松人、○詩畫山水を能す、天保十二年七月没す、年五十五。

中 村 竹 巖

名登、通稱兼五郎、號竹巖又竹雨又金門、別號開霜、春塘の嗣子、○書を海屋に學び竹處と名を齊うす、山水蘭竹尤も佳なり、明治十五年没す、年六十八。

中村 九華

通稱小平太、號九華、高松藩士、○畫山水を能す、文久中没す。

中村 良谿

名良谿、通稱嘉十郎、號白醉又撫松、齋號奚疑齋、○森良敬、及土佐光文原在泉に學び書を能す、晩年重春塘に南宗を學び、山水蘭竹を畫く又歌を能す、天保三年正月生れ、明治二十年頃大阪に没す、年凡五十五六、○春日畫支流藤原良谿と歎するあり。

敦盛朝臣

ちとせふる色やみえしとおもいけむ

青葉なからに枯し笛竹

中村 松園

通稱政次郎、號松園、高松人、○詩書を能す、明治廿九年七月没す、年七十二。

中村 尙輔

名珠城、又尙輔、又尙孝、號默堂、幼名覺之助、通稱興三又興之助、號蘇舍コケヤ、高松藩士、中村惟孝の子、○地位流槍術を矢野東ツガキに受け、山鹿流兵法を深井象山に、國學を友安三冬に受け、語學と歌とに長ず、明治二年皇學寮教授、三年兼督學、十二年七月八日没す、年七十一、○隣家梅、風吹くとさこそ主は厭ふらめ隣嬉しき梅の匂ひを、○新名珠城といふも此人也、當時刀株を得る爲變姓せり。著書詞玉緒綫添、蘇の露、五十音義大意目錄、郭公三百首、雅言摘要辭、拾遺集遠鏡等あり。

中村 十竹

名惟孝、字伯敬、通稱義太夫、號贊岳、又十竹花顛、文化頃高松藩士、○書畫を能す書譜に草書あり、源惟孝と歎す、集覽にもあり、○又號樂樂老人。○著書に古言采覽あり。

中村 鶴市

名弘道、字厚載、號鶴市、高松儒官なり、深井興祖の子にて松齋の兄なり、中村文輔

の養子、妻は文輔の姪にて素貞といふ、○安永三年九月没す、年四十九。

中 清泉

名豹、字伯繩文蔚、通稱主膳、號清泉、丸龜藩士、勝村昌方の三男、業を渡邊柳齋に受く、後昌平鬻に學び舎長となる、歸藩後中氏を嗣ぐ、弘化四年正月十八日没す、年六十五、著書、論語集説及詩文集、易經本義集説等あり。

中 栢亭

名は準、字は士繩、號栢亭、俗稱幾彌、清泉の長子、丸龜の人、詩書を能くす、正明館助教たり、嘉永頃の人。

中 村 三 蕉

通稱正藏、諱は桑、字は子楡、醒軒と號す、後三蕉と改む、樓號清氣樓と云ふ、丸龜藩士中村彌門の五子なり、三歳にして父を喪ふ、天質庭弱母兄其武事に任へざるを慮り僧と爲す、然れども性讀書を好み呪梵を善はす、弱冠の比佛を捨て儒に歸し筑前に至り龜井昭陽の門に寓する、少時去て帆足愚亭に就き留る七年にして國に歸る、嘉永

二年擢て儒員に擧げられ、藩學正明館の副助教兼詩文係と爲る、安政元年藩事を以て江戸に赴き事竣るに及び、藩主に請ふて昌平鬻に寓し、安積良齋の門に出入すること三年、藩に歸り前職に復し且藩主の侍講となる、文久三年更に世子の侍講を兼ね、明治二年正明館の教授と爲る、同三年故ありて藩學を退けらる、同年官宜教係を諸藩に徵す、本藩正藏を擧て之に應ず、同四年廢藩の令下るに及び職を解き國に歸る、同五年學制を頒布せられし以來小學校の教師となる、十餘年文部省物を賜ひ多年教育の功勞を賞す、同廿一年八月職を辭し私塾を開き死に至る迄子弟を教養す、同廿五年大日本教育會其偉績を賞し銀製の賞牌を贈らる、同廿七年八月廿七日病て没す、享年七十八。○著書、三教小辨、適步集、寓茗詩文、三蕉存稿、三蕉詩稿、日本外史新論二冊、清氣樓詩文鈔、醒醉舍詩文集、蘇生餘筆、餘喘弄墨、壽藏院銘記、種簷餘音、蘇生餘事

中 桐 文 炳

諱虎、字は文炳、在水と號す、家世々醫を業とす、草壁村鍵懸山麓に生る、初め姓を中吉氏と云ひしも、文炳、吉を桐に改む、父を貞齋と云ひ漢方醫たりしが文炳は洋方を學び嘉永年中長崎に行き同三年痘種を得て歸る、此を地方に播く痘種痘の初なり、

夙に篤學にして人望あり、島中紛議の如きは必ず裁決を請はざるなしと、維新の際學校を創め教育に盡瘁す、爲めに名東縣より賞與あり、超えて明治九年春愛媛縣醫務調査係を命ぜられしも、明治十年八月十九日没す、年七十四。

鎌田氏を妻りて男女二人ありしが長男數三郎、季男才三郎皆没し、柏原氏の季子孝章を以て嗣となし、長女を以て之れに配す、されど長女早世し孝章實家に歸す、一孫女あり、明田氏の子を養ふて之れに配す、是を絢海と云ふ、文炳また俳句を能くす。

秋くる、鐘も届かす星が峰

中 桐 星 城

通稱儉吉、字制勳、星城又世忍と號す、天保十三年六月二十五日を以て小豆郡草壁村上村小坪に生る、父は勝次郎と稱し木工を業とす、幼より學を好み、日下聖洲、高橋西城、木下芦浦に従ひ素讀を修む、夙に神童の聞えあり、因りて師父等相議して、在阪藤澤東咳に就きて勉學せしめんことを議す、然れども家貧にして資を償ふこと能はず、是に於て僅に學僕となりて東咳の門に入ることを得たり、爾來奮勉努力研鑽すること十數年後東郡に出で、山形藩主水野出羽守に出仕す、明治二年郷に歸りて草壁村に明道社を、淵崎村に明親館を開きしが十四年再び出京して大藏省に奉職す、後埼玉

縣熊谷、山梨縣玉幡に私塾を開きしが十八年再び歸郷し、淵崎村に履霜書院を新築す二十一年香川縣を置かるや同縣に出仕し、後退りて高松淵崎間を往來して、専ら子弟教育の任に當り、更に内海高等小學校囑託講師となりしが偶胃癌を以て、明治三十二年八月二十四日没す、年五十八。

氏は學博く識高く殊に詩文に巧なり、嘗て岡本黄石全讀を漫遊して山水の勝を探り、文學の士に會して歸洛す、後人に語りて曰く、這回の漫遊中小豆島神懸山に遊びたるに、同地の中桐星城と談じたるは特に會心のことなりきと、又重野文學博士來島の際星城編するところの、三勝樓記を提供せしに博士一讀之の文は實に上乘なりと嘆賞したりと云ふ、又以て其の造詣の一斑を窺ふに足るべく、嘗に小豆郡の出せし唯一の漢學者たるのみならず、之れを全國に求むるも得難き有數の碩學たりしなり。

然れどもその抱負を實現するの機を得ず、空しく郷黨教養の任に終りしは惜むべき至りなり、小豆島に於て教を受けしものは長町貫十郎、赤松利愿、武井平太郎、森遷、菅原道、坂本定五郎等外數百人なり、著述小豆郡誌其他數種ありしと雖も上梓せしは文園自耕顏魯公稿本譯文、大祓之解の三書とす。

星 城 山

屹立疊山千仞青、邑連南麓擁江汀、佐公當日城於頂、篝火想看燿似星

富 岡

岡在滿崎村相僧應神天皇游幸之日上而遠眺

富與遠觀岡國音、應皇當日此登臨、飯依山色黃薇水、觸目自生懷古心。

中 桐 絢 海

小豆郡草壁村の人池田村明田久兵衛の次男にして、幼名益三後絢介又絢海と改む、諱は絢、字は素卿、號は星岳又柳東、碌々山人と稱す、年十二にして柏原謙好の門に入り醫學を修む、十四歳にして中桐文炳の養孫となり、十七にして笈を負ひて江戸に出て、石川良信の門に遊ひ洋學を研究す、明治初年郷に歸りて醫業を開き、同五年高松に出で柏原謙益の病院を開くや其の副院長に擧げらる、同七年高松醫學校の開設に際し其の教頭に任せらる、谷本富、緒方正清等は當時の在校生なりと云ふ、十二年家に歸り業を開く、同三十五年保養院を新築し大に斯道の發展を期せり。本務の餘暇を以て詩を賦し書を嗜み特に神懸山を世に紹介するに努め、自ら神懸山主人と稱し錦溪集の編纂あり。明治三十八年七月八日急性肺結核を以て逝く、年五十六、著書中毒小言錦溪集等あり。

中 澤 岸 水

號岸水、天保頃の人、書を能す、○栗洞展觀錄にあり。

中 澤 半 梅

名興暢、通稱又四郎、號半梅、高松人、晩年生嶋松枝舎に住す、○謙谷梅村に學び詩文を能す、明治三十八年十二月没す、年八十四。

中 西 林 重 郎

小豆郡池田村本村浦生入部の人、初め芳太郎と稱し後ち林重郎に改む、寡言沈着にして武道を嗜み擊劍の術に長し、竹刀の運用殊に冴へしと云ふ、文久三年津山藩本島に於て有爲の人物百名を撰び足輕役に任ずるや擢られて其の一人たり、慶應二年幕府長州を征せし時出て、出征軍に参加す。明治十四年八月一日蒲生村長に任せられ、村治上功績多かりき、同廿一年三月廿四日没す、年四十有九。 (小豆郡史)

中 野 好 文

名初好文後忠雄、高松人、明治十三年頃、○中村尙輔に歌を學ぶ、○夕萩風、いつも聞く音にはあれども夕さればわきて身にしむ萩の上風、尙輔判四十二番歌合にあり。

中野 忠雄

字子英、藻洲と號す、志度町の人、三溪に學んで詩文を能くす、安政頃の人。

中野 石屏

號石屏、文化頃東嶺人、〇書を能す。

中野 幸治

名幸治、丸龜藩士、〇柳齋に従ひ、經學に通ず、明治九年四月没す、年七十二。

中野 芝石

名喜哉、通稱瀧次郎、號芝石、高松人、徳田次八郎三男、友人佐々木清三と相謀り博聞社を創め新聞縦覽所と爲せり、〇家古書畫多し、愛山に學び山水蘭竹を畫く、明治廿二年八月十九日没す、年四十一。

中野 武營

は高松藩士中野可一の長男にして、嘉永元年正月三日高松市鐵砲町(西通町)に生る、幼名權之助又作造後武營と改む、晩に隨郷と號す、藩校講道館に學び明治五六年の交香川縣に出仕し史生、權少屬となり、次て熊本縣、山口縣後農商務省權少書記官となり辭して野に下り實業界の人となり、東京馬車會社に入り社務を整理し、後東京株式取引所、東京商業會議所會頭となり、明治四十二年澁澤子等と米國渡航團を組織し、彼國を巡遊し國民外交に盡す處あり、又一面縣地の爲には愛媛縣時代に在つては縣會議員及其議長となり、讃岐分縣運動に成功し、其他銀行會社設立、高松築港等に盡力し明治二十四年帝國議會の開かるゝや初期以來數度撰はれて衆議院議員となり、國政上に盡す處ありたり、大正三年東京市會議長となり處置公平との評を博したり。

趣味 嗜好

氏の趣味は謠曲で此は堂に入つたもので斯道者に譲らなかつた、其他詩歌書畫俳句圍碁等には餘り趣味を有せなかつたが晩年には隨郷と號し書道にこられ、高松に歸られるたびに頻りに揮毫し、知人などに頼ちたが書は少年の際北原椗庵に學ばれたので、矢張其先師の筆意が残つて肉太の字である。左の俳句と和歌は天下一品であるので掲げて紹介する。

ペルリの墓に詣て、

石碑イシツタに眼鏡拭ふや初時雨

唐崎へ行て松の枯れたるを見て

ともに知る世の味もから崎や

松も老たり我も老たり

嗜好物は酒であつて日に三度は必ず用ひられ、酒量りなし亂に及ばずで量が多くて多々倍々辨すでついど酩酊された、狂態を見たことがなかつた、明治四十二年渡米された時も菰樽を一丁携帯し、米國各地を巡遊するに際し何所でも至る處でチビリ／＼とやつて居られたと聞いたが、今なら禁酒國で大問題を惹起するかも知れぬが、其際は今の様に八釜敷云はぬ時であつたから別に問題にせなかつたのである、かくて氏は財界に盡せし功を以て正五位勳三等に叙せられしが、大正七年十月八日享年七十一歳を以て逝けり。

中井隼太

は丸龜に生れ岡山中學、早稻田大學等を経て、明治三十二年齡二十二にして辯護士となり爾來大阪に於て開業、彼の日露戰役後に起りし非講和運動に参加してより前後三回衆議院議員選舉に出馬せるも不幸落選せり、されど大阪市會議員としては明治四十

二年以來十一年間市政に盡す所ありしが大正十三年四月十八日病歿せり、享年四十五。

中川默堂

通稱傳平、諱良俊、字德卿、號默堂、別號三松園主人、高松市田町の材木商なり、幼より學を好み友安三冬に國學を、片山冲堂に經史詩文を學び、傍ら書畫彫刻等文藝に渉るもの能くせざるなし、公的には高松市會議員に選ばれ、高松築港の議に參して功あり、居常優悠として文雅を娛しみつゝありしが大正九年四月二日歿す、年七十二、出版書に栗山詩集及淡水餘滴あり。

中村石松

は丸龜の人、維新前は勤王志士と交はり國事に盡す處あり、燕石の如きは氏の庇護により屢々危機を脱する事を得たりと聞く、維新後に至りては人道愛憐の志厚く赤十字事業に身を委ね、東奔西走大に貢獻する處あり、爲に同社は報ゆるに特別社員の章を以てしたり、大正十一年二月廿三日歿す、年七十九。

奈良松莊

名廣葉、字洗心、號松莊、又翠岸、又泡齋、天明六年那珂郡榎井村に生る、後同郡神野村大字岸上に移る、○和漢學に通じ歌を能し、傍畫に及ぶ、勤王の志あり、燕石等と交る、文久二年正月二十八日歿す、年七十七、○初興泉寺にて僧となり、歌道を聞き大に悟り還俗す、僧名義立、後之を通稱とす、學初石潭に就き、次に京師にて牧招卿に、備後にて茶山に就き、後歸郷教授す、詩牛、篋軒、東渚、雲航等と唱和す、○五山堂詩話に僧法水とあり、松莊の事、○金郷春の夕榮に笑叟とあり、松莊の變名、○言志、天さがる鄙にゐながら老らくがあがふ心は君が爲こそ、著書、岸上樓雜記松莊吟稿、六帳題戀歌百首、詩句題百首、詠弘長百首題和歌、松莊和歌拾遺、奈良廣葉家集、一日百首三部、古事記略傳一部、奈良舍文集七卷、奈良舍歌集五卷、松莊詩抄八卷、松莊遺稿三卷其の他稿を脱せざるもの數部あり、皆家に藏す。

奈良象山

名弼齋、號象山、大内郡三本松人、醫、○書畫を能す。

奈良專一

專一は三木郡平井村池戸の農家、文政五年九月十三日に生る、始め村役人となり後戸

長に進み、又愛媛縣勸業課員等となりしも性來農を好み自ら耕作して生育を究む、奈良稻を發見してその利益を傳へ、碎塊器を發明しては製糖業に一大革新を興へ、後三田育種場に於て研究後は千葉、茨城、新潟、栃木、秋田等各縣の勸業に盡瘁し、傍ら農家得益辨、新撰米改良法、蒴蒴栽培調理法、蕙苴栽培調理法、食用兔飼育法等の著述をなし、一般農家を裨益する所多かりしも、不幸明治二十五年五月四日秋田縣仙北郡花館村の逆旅に客死す、享年七十有一、官多年の功績を嘉し、冥する數時間前綠綬褒章を賜ひて表彰す、大正十三年二月十一日從五位を賜らる。

自詠

萬倍のかまどの湯けは一粒を
耕やす蒼生の汗よりそたつ

奈良恒五郎

佛生山町の人、年十七にして佛生山領年寄役を振出しに、後同町副戸長、小區長、愛媛縣時代初期の縣會議員等に擧げられ、前後四十年間地方公共事業に盡瘁し、又晩年佛生山三等郵便局長となり遞信事務に盡くせり、大正四年二月九日歿す、年六十餘才。

灘波鹿泉

名重恒、通稱茂平、號鹿泉、高松人、茂徳の長子、家古書畫に富む、書は瑞圖を學び、傍墨竹を畫く、明治二十年四月十六日歿す、年五十七。

永瀧遜齋

名は廣徹、高松の人、歌を能くす、明治年中に歿す。

永田實苞

名實苞、通稱岩右衛門、石清尾社人、○歌を能す、天保六年二月歿す、年六十三。

那須資哲

名資哲、通稱直三、又俊助、香川郡上笠居醫、○學を好み、書畫及俳を能す、明治十五年六月歿す、年六十八。

那須賢直

名賢直ヨシナキ、通稱初清吾、後清助キヨタケ、高松藩砲術家、歌號ナヨクダノヤ奈與竹乃屋、又加備カベノヤ廼舍、○歌を能し、又森良敬に故實繪を習ふ、明治三十三年三月歿す、年七十一。

長曾根五峰

名玄、號五峰、讚人、文化頃、○醫を以て關宿侯に仕ふ、詩采風集にあり、○西臯秋老夜來霜。深綠淺紅曬夕陽。遠樹尤分會過寺。松間銀杏一團黃。

長尾正孝

通稱五大夫、諱は正孝、字貞齋、孤松軒と號す、高松の人、芝山、鹿庭に學んで詩書を能くし、左近君に仕ふ、今の雨山君の祖父に當る人なり、天保九年十月歿す、年四十二、名數錄三冊の著あり。

長尾謙

名謙、字益之、高松藩醫、文化頃の人、○書畫を能す、○畫譜に出づ、○五山堂詩話に張益翁、名謙、號桂叢、五山より五六年長せり、人老隱と呼ぶとあり、長尾謙の事と見ゆ、長を張といふは、竹石が張氏といふが如し。

長尾 織衛

諱は勝元、正孝の子なり、藻城武史又松渡と號し、左近公子に仕へ記室を勤め、大抵の御著書は此人の謄寫に成り書風までが酷似した處あり、嘉永二年四月公子が宇多津坂出邊へ謗法退治の爲め出興されし時も隨行し、和田津美渴船實記の著あり、弘化頃の人、子なきを以て弟柏四郎を嗣子とす。

長尾 竹 瀨

名は勝定又貞、通稱柏四郎貞齋の四男なり(即ち長尾雨山の父なり)性學を好み詩を善くし書に工みなり、維新前は左近公子に仕へ信任を受けたり、維新後は教育方面の事を擔當せり、後古高松村に轉住し子弟の教育に身を委し居りしが、明治十一年十月四日歿せり、年四十一、墓は萬日にあり、梅村撰文。

長尾 元 章

名元章、通稱杏齋、長尾鷲岳の父、高松醫、業暇詩を能くす、燕石の友人、元治元年歿す、○打鬼豆行。節分之夜燈光明。戸戸擲豆萬電鳴。鬼是外福是内。祝來呵去一聲

々。別有奇鬼黒與白。海上風醒妖霧塞。願製鐵彈千萬丸。一併打破群鬼魄。

長尾 鷲 岳

名裕又益吉、字元益又子德、號鷲岳、高松侍醫長尾玄章三男、○佐藤舜海に醫を學び沖堂に詩文を學ぶ、晩年釣遊を樂み、其詩及萬溪詩を印刷し、奚疑堂詩集と云ふ、明治三十餘年歿す。年六十餘歲。

長 束 玄 德

字子冥、終南と號す、大内郡白鳥の人、醫を東園に學ひ兼て詩賦を能くす、文化頃の人。

長 町 竹 石

名は徹、字琴翁、通稱德兵衛、初め黃陵、琴軒、文暉、後竹石と號す、竹石尤も著はる、寶歷七年正月廿九日高松南新町の邸に生る、家世々賣藥を業とす、性穎敏にして磊落落を愛し、施を好み天性畫を好み、池大雅建凌俗に私淑し、後支那の古畫本に依り研鑽し、一家を爲し特に山水に妙を得て氣韻の崇高なる介石愛石を併せて三石と稱せらる、其樂む所は琴棋詩酒にして酒德尤も顯はる、享和三年藩侯松平頼儀の駕に従

ひ江都に行き、諸名流と交はり繪事大に振ひたりと云ふ、文化三年八月十五日歿す、年五十、妻瑟瑟々また畫を能くす、○文化九年翁の七回忌を修するに當り、高松靈源寺に於て其雅筵を開きしに全國雅人より寄送せし書畫三百餘點に達せりと云ふ。

長町 耕平

氏は竹石長徽の曾孫にして父徳兵衛の世に至り綾歌郡富熊村に移居す、幼より神童の聞あり、慶應二年十三才にして法勤寺村高木禎吾(柏原長英の實父)に就き蘭學を修め從學三年大いに進歩するところありしも、明治四年東都に出で英語を學修し、傍ら獨逸人アドルスヘルムに獨逸語を學び、同五年大學東校に入り研究努めし爲め六年冬給費生に推薦され、同十四年七月大學を卒業し、越後三條公立病院長として招聘された同十六年には縣立山梨病院長として貢獻多かりしか、同二十四年郷里香川縣の有志の懇望により四月高松病院長として來任せり。氏は夙に細菌學を專攻して蘊蓄するところありしも、三十一年公職を去つて拙誠堂醫院を市内西新通町に開業し、地方保健衛生のため盡す所あり、又三十七八年日露の役の際は多額の金圓を獻金する等奉公の念深く、夫人は篤志看護婦として善通寺に勤務し、その功によつて勳六等を授けられたり斯くまで氏は終始一貫社會の公共のため心身を献げしも、大正八年六月廿三日宿痼

のため一番丁の自宅に於て享年六十七歳を以て逝けり。

君は象東と號し詩文を能くし、別業を庵治浦御殿山麓に營み、之を山海窟と號し、業暇此處に遊び又盛夏の候文人墨客を會し、納涼の雅會を開く、左は大正五年九月九日重陽の觀月雅集を開きし時主人の口占に係るものなり。

赴山海窟舟中口占

象 東

藻城東去凡三里、舟備機關一代粧如、屋島栗峯相見過、水雲深處是我廬。

長西 英三郎

小豆郡草壁村の人、幼時菅和次郎又與三郎と呼ぶ、壯年に及びて姓を長西、名を英三郎と改む、父を庄左衛門と稱し、家世々年寄役を勤む、資性豪毅率直にして頗る英斷に富む、常談以外會て他人の是非を論せし事なし、文久慶應の頃より殖産興業に志して醬油醸造業を起し、後ち營久社を組織して大阪、神戸、廣島、高知の各地に販路を擴張し、後年本郡の醬油王と稱せらるゝに至れり、又常に公共事業に盡して敢て名聲を庶幾せず、嘗て神懸山の外人に賣却せらるるやの風説を聞くや大に之を憤慨し、直ちに神懸山保勝會に巨額の金を寄贈し、然も全部同會が買收の曉に至るまで之を公表せしめさりしか如き、以て其の性行を知るに足るへし。大正元年九月桃山御陵の參拜

の歸途十月三日大阪に於て客死す、年七十九、神懸山に對する義舉に就ては同山四望頂に碑を建て、其の徳を表せり。
(小豆郡史)

長松 隣 泉

名爲衛、號初秀水、後隣泉、住宅の近傍に良泉あるを以てかく名く、通稱秀次郎、亭號來鶴亭、三木郡水上人、後平木に住す、○畫は版屋に學び、詩は篁山に學ぶ、大正元年八月歿す、年七十九。

長尾 眞海

は憲澄と稱す、大内郡白鳥村の人なり、幼より學を好み猪熊方主に國學和歌を、漢學詩文を猪熊全昌に學び、後佛門に入り同地千光寺の住職となり、佛教上に盡くす所ありしが不圖俳道に心を注ぎ、遂に任職の地位を捨て、明治九年花之本芹舎の門に入り研鑽の功を積み、南無庵第六世を繼ぎ俳道の興隆に力を委ね、其機關雜誌として俳海廻潮を發行し、斯道に盡くす所ありしか明治四十五年七月十五日神經衰弱にかゝり歿す、年五十三。

夕山や時雨つくして歸る雲

長尾 長太郎

宇多津の人、性質實勤勉、○舊高松藩に於て坂出の如く同地にも菰田を築造せんとするの内議ありしも、時恰も明治維新に際し其中止されしを以て議を唱へ、遂に菰田會社五區を成立せしめ、各其取締役となり公益に竭す所あり、因て官より表彰されたり、大正十二年四月廿八日歿す、年七十五。

長尾 繁二郎

氏は高松の人、本姓澁江氏、早くより教育界に身を委ね、明治三十三年高松市鶴屋町小學校訓導となり、明治三十八年香川縣屬となり恪勤の聞へあり、大正七年本縣物産陳列所主事となり、縣産業方面の興隆と發展に盡瘁する處多く、業績頗る見るべきものありしが大正十四年九月二十日病魔の襲ふ所となりて、五十八歳を一期となして逝けり、官生前の功勞を嘉みし死に先つて從七位に叙せり。

難波 二郎三郎

小豆郡大鐸村の人、霞舟と號す、本村肥土山太田秋滿の二男なり、十五歳にして岡山

眞殿家の養子となり、笈を負うて大阪に遊び藤澤南岳門下の逸才と稱せらる、後岡山に歸り難波氏を冒し岡山縣に出仕して敏腕の聞へあり。明治十年頃より實業界の改進黨を以て自ら任し二十二銀行支配人と爲り、山陽鐵道發起者となり又紡績に着眼し三十萬の資本を以て玉島紡績株式會社を組織せり。其の二十二銀行支店長となりて大阪に出つるや次て大阪商船會社取締役となり數年ならずして大阪實業界の重鎮として名聲頓に喧傳せられ、頭腦明晰辯舌卓越居常豪華風韻を悦ぶ。當時北の新地に於ては難波大盡と崇められて飛鳥も落すの威勢ありき、嘗て朝鮮に旅行し貴族乗用の御輿に打乗り威風堂々鷄林八道を巡回せしと云ふ。後年吳錦堂の顧問となり晩年に及ひて大理石商會を起し製作販賣を營めり。明治四十四年病て實家太田家に療養中同年十一月廿一日卒去す、年六十四本郡の出身の一奇傑と稱すへし。病末句あり。(小豆郡史)

辭世

念佛はけふ始なり終なり南無阿彌陀なむあみた

南洋

名俊順、字一音、號南洋、○初長尾寺後金藏寺に住す、詩は篁山に學び書畫を能くす
 明治十七年七月歿す、年六十三。

ナ 號 索引

- | | | |
|------------|---------|------------|
| 南里 (巖村) | 南坡 (漆原) | 南程 (高橋) |
| 南洋、南嶺 (松平) | 南巷 (藤田) | 南凱 (藤川) |
| 南圃 (中條) | 南浦 (椎名) | 直造 (片山、北原) |
| 南卿 (鬼無) | 南谷 (安原) | 南洲 (青葉) |
| 南塘 (上原) | 尙八 (堀) | 南岳 (藤澤) |

ラ 號 索引

賴 恕 (松平)	賴 儀 (松平)	賴 該 (松平)
賴 常 (松平)	賚 (田岡)	來 (大久保)
蘭 處 (蘆澤)	藍 渠 (梶原)	蘿 谷 (久保)
賴 山 (平澤)	賴 貞 (松平)	賴 昌 (松平)
賴 尙 (松平)	賴 覺 (松平)	懶 齋 (藤井)
賴 尙 (堀江)	賴 續 (松平)	蘭 溪 (小原)
蘭 齋 (藤川)	辣 庵 (巖村)	樂 叟 (梶原)
浪 仙 (金陵事)	老 顛 (手塚)	來 山 (但馬)
蘭 溪 (白木)	藍 水 (梶原)	蘭 阜 (松平)
賴 起 (松平)	賴 胤 (松平)	樂 樂 老人 (中村)

〇ム之部

六車 宗 礎 (或は宗湛)

は安富筑前守の老臣にして永祿元龜年頃に於ける東讃の勇將にして、寒川郡富田の城主なり、元龜元年安富盛定大内郡に行きしを以て雨瀧城を六車宗湛に守らしむ、而して此城は天正十一年元親に陥されたれば宗湛も同時に戦歿せしならん、宗湛の墓は與田川下川東に在りと云ふ。

六車 雨 嶽

名久徵、字謙藏、號雨嶽、宗湛の裔にて本寒川郡富田人、杏隱の父、高松藩醫、○築地槐山に學ぶ、文化十五年歿す、年八十七、墓は綾川撰文。

六車 杏 隱

名久敬、字士行、通稱謙篤、號杏隱、高松藩表醫師、○天保四年正月歿す、詩書畫を

能す、書譜に出づ、著書、羽床復讐、諸家傳記集、○其款或は陸士行ともあり、六陸長音なり、○子文明亦杏翁と稱す。

六車鹿沙

號鹿沙、讃岐人、○俳を能す、明治三十五年歿す。

向井履視

名由豫、通稱郡助、秉心堂履視と號す、高松藩士にして文化年頃京都藩邸留守居役を勤め、蒼虬に學んで俳句を能くす、日本名家句集の著あり、文政十年九月廿三日歿す、年七十五。

向井竹齋

名照、通稱龜次郎、號竹齋、山田郡庵治人、○畫山水花卉を能す、屢長崎に往來し、鐵翁逸雲等と交る、安政六年七月長崎に歿す。

向井舟皐

名根賢、字子才、通稱又八郎、香川郡淺野人、○畫初上杉墨水、宮内梧皐に學び、後明清妙蹟を倣ひ能くす、家古書畫に富み、優遊鑑賞す、梅村竹處春帆篁山と交る、明治二十五年五月歿す、年七十三。

向井權左衛門

小豆郡大鐸村大字肥土山の人、性沈毅夙に武道を好み、當時戸田眞流を以て有名なる赤穂の廣川權七及び太田源兵衛に師事し、棒術を研鑽すること多年遂に奥儀を極め、天保五年三月源兵衛より免許の卷を授けらる、外に柔劍道をも善くす、其の門に遊び修業せしもの數十名中山の谷久治郎吉土庄の樋口源八の如きは其の尤なるものなりと云ふ、本業の傍ら整骨の術を以て人を救ふ、四方より來り治を乞ふ者頗る多く、肥土山の整骨權左衛門と云へば遠近に其の名高かりき、慶應二年十一月廿七日歿す、年八十一。

(小豆郡史)

村上彦三郎

小豆郡草壁村大字上村の里正にして、今下村に移住せし村上武十郎の祖先なり、我が小豆島に古來猪鹿多くして農作物を害すること甚しきを憂ひ、農民等と相謀り、寛政

二年(百二十年前)田畑と山林との境界を設計し之が防禦工事に着手し、未だ周年ならすして延長三十餘里に及べる長石牆を建設す、爾後絶へて其の害なく島民永く其の恩澤に浴せり、寛政三亥年没す、後ち三十三年農民等相議して碑を上村木下庵境内に建て、其徳を表したり。
(小豆郡史)

村岡 救清 (初代)

村岡家の遠祖は平忠通に出づ、元同家は仲多度郡南鴨村に住せしが、救清の代に至り家運繁榮に向ひしを以て丸龜葭町に移り越後屋莊兵衛と改め、丸龜藩の銀札座の出納管理を命せられ、苗字帶刀を免され五人扶持を賜はり、此人が村岡家の資産を造り同家の初代となれり、延享三年五月二日歿す、年四十九。

村岡 景福 (二代)

字以德、通稱宗四郎、性温和にして和歌を好み最も國史に通じ、神儒佛三道を厚く信じて猶鼎の三足の如しと唱へ居れり、四十九才の時に家を長子景輿に譲り、四方を漫遊し風月を樂んで暮し居たり、享和二年七月十五日歿す、年七十六、此人の代になつて寶曆十年六月に魚屋町に移轉せり。

村岡 井洲 (三代)

名は景輿、字は伯衡、井洲、又吳竹と號す、通稱は彌平太、尾池桐陽の兄なり、家世々丸龜藩紙幣の管理を爲す、文學あり、義侠心に富み人の急を救ふ事を樂しみにせり又交際を好み屢々京畿の間に遊び名士と交れり、文化四年十二月七日歿す、年六十。

贈 如意道人

村岡 井洲

如意道人 事 遠遊

手持 如意 度 春秋

已知 如意 遍 寰宇

種 玉 煉 丹 如意 不

村岡 竹所 (四代)

名は景緝、字は君熙、通稱藤兵衛竹所と號す、井洲の季子なり、文學を好み詩書を能くす、母に事へて至孝なり、又人の難儀を見ては必ず救ふと云ふ、極めて慈善心に富めり、先代の時は家政や、放漫の兆ありしを以て竹所の代に至つて克く整理して繁榮を極めたり、傍ら醬油醸造業を爲す、嘉永四年九月廿一日歿す、年六十三、詩遺稿若干あり。

此人に三人の妹ありて一人は尼になつて綾歌郡池の下に庵を結び居たり、今一人は丸

龜藩士原田某に嫁せり、一番末の妹を種子と云ひ此女に杉屋甚右衛門の弟長右衛門を養子として分家したり。

竹所には男子二人と女子二人(一人夭)ありしが長男は夭し、次男が即ち宗四郎なり、又長女は伊曾と云ひ香川郡由佐村の加藤氏に嫁せしが結婚後六ヶ月にして夫を喪ひ、妊娠の儘歸つて来て一女子が生れた、其れを久子と命名し、宗四郎の歿後其相續人となり、其れに綾歌郡川津村の山口友太の三男三郎を婿養子にし、其生れたのが現今の當主村岡藤四郎なり。

村岡 箏子

竹所の妻にして貞靖と號す、もと圓座村小橋道寧の長女(香水の妹)なり、文化十二年二月十七日生、天保二年十一月九日竹所に嫁す、家庭に學んで和漢の學に通じ書道及和歌を能くす、箏子は中々の女丈夫で膽力があつた、今其一例を示さんに或時覆面の強盜二三人拔劍で其家に押入つた事があつた、其時ふと目を覺すと強盜は火繩を打ち振りながら足音荒く歩みよつたので、箏子の曰くには家の中で火を振つては危険ですから、其處に行燈があるから火をお付けなさいと言葉やさしく言ひますと、強盜はホオ／＼の体で元來し道を逃け去つたと云ふ程沈着な夫人であつた。

竹所の死んだ時箏子は三十七であつた、宗四郎は其時僅かに六才であつたので、其十四五年の間は家政上萬般の事は箏子が一身で擔當して、諸國から來る勤王家やら又兄保藏の勤王運動には身心を勞したものである、かくて箏子が五十四の時になつた獨りの杖とも柱とも頼む宗四郎に死なれたのでがっかり力を落し、翌々年の明治三年七月二十二日に五十六才を一期として逝いた。

千代ふへき君かよはひに數添て

いく世重ねむ鶴の毛ころも

村岡宗四郎

幼名甚吉、後宗四郎と改む、諱は景眞と云ひ竹所の長子なり、弘化三年十一月一日丸龜魚屋町の邸に生る、性温雅にして氣概あり、早くより家庭に於て讀書習字を學び略ぼ其道を能くするに至り、十歳頃より圓座村なる伯父保藏の許に至り、皇典及漢學を學び殊に武藝は居合を學び其道に達するに至り、十七歳頃より丸龜の自宅に歸り勤王運動に従事し居たりしが文久三年中山忠光が兵を大和に擧げ、攘夷の先鋒を爲さんとするの報あり、小橋日柳等の本縣勤王家は機至れりと爲し、其舉に應せんとし兵器彈藥を用意して既に長谷川野城等の先發隊迄出したが其舉が、失敗に歸したので萬事休

すで同志者は失望してゐたが、翌慶應二年の十一月十日此事が嫌疑の因となつて藩獄に幽囚の身となつて、獄中で随分残酷な訊問を受けたが別に罰せらるべき罪證もなかつたと見へ翌三年の正月十八日釋放され、歸宅したが間もなく疾に罹り同月廿八日僅か廿二才を一期として逝かれた。大正八年十一月從五位を贈らる。

村山仲忍

栗山詩に、哭村山仲忍、家翁澤叟已成仙、此夕聞君又上天云云、此家は太塚孝綽、澤叟は黒澤萬新、君は村山をいふ、此人名有成、字仲忍、號勗齋、意ふに村山居稽の家にて、讚人なるべし、享保頃の人。

村山居稽

名陸、字子業、號居稽、高松藩儒、○天保八年十八史略便蒙を著す。

村山研堂

名淑、通稱小馬藏、號研堂、高松藩儒、明治三年皇漢學教官となり、後三木郡に教授す、詩書を能す、時に蘭竹を畫く、明治三十年頃、○詠梅、品評何特屬詩家。館裏當

年功可誇。陣陳東風吹有力。滿營香動一枝花。

村松泰初

名初正壹、後泰初、通稱九郎右衛門、丸龜の藩士、○徂徠學を慕ひ、詩文は李王を學ぶ、又筆道に通じ、正明館の額を書く、文化元年正月十日歿す、年七十四。

村尾石溪

名景邕、字文熙、通稱作兵衛、號石溪、高松人、西原竹屋の弟、村尾氏を嗣ぐ、○竹石に學び山水蘭竹を畫く、弘化二年十二月歿す、年六十三、○畫譜に出づ。

村尾呂谷

名景親、字子保、通稱久八郎、號呂谷、山田郡西植田村人、○系神櫛王より出づ、寛永以降世職里正約二百三十餘年、○文久三年八月歿す、年七十七、墓銘山田梅村撰す餘暇歌俳及狂句を詠す、○尋梅、春風の朝な朝なに知らせきて待つ人さそふ野邊の梅が香、漏元の何がしを夜訪ふに、門に梅の盛に咲ければ、夜道まで一際明し梅の宿、山田おすみといふ女の衰へたるを見て、花もすみはも落ち顔は梅干の粹があるかと問

ふ人もなし。

村尾 篁山

名景敦、字十厚、通稱初三郎、中左武郎、後端次、維新後通稱を廢し、専ら景敦とす。呂谷の子、○初岸田月窓に就き字を習ひ書を讀む、月窓の書六體皆能す、篁山も幼より諸體共に書けり、月窓篁山に詩を贈り稱して神童とす、月窓歿す、篁山年十二、其後書は董其昌を習ひ、中年以後は又古法帳に依り變化す、經學と詩とは山田梅村に學ぶ、壯歲鎮西に遊び諸家と應酬せり、常に教を乞ひ書を乞ふ者多し、詩會毎月家に設け細香吟社といふ、又韻鏡に通ず、○平生字を書くに最も字體を考へ、下筆苟もせず。干祿字書を修正せり、隸書十餘冊を作り隸題帳秘といふ、○著書、即青山樓詩集、木公書屋詩話、同隨筆、梅花百絶等あり、明治二十二年三月歿す、年六十七、墓銘三島中洲撰す、○餘技篆刻又蘭竹を畫く、○一號竹香、居處號、木公詩屋(詩は書とも)避想室、近古齋、即青山樓等あり。

村尾 里仁

名景美、通稱九八郎、號里仁又半農、山田郡西植田村人、○書は岡友徳、神崎賢浦に

學び、漢學は中山城山に學ぶ、詩歌俳に通ず、寺小屋を開き村内の兒童を教育せり、明治十一年歿す、年七十八。

村尾 景經

通稱喜一郎、里仁の子にして名は景經、龜逸と號す、舍號を石穗舎と云ひ、木田郡西植田村の人、經書は藤澤南岳に、漢學は植田篁山に、國學は友安三冬及中村尙輔に學んで國學及び和歌を能くす、藤尾八幡宮の祠官たり、大正十四年十月十一日歿す、年八十三、○著書芝生迺春あり

みつから八十になれるを祝ひて

峰までは、いつかはのほらむ、千歳やま

やそちの坂はことしこえけり

村山 宗知

名宗知、高松人田町に住す、天保頃なり、○歌を能す、其居みやまの屋といふ、橋母理躬和文にて記あり。

村垣茂淑

名は茂淑、通稱隼之助高松の人、歌を能くす、明治年中に歿す。

村垣雲村

名愿、通稱愿藏、號雲村、高松藩士、○詩及畫を能す、後寒川郡石田に移り、郷人に教授す、明治四年十二月歿す、○遊寶藏院、松柏森々古梵宮。傳聞蜩螗隱茲中。高僧當日安禪後。香火爛然人不空。

村山漁村

名薰、號漁村、丸龜人、○畫を畑尾茶庵に學ぶ、明治三十三年三月歿す、年七十一。

村田雲和

通稱多門、字雲和、號醒石、本姓秦後高橋、阿州古川人、丸龜に來住す、畫を能す、明治十三年十二月歿す、年八十。

村田筆岳

通稱儀八郎、號筆岳、雲和の嗣子、丸龜人、(濱町に住す)○畫を藤田南溪に學ぶ、明治二十年九月没す、年六十。

村井竹雨(竹塙)

攝と稱し、字は子儀、板井の人、詩書を能くす、燕石の友人、明治の初年頃歿す。

蝶

丸龜の俳人、戸祭氏彦の父なり、嘉永頃の人。

麥廼家半畝

本名小畑慶三郎、雲州の人、坂出專賣局吏員、鶯居に學んで俳句を能くす、大正十三年八月十一日歿す、年五十八。

△號索引

無逸(三野) 無爲翁(實山事) 無根叟(平賀) 夢弼(岡田)

〇ウ之部

植田若狹允信則

木田郡戸田山の城主、元暦年間の人。

植田美濃守

本名安信と云ふ、木田郡朝倉村東川城の城主なり、○時代は天正前、○兩植田、菅澤朝倉にて領地高千石なり。

(参照) 戸田山城(一名城山)西植田にあり、土人岡の城と云ふ、元暦年間植田若狹允信則なるものあり、屋島戦役の際源義經に屬して功あり、降つて元龜天正の頃に至り植田美濃守安信之れに居れり、采を植田、菅澤、朝倉の四邑に食む、長谷川權正なる者其麾下に屬す。

安信の子三郎景保、景保の子左衛門景興、景興の子兵衛景通と相嗣いで爰に居れり後十河存保此の城を預り三好隼人介をして守らしむ。

(讃)

植田景保

貞和年間植田三郎景保と云ふあり、植田、菅澤、朝倉等の諸邑を領して戸田山の城に居れり、三子あり、次郎景辰、八郎景之、十郎吉保と云ふ。

(西)

植松備後

は本名を資正と稱し香西宮の下に住し、四國數度の戦に功あり、香西大隈と共に、香西伊賀守佳清の執權たり、香西備前其の權を嫉み、密かに之を害して、己れ代らんと欲す、天正六年正月十一日香西氏成就院に於て日待の祈禱をなし、黄昏に及ぶ、備後は大隅の既に入れるを聞き遽かに成就院に來る門内に賊ありて備後を伐つ、備後僕二人と共に奮闘して八人を斃し、七人を傷け己れ又害せらる、時に備後年七十有二、賊は則ち香西備前の遣せし者なり、三好存保阿波にありて之を聞き大いにその老勇に感ず。

(全讃史)

資正に往正、資久、教冢、某(是竹万五郎)、往由の五子あり。

植松緑之助 (初代)

本名を長政と云ひ香西元成部下の兵將にして香川郡檀紙に居れり、天文頃の人なり、南海通記に元繼次男檀紙次郎植松緑之助とあり此人の事ならん。

植松 緑之助 (二代)

は茂安の三子にして檀紙の城主なりしが、天正十年八月五日香西伊勢馬場合戦に軍使として土軍に使し、同日香西軍敗戦に付退却中敵と接戦し、比類なき働をなし主従八人戦死したり。

植松 資茂

資茂は四郎又與四郎と稱し香西元顯の四男なり、有名なる弓術家にして諸所の戦場に於て軍功を顯はせり、明應年中將軍義植の召に應じ面前にて矢一番射られしが過たず遠的を射通し、將軍甚だ興じ玉へり云々、南海治亂記に見へたり、資茂に資方、茂安資正の三子あり、年代は天文頃の人ならん。

植松 大隅守

本名を資教と云ひ四郎資茂の孫にして香西氏に仕へ、元載佳清二代の執權として權力

を振ひ居りしが、天正六年正月十一日千虎丸擁立の事に關し、香西備前の爲に謀殺されたり。

大隅に子千太郎左衛門あり、其時勝賀本城の代主なりしが、下僕の注告により危害を免れたり。

植松 右近

本名安房又本津安村とも云ふ、植松茂安の長子にして好清の執事たりしが、天正六年正月十一日日待執行の時、香西備前の逆謀に因て害せらる。

右近が子六郎太郎成就院にて父打れたりと聞てかけ附けるか、中途にて林、山崎、能須、谷川、飯沼の五人に行遇ひ散々に伐結び上下十四五人と戦て多兵に手を負せて討れぬ。

植松 久助

香西氏の一族にして本名は資久、三郎、帶刀と號す、資正の子にして香西加藤兵衛が弟なり、性勇猛にして永祿十一年元成が兒島を攻むる時、其軍に従ひ出陣し敵將を撃ち、其他阿讃の戦に戦功を立てり、父資正が備前父子に害されし時は三好存保に使用

て阿州に在りしが、此報を聞くや直ちに松繩手の宅に歸り兵を聚めて香西城に入り、氏族と謀て備前の居城を攻む、備前父子降参して虎丸を出し居城を去つて備前に行く其他阿州河島合戦、讃州伊勢馬場合戦の際大功を顯はせり、資久に左の四子あり。孫七郎、左衛門(資安)時久(彌五郎)茂久(惣左衛門)

帶刀の戦功

元龜三年七月十六日阿州河島合戦の時、帶刀其時十六歳にして讃岐軍中にありしが、篠原紫雲が子大和守十河の陣に入り來り、存保と引組み捕て押ゆる處を帶刀がつと進んで大和守を捕へ引返し押へて、存保に首を取らする、存保より即時の書を賜ふ、其書に血の指形ありと云ふ、帶刀は天正十二年頃病死せり。

植松左衛門

帶刀備後の子なり、本名資安と云ふ、十六歳より十河の陣を勤め、大鐵砲の功をなし元親より褒美の書を賜ふ、天正十年引田合戦に高名し又天正十三年五月廿日香西の同勢を西長尾へ引上るに當り、瀧宮川を馬にて渡し立歸て徒涉し綱を用意して川に張り切り此を取せて、伊賀守が供廻を渡し一人も怪我なく西長尾城に到着せしむ、是れ左

衛門の計畫宜しきを得たる爲めなり。

左衛門の戦績

天正十一年春土佐元親引田攻の時、香西氏が兵は十河城の押として平木の城にあり、植松左衛門十七歳にして質として香西の手にあり、始陣に頭一つ取て心はせを顯はす元親若輩を進めしめんが爲に感狀を賜ふ。

天正十三年五月廿日香西の同勢を西長尾の城に引上ぐる時、折節五月雨ふり出て瀧宮川水かさ増し渡り絶へたれば、左衛門十九歳なれども其日瀧宮川を馬にて渡り綱を用意して川に張り切り之を取らせて伊賀守が供廻りを渡し、一人も怪我なく西長尾の城に到着せしめしと云ふ。

植松太郎左衛門

は本名を資淳と云ひ香西大隅守の二男にして好清の執權たり、天正十一年八月五日土佐軍進入の時、西光寺繩手にて戦死す。

植松彦太夫

は本名を往由と云ひ帶刀の弟にて植松城主となり、好清の末路迄何くれとなく世話せし人なり、其戦績を擧ぐれば、
天正十年八月五日香西伊勢馬場合戦に参加し、勇猛の働きを爲し股に敵弾を受けし、も我軍を無事に引揚げしめたり。天正十三年五月中旬佳清が香西を引揚げ、西長尾へ移る時の謀議に與り佳清の一族をして無事に避難せしめたり。

海崎元村及元高

橘公忠の裔にして元村は三野郡宮の水崎の城主なりしが、元村の子元高大隅守と稱し應安元年正月鶴足郡西長尾の城に移り氏を長尾と改めたり。(長尾大隅守の條を見よ)

植松勝兵衛

は時久の子なり、天正十五年八月生駒正規に祿二百石を以て召抱へらる。

植松茂兵衛

は時久の子なり、天正十五年八月生駒正規に祿百五十石を以て召抱へらる、但大阪御普請仕損しのため百石召上げらる。

漆原勘右衛門勝重

香川郡川東村箭造城の城主にして細川勝元に仕へ屢々戦功あり、故に勝の一字を賜ひ名を冠らしむと云、年代は應仁年頃の人

上原子則

字子則、端岡人、○武技經史に通ず、岡内橘井等と詩酒相交る、○堂號有隣堂、其記文は沖堂の作。

上原南塘

通稱小隼太、後改稱三左衛門、號南塘、南里の姪、丸龜藩士、○初南里に學び後江戸にて精里に學ぶ、歸て藩學正明館教師となる、明治二十一年四月歿す。年七十。

上原宗九郎

上原家は世々小野派一刀流を以て高松藩の指南役たり、氏は本香西植松家の出にて上原氏を嗣ぎしなり、廢藩後は高松市四番丁に道場を開き數多の門弟を薰陶し、傍ら縣

立高中、商業、工藝校等の武道教師となり、數千の生徒を教育したり、大正十二年六月七日歿す、年七十八。

上 枝 遜 齋

名矩親、字土方、通稱以三太、號遜齋、高松藩儒、○詩文を能す、天保十年八月講道館出仕、明治五六年頃歿す、○春塘遺稿に、送上枝子方行成于兵庫とあり、士方子方何れも用ひしならん。

上 枝 春 坡

は祐之と稱す、山田郡春日の人、性温雅にして馬術、繪畫、茶技、圍棋、和歌等皆な能くす、明治初年頃の人。

上 田 樹 徳

諱は可親、嘉永二年多度津町に生る、世々同藩士たり、夙に同町の森政造に就き讀書習字を學び其高弟となり、書道は安藤大心に學び特に大師流の書に妙なり、又木谷壽平にも詩文を學ぶ、大正十三年歿す、年七十六。

上 田 長 谷

名伸、字松孫、號長谷、文化頃東讃人、○畫譜に出づ。

上 田 浚 明

名浚明、通稱造酒、高松藩士、○穆公の時講道館にて、青葉士弘岡平藏と經史を講せし人なり。

上 野 松 村

文化九年竹石追悼展覧觀録にあり、即揚分潮の事なり。

上 野 泊 兮

名巽幼名猪六郎、號泊兮、高松藩士、○詩及書を能す、明治二年三月致仕、後歿す、年六十餘。

ト 部 千 枝

白鳥猪熊夏樹の前名(猪熊夏樹を見よ)明治元年九月京都崇徳廟の祠官となる。

宇都宮美成

名美成、通稱當一、高松藩士肥田大隅の與力、○歌を能す、維新頃歿す、○蓮、花蓮清きを見れば涼しさに池の浮葉のうき世ともなし。

植松文昌

名文昌、號鷺溪、香西植松家の一族にして同地に居りしが後高松に住す、○山水人物花鳥著色畫を能す、明治初年歿す、年八十餘、立齋の養子親なり。

植田有年

備中の人、燕石の友人にして勤王家なり、本名尙義と云ふ、後井上文郁と改稱す、左の歌は明治元年京都に於て明治天皇の御東行を拜して其感想を詠せしものなり。(井上文郁を見よ)

去年不能過夷人之參朝
今年不能奉留東行之駕

何のため、都にあると人とは、

なにとこたへん、ことのはもなし

有年

植田倬

通稱竹次郎、諱は有年、南畝と號す、佛生町に生る、幼より學に志し、夙に片山冲堂の門に入り勉學怠たらず、遂に其女婿となり學統を繼げり、後高松中學校の創設さるゝや入つて其教諭となり、漢文科を擔任し數百名の生徒を教養したり、後辭職して大正六年十一月備前閑谷齋の教授となり赴任せしが、大正七年二月廿八日同地にて腦溢血に罹り俄然逝けり、年六十二。氏は文章家にして漢詩は餘り作らざりしが、曾て記者の一友人の家にて其作詩を一見せり、是れによれば詩には凝秀山房の號を用ひしと見ゆ、著書又生集等あり。

氏家整作

整作は父を善五郎と稱す、本姓片山氏、嘉永三年仲多度郡善通寺に生る、氏家氏に入りて女を娶りて妻となし姓をおかす。幼にして學を好み、秋山惟恭に従學して得ると

ころ頗る多し、郷にあるや小學校に教員となり、傍ら家塾を開き育英の功顯著なり、故を以て其の退隱するや官其功に従ひ邸を興へ表彰す、明治三十八年病歿す、享年五十七、私に諡して「積善院釋達識居士」と云ふと。

漆原本敬

諱は本敬。元八郎と稱し、南陽と號す、三谷邑の産なり、恢廓大志あり、當時その邑嶋を負ひて、土田瘠确流氓の者多し、氏は之を招集し屋廬農器を給し、自ら卒先して開墾功を積むこと二十歳、意未だ屑とせざりしも明治七年九月十一日歿す、享年六十有九、其嗣子を本道と云ふ、釋諡に曰く「開華院道顯居士」と。

浮田夏月女

觀音寺町浮田善左衛門の妻にして和歌を能くす、同女は高松鈴木青玉の姉と聞くから鈴木家より嫁したるものならん、年は九十頃迄長命せしものと見へ、左の歌は八十七才の作に係る、年代は嘉永安政頃ならんか。

千尋あるをかけをならへて萬代も
はかえぬ竹や君か友なる

浮田正家

名正家、通稱道之助、香川郡圓座人、○和歌を能くす、寛政元年西行六百年追善集に、歌四十八首入れり。

海野溪雲

清太郎と稱す、綾歌郡坂出町の人、海野六治郎の男にして書を大西雪溪に學びし人

漆原漆園

名寧景、字千齡、通稱彌義右衛門、號漆園、山田郡三谷人、○書を竹石に學び山水に長ず又詩を好む、家富み書畫器玩を收藏す、文政七年五月歿す、年五十四、○著書、漆園詩集、三溪湖水詩。

漆原中洲

名元正、字伯修、通稱彌義右衛門、號中洲、漆園の子、舍號清樾村舍、○時の名流と交り廣く風雅を好めり、畫山水及詩を能くす、安政五年十二月歿す、年六十六、○清樾

村舎四字額は、海屋來遊の時書けり。

漆原 楯 溪

名勝眞、通稱才八郎、號楯溪又北岳、香川郡川東人、○書山水風韻あり、花卉著色最も妙なり、明治十三年七月歿す、年六十四。

漆原 元 宣

名元宣、通稱平三郎、齋號五竹齋、山田郡三谷人、漆原完平の子、○歌及和文を能す性廉直なり、明治四十二年六月歿す、年四十五、○著書、五竹齋三代集加佐禰詞、捕鷺編、名所十五番目歌合、古今名所等數種あり、梅のしづくといふ歌集は、明治三十年英照皇太后奉弔の爲に、元宣と景福と共に集めしなり、○稀逢戀、あはざりし昔にまして侘しきは稀なる中の契なりけり。

鵜川 芳 太郎

は香川郡檀紙村大字御殿の出身者にして、壯時より身を教育會に委ね太田、檀紙等の校長に就任したりしが、本縣に盲啞教育機關の設備なきを遺憾とし、明治四十年來岡

内、山川等の先輩と諮り同四十一年議熟し、同年四月一日より香川縣盲啞學校の設立を見るに至り、氏は同時に教員兼校長事務取扱に就任し、大正三年四月專任校長となり孜孜として努め居りしが、大正五年十二月廿八日俄然腦溢血に罹り同三十日歿す、年五十七、同校にては氏生前の功績に酬ゆる爲め翌日校葬に付せり。

雲 庵

號雲庵、津田常樂寺僧、○書を能す。

雲 峰

名重卿號雲峯、○元文年中著明詩礎卷首に、讃陽雲峯田重卿五嶺原良延同輯とあり、雲峰は恐らく田中姓にて西讃人ならん、又原良延は勝田五岳のことなり、雲峰は他に安藝雲峰あり、(同人の所を見よ)

雨 窓 (來寓人)

雅名を可月行庵と云ひ九州邊の眞宗僧にして、詩書畫を能くす、讃岐へ布教に來り永らく留錫し讃岐に知人多し、燕石なども昵懇なりしと見へ、燕石全集中に蝨の詩を

賦し雨窓上人に呈すと書せしものあり、参照すべし、時代は弘化頃より安政頃迄留まりしもの、如し、又向井舟阜の所や志度邊にも居たりしと見へ左の詩あり。

春夜 卽事
晴後輕寒月色新。寺門花發海西濱。誰賒瓢酒憐清夜。玉浦九千餘戶春。

雨 龍

安永頃香川郡川部の俳人、麥浪の門人、明和頃の人。散て行桂の花や十八夜

鳥 谷

一夜庵と號す、讃岐人、嘉永年中西島鳥谷と同名別人なり、蓋し觀音寺邊の人か。

雨 水

道廻邊雨水と號す、本名脇平五郎、坂出鎌田の番頭を勤む、東京其角堂永機に學んで俳句を能くす、大正七年三月廿五日歿す、年七十三。

ウ 號 索引

雲 峰 (安 藝)	雨 岳 (蕙崖事)	迂 齋 (後 藤)
雲 屋 (佐々木)	雲 處 (妹 尾)	雲 崖 (竹 内)
雲 堤 (中 條)	雨 香 (壺 井)	雲 和 (村 田)
雲 窩 (渡 邊)	牛 養 (岡 田)	芸 之 (良 野)
雲 庵、打磨(赤澤)	雲 門 (三 木)	雲 齋 (谷 本)
芸 齋 (谷 本)	雲 山 (今 村)	雲 濤 (今 村)
鳥 谷 (西 島)		

○牛之部

井上重實

井上重實は室町幕府の臣なりしも、流浪して香川郡下笠居村大字龜水に來り此地を領す、射に巧にして百發百中虚しからず、村祠加茂神社に射禮を行ふ事を創む、後筑前に移住するに當り其領林三百町歩を村に寄附す、村民爲めに恩惠を受け流浪するものなし、明治三十三年十月井上遺德碑を村社内に建て永くその德風を欽す、年代は應永頃ならん。

井原庄司

藤原盛兼を見よ。

井上元固

初市次郎後儀左衛門と稱す、元和九年攝州茨城に於て生る、吉岡貞隆の六男なり、京

極尚和、高豊の二君に仕へ目付及町奉行となり居りしが後致仕し、京都に至り松永永三、米川操軒、三宅正堅等に就きて學び經史及び諸子百家の書に通じ、兼て詩文を能くす、三男二女を生む、其男二人は早死す、季男は益本にして家を嗣ぐ、長女は井上通女なり、次女名は圓子堤氏に嫁す。

辭世詩

行年七十又過二。得古來稀甚悅情。子路結纓曾子贊。今吾慕此一心卒。

左の十二景詩は本固が撰んで、通女が此れに和歌を附け加しものにて、今迄世間に知れ渉らざるものなれば、爰に附記して江湖に示す。

讃州丸龜十二景詩歌並序

井上本固

蘇氏所謂昔司馬子長登會稽探禹穴李太白以七澤之觀至荊州皆傷不見古人而欲一觀其遺跡也千里之遠其勤尙如此矧是讃州丸龜之勝絕靈地舉足可至者越予亦學古而歩々既至區々至而無吟心不十分且又爲備遺忘摘景十二而欲綴拙作然欲正不能而先年乞雌黃於弘文院林先生(今號林大學頭)先生涉直筆而有十五字之添削爾後愚娘名通哦卑歌而合其詩是以左記焉

丸龜城樓

屋瓦巍然不可侵。城樓高聳影森々。朝暉令色夕陰美。鷗尾無心鳥入林。万代の影ものどけし動なき丸龜山にてらす朝日は

海邊夕照

海上堪望里程。潮頭晚霽夕陽傾。片帆逐日向何處。想像舟入無限情。うな原やゆう日しつけき波の上心さはかてうかぶ舟人

鹽屋暮煙

暮煙一道與松連。煮海爲鹽知此邊。厭雨喜晴常事業。幾多辛苦彼應憐。浦風になびくしはやの夕烟す衛しら浪にたちもわかれず

屏風浦邊

相並五山奇絶姿。名屏風浦已因茲。大師事蹟于今敬。昔日神奇自可知。うらの名にへたてなはてそさらぬたにはるけき物をいにしへのなど

五岳晚鐘(山號五岳寺號普通)

五岳山前林已深。華鯨遠響出雲岑。因誰今借魯陽手。遊賞未央斜日沈。行くてなをさと遠み山寺の入相の鐘ぞ雲に聞ゆる

彌谷暮雪(山號彌五寺號彌谷)

雪深彌谷寺門前。路滑添寒薄暮天。古木森々皆變白。歸程一樣得花先。白たへに降つむ雪はいやだにのむれ木にさく花にやあららん

有明秋月

佳名應月有明演。恰似洞庭置我身。晴夜風西逐殘暑。挽來推去使涼新。もろこしも心にちかくうかぶなり月の光の有明のはま

琴鼓晴嵐

朝來山見白雪披。宿酒頓醒曲々奇。琴鼓因縁不須聽。松風聲裏報人知。琴ひきの神のしらへを今もなを松のあらしのひびきにぞ聞

假屋落雁

一行落雁似寶鳴。假屋川邊如主迎。汝爲重來成卵否。沙頭足迹尙縱橫。こし路をやなをしたふらんくさ枕かりやの里におるかりかね

伊吹歸帆

伊吹知是海中山。一二歸帆遠影閑。風景兩端常若畫。雨奇晴好共良顔。あづさ弓いぶきの山の風はや見やは引かへるあまの釣つ舟

箕浦夜雨

箕浦寂寥人已稀。海風逐暮雨穿扉。夜行只恨笠檐滴。唯約明朝見日輝。

旅人も名にはかくれぬ見の浦の雨にやよるもぬれて行らん

巨 龜 眺 望 (山號巨龜寺號雲邊)

雲邊高上巨龜山。目下、四州唯小山。朝日夕陽看日出沒。檐前近指海中山
あし引の山のいはねのふる寺はたちゐる雲を軒端にそみる

井上通女

名初めは振、次は玉、後は感通と稱し、丸龜藩士井上本固(儀左衛門)の長女なり、萬治三年六月十一日を以て生る、幼より學を好み博く和漢の書を読み、詩歌文章を善くし兼て書法に達す、處女たりし時深閑に居て女徳を修め處女の賦を作り自ら戒む。其詞を讀めば自ら其志操を見るに足れり、天和元年藩主の母堂養性院に仕へ江戸邸にあり九年能く忠勤を盡す、其宏才達識當時江戸碩學の間に賞せられ、詩歌贈答殆んど虚日なし、養性院卒するに及び仕を辭し國に歸りて、同藩士三田宗壽に嫁し能く舅姑に事へ婦道を守り内助を爲す、夫歿して後閑窓の下風月に吟哦し、優悠餘生を送り居りしが元文三年六月二十三日七十九歳の高齡を以て逝けり、○著書左の如く多し。
家訓一卷、東海紀行一卷、江戸日記三卷、歸家日記三卷、括囊集五卷(季男義勝をして編ましむ)往事集五卷、續往事集二卷、秋燈集三卷、和事記一卷、源語秘訣聞

書一卷、宗川子歌談一卷、三島傳考一卷、三草三木考一卷、古今序考、處女賦、深閑記等、○辭世詩歌、我もまた正しきを得て斃れなば是のみなりと思ふばかりぞ、一氣終時萬事休。樂天委命又何憂。子孫有孝能思我。勤向聖賢書裏求。
丸龜に表彰會を起し井上通女全集及通女小傳等を出版したり。

井上益本

市兵衛と稱す、本固の季男にして通女の弟なり、京極高豊、高或モチに歷仕す、文學あり一度江戸の藩邸に出仕せしも、會々姉通女の歸郷に際し君命を奉じて之を丸龜に送る時に年二十五なり、元祿七年父君の喪に服し、元祿十年十一月十一月凶禍に罹りて落命せり、時に年僅かに三十三。

井上圓子

名圓子、本固の女にて通女の妹なり、○漢籍は父に、歌は姉通に受け、又彈琴を能す天和二年同藩士堤八郎兵衛に嫁す、寶永四年五月歿す、年四十六。○辭世、暮毎に本の雫と消ゆれどもあけては宿る露の世の中。

井後 龍

名龍、字立明、又字文淵、明和頃丸龜人、○齋門姓名録にあり、漢學者なり。

井上文八郎

小豆郡淵崎村の人、幼名權三郎、同族西屋長八の長男にして二世文八郎の甥なり、養はれて三世井上家を繼ぐ、資性慈仁若ふして、素麵販賣業を營み將來致富の根柢を造り、爾後一層奮勵の結果漸次産を積むに至れり、財政上時々御用金の命あるや毎に旨を奉して進んで獻金せしかば、其の功に依り國印即ち劍大の使用及苗字を許さる常に文學の素養なきを遺憾とし、男を浪華に遣はし藤澤東咳に従ひて修業せしめ、又其の餘暇を割きて書を竹坡に學ばしむ、文久三年八月歿す、年七十一。(小豆郡史)

井上 秋起

小豆郡淵崎村の人、幼名權七郎、第四世井上文八郎を繼ぎ秋起と號す、性磊落少時笈を負ふて浪華に遊び藤澤東咳の門に入りて學を修め、傍ら竹坡畫伯に従ふて繪畫を學ぶ、秀才にして學業畫道兩つながら大に進む、後ち家に歸り悠悠々々文雅を愛せり、文政

六年八月一日に生れ、明治八年十二月三日歿せり。享年五十三。(小豆郡史)

井上文郁 (兼寓人)

文郁、通稱を宗平と云ふ、始め姓を植田と稱し、有年と號せしが後文郁と改む、安政六年備中國に生る、幼より學を好み、成年の頃京阪地方に至り、螢雪の功を積み學成る、後偶々弘化年頃琴平に遊び甚だ此の地の風光を愛し、居を金山寺町に卜し、小河氏の女を娶り醫を業とせしが、故ありて井上氏を冒す、嘉永六年米艦の浦賀に来るや天下騒然たり文郁之の形勢を見て慷慨禁する能はず、琴平の勤王家、日柳燕石、美馬君田等と相謀り畫策するところ多かりしも、遂に藩吏の知るところとなり、逮捕に遭んとせしかば、元治元年十一月四日左の和歌を妻子に遺してその家を脱せり。

箒木の、小蔭をたのみ、今日よりは、露しも防げ、撫子のはな。
而して和田濱に至り高村小隱に依り長州に通れ、東奔西走招賢閣に入り國事に盡すところあり、三年の星霜を送り明治維新となり、軍務官に出仕し、北越征伐に従事し後治元年燕石の越後に於て疾むや常に其枕頭に侍し看護に努め爲に瞑するを得たりと。
文郁の國事に盡くせし一事

森寛齋の傳記中に左の記事あり。

晋作の下津井にあるや毛利侯將軍の命により、其の臣山縣備後を遣はし大阪に至らしめんとするを聞き、其の危きを知り上田宗平をして之を廣島に要止せんとし、遂に其事止みたり。云々

井上正秋

文郁の長男にして嘉永五年頃琴平に生る、明治二年東京に行き某稅務署で勤務、後退いて一條家の家扶となり居りしも、大正十五年に退職し、昭和二年三月三日六十二年目に琴平へ歸省した、其時七十七歳なりしと。

井上清孝

字士莊、號綾水、阿野北、氏部の人、藤川三溪の門人、年十三にして詩を能くす、安政頃の人。

井上孝徳

字公忠、號春浦、阿野北、坂出の人、藤川三溪の門人にして詩を能くす、安政頃の人。

井上壽山

仲多度郡某村の農にして奇士なり、維新前尊王斥幕を主張す、平素俳句を好み咏する處數百首あり、其嗣靜村翁の遺詠を編して冊子となし、之を手向集と云ふ、明治十四年八月歿す、年六十餘才。

井上甚太郎

高松市の人、三白と號す、初め兵庫町に在りし島田組の店員なりしが、同組閉店の後身を政界に投じ、板垣氏の自由民權説に共鳴し木場、栗原諸氏と鹽屋町に立志社を建て、盛んに自由民權の説を鼓吹せり、氏又一面三白と號し、讃岐の特産たる米、砂糖、鹽の改良に留意し、就中砂糖、鹽の二品に向つて種々計劃せしことあり、明治十九年頃その筋の忌諱に觸れ入獄せしことあり。明治三十五年衆議院議員に選舉され、議政壇上に於て産業立國策を鼓吹せり、明治三十九年八月廿二日没す、年六十一。碑文は友人栗原亮一の撰する處銘曰、鹽糖棉花、自號三白、欲培國基、其心維赤、勸農説工北馬南舶、遺策備存、民受其澤。

井上甚太郎遺文

乗り上げし日本丸を如何にせむ、綱と頼みし憲政は紊れて麻の如くなり。各省割據の有様は其長官の權勢に輕重ありて秩序なし、巨艦大砲備はれど、國の本なる農政は無能の官司に荒されて、實に見る影もなかりけり。誰れか秕政を除くべき、朝野を問はず政治家は、私慾に耽りて國を見ず、何時か皇國を富ますべき、見よ泰西の文物を、秩序正しく整ひて、國民富みて國強し、嗚呼吾邦土は富饒なり、唯其の人を得ざるため今や危険に陥れり。

明治寅子元旦

三白 井上甚太郎 謹書

井上文太

綾歌郡坂出町の人なり、爲人正直にして公益に竭くす所多し、初の區長、戸長後郡書記最後に坂出町長又郵便局長となり、旁ら赤十字事業日露戰役其他公職に盡瘁し、賞賜を受くること枚擧に遑わらず、大正二年九月四日歿す、年七十二。

井上耕作

氏は高松市七番丁の人、三藏の嫡男にして夙に世を見る才あり、將來産業の開發は銀行業の發展に待つべきの多きを識り、弱冠にして銀行業に身を投じ、刻苦精勵して遂に百十四銀行の取締役となり、又晩年は高松電燈株式會社取締役、高松軌道監査役、高松木材株式會社取締役、高松製紙會社監査役、片川電氣取締役、高松農業倉庫長等となりて産業の開發に盡瘁するところ多く、又商業會議所會頭、市會議員等となりては市政及商業發展のため大いに努め、大正十三年讃岐貯蓄銀行の創立されるや常務取締役となりて、市民の勤儉貯蓄涵養のために力める等その功績多かりしも、大正十四年六月十八日宿痼の襲ふところとなりて、享年五十一歳を以て歿す。

井口 鼎

小豆郡淵崎村の人、本村上庄の醫家井口勝延の男にして、幼名源吉、字は太沖と曰ふ博く漢學に通じ又篤く佛法を信ず、父に繼ぎて刀圭を業となすや名手の聲遠く聞ゆ、曾て邸前の道路駄馬を引き高聲を以て唱歌するものあるを聞き傍人に云ふて曰く慙むべし、彼の放聲者何日發病して幾日に死亡せんと果して其の言の如ありしと毎に一度病を診察せば其の言に違はざりしと傳ふ、名醫といふべし。寶歷十三年十月九日卒す年七十五。

(小豆郡史)

猪熊千倉

は本姓をト部兼古ウラベと云ひ京都平野神社第二十八世の祠官たり、ト部氏は其の祖を日良麻呂といひ文徳天皇齊衡の頃、神祇官の官人となり子孫世々神道の宗家と稱せらるゝに至れり、此の家また代々國學の大家を出し、殊に鎌倉時代の兼方は釋日本紀の撰者として知られ、世にト部氏を日本紀の家と稱するは之が爲なり、而してト部氏は猪熊吉田兩家に分れ、猪熊家は嫡流にして世々平野神社預となり、吉田家は世々吉田神社預となれり。兼古は爾後平野社預を奪はれ單に神祇官に出仕するのみなりしが、寛文四年松平頼重が白鳥神社を再興するに當り、招かれて其の祠官となり、春秋の祭禮には下向せり、○兼古は國學及び神道に精通し、光圀の爲に大日本史の材料を供し又領内の士田所出羽寺門兵庫を遣して之に神典を受けしめた。千倉は寛文五年七月十一日源英公より祀田貳百石を受けたり、著書讃藩諸役所張紙寺社法令等あり。

猪熊兼魚

は千倉の子なり、父の志を繼ぎ國典に精しく水戸光圀の崇する處となれり、寛文元年十二月廿四日叙従四位、されど祠官たらずして終はれり。

猪熊兼慶

は兼魚の子にして祖父千倉の職を襲ひ、白鳥宮神主として貞享二年より讃岐に移住して、子孫連綿として家職を繼承して今日に及べり、延寶四年十二月九日叙従五位上宮内少輔、後隱居して元トと號せり、弟に兼充あり寛永六年六月に分家して藤井家を立てた、此れが今の藤井行徳子の祖先なり。

猪熊慶歡

は慶禮の子なり、有職故實歌學に達したり、天保末年頃の人。

猪熊方主

は慶歡の弟にして其養嗣子となり、神職を襲ふ國、漢學に通じ又書を能くす、○著書榮屋筆記、遊部考等あり、明治十年頃に歿す。

猪熊全昌

名は全昌、號翠園又擢秀園、全門の子なり、詩書歌を能くす。○著書、擢秀園詩稿、

野詩草稿、翠園遺文等あり。

和田のはら波しつげりな難はづに君かみふねのはてん日までは

猪熊竹谷

名秋彦、號竹谷、方主の子、○和漢學に通ず、書は越後の人半山に學ぶといふ。明治十一年歿す、年四十三。

外に卜部冬部と云ふ三冬の門人があるが或は此人の事か後考をまつ。

猪熊夏樹

初千枝、舍人と稱す、後今の名に改む、慶歡の二男なり、幼にして虚弱舊臣の家に養はれ高松藩の碩學友安三冬、友部方秀、中村尙輔等に就き學を受け、一見愚の如くなりしも諸遊藝に通じ、傍ら一日として讀書を廢せざりしが或日佛書を繕き飄然覺る所あり、茲に於て遊藝を退け専心國學を研究し、後翁の上書に依りて京都に白峰神社御造營遊ばさるや明治元年九月其神職と成り、明治五年伊勢大廟太神樂の改正取調べを命せられ立案し、目下行はる祭式即ち是なり、嘗て籠手田滋賀縣知事は縣下の者に國家を進めんと欲したりしが、翁が忠愛の精神を深く愛して翁を聘したり。又千金を擲

ちて翁を聘せんとする者あるも、翁は教育に従事するものは何處にても可なり、金錢の高きを論せんやと斥けたり。明治四十五年一月十日御講書始に古語拾遺を進講したり、又賀陽宮邸に參候して常に國書を進講し、其他皇典研究所向陽會講師、弘道會支會長其他多數の會に關係せり、翁の現職は京都府立第一高等女學校教諭にして、御歌所參候を兼ね從七位勳六等たり、翁は大行天皇御不例を耳にするや恐懼措く所を知らず直ちに宅に祭壇を設け、御平愈の祈願を續け居たるが遂に七月廿九日病床に就き加養せしも遂に病革り、明治四十五年八月七日溘焉として逝けり、享年七十八危篤の報天聽に達するや八日特旨を以て位一級を進め正七位に叙せられたり、因に翁の令息淺磨氏は文科大學講師にして有職古實の大家たり。○著書大和路の日記、都の青葉、瑞枝舎百首 ○述懐 冬枯の野への草葉にあらぬ身も人のしもにぞ朽果ぬべき

猪熊松雲

通稱は卯平、綾歌郡林田村の産、父の名を襲ひしものにして、元治元年十一月三日の生、書を竹井靜所に學び能くす、大正十三年頃歿す、年六十四。

井號索引

爲善(細谷) 畏轍(牧)